修道

No. 75

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会
〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)241－6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp

目　次

学園だより
修道学園(中・高)同窓会、修道学園同窓会連合会合同幹事会及び評議員会記録 …1630
平成23年度新役員承認 …1632
修道学園(中・高)同窓会、修道学園同窓会連合会合同幹事会及び評議員会記録 …1633
100周年特別寄稿
同窓会創立100周年によせて … 浅野　長孝 …1637
「人間万事塞翁が馬」 … 上野　淳次 …1638
咲いた桜・散った桜 … 田中　正晴 …1639
昭和の修道生達 … 森信　毅 …1642
秋山先生を偲んで(蹴球部の創設者) … 林　孝治 …1643
修二会 … 下村　幸男 …1649
三上先生の想い出 … 河野富士雄 …1649
先生の想い出 … 鵜野　俊雄 …1650
恩　師 … 畠　眞實 …1651
「祝」修道学園同窓会100周年 … 森本　弘道 …1652
「質実剛健」が国を救う!! … 風呂　鞏 …1653
蹴球部の思い出 … 森田　哲朗 …1654
修道の思い出 … 高木　一之 …1655
修道の思い出 … 林　正夫 …1656
サッカーと温泉 … 大内　晟 …1657
わが修道交遊録 … 黒田　省司 …1659
柔道部の効用 … 市川　太一 …1660
修道20回　卒業生 … 伊藤　學人 …1661
修道との縁 … 木村　構臣 …1662
九修会の歩み … 石本　俊亮 …1663
修道の愛校心と強力ネットワーク … 延原　浩 …1664
修道の人たち … 中村靖富満 …1665
今、思い起こされる教材 … 衝道　武司 …1665
修道の思い出 … 金子　慧 …1666
教員駆け出しのころ … 木元　俊雄 …1667
同窓会会報誌『修道』寄稿 … 久保　敬信 …1669
駆け出しの頃 … 高橋　俊夫 …1669
心に残る修道同窓生の思い出 … 仲井　正美 …1670
学園は青春の広場 … 田中　清治 …1671
校外教育に関する研修の思い出 … 保澤　治 …1672
修道での44年 … 吉崎富士雄 …1673
支部だより
九州地区同窓会(九修会)開催報告 … 近藤　豊 …1674
広島市修道会 … 八木　彰一 …1676
2011年度修道学園同窓会関東支部のつどい … 松尾　暢泰 …1677
修道医会平成23年度(第55回)総会報告 … 井内　康輝 …1679
修道歯科医会 活動報告 … 毛利　雅哉 …1680
平成23年修三会総会「会長挨拶」 … 大西比呂志 …1681
同期会報告
四期会報告 … 河野富士雄 …1683
第32回修道中学3年6組クラス会報告 … 浅木　稔之 …1684
修九会報告 … 柏原　弘 …1685
春は「花見会」,夏は「暑気払いビアパーティ」 … 三宅　恭次 …1687
修道16回同期会報告 … 吉本　泰宏 …1688
修道を卒業して45年の月日がたちました … 三村　邦雄 …1690
23回生卒40周年同期会、修道他にて開催 … 山下　江 …1691
23回卒同窓会参加あれこれ … 橋谷　秀雄 …1692
同期会報告 … 大成　浩二 …1693
ＯＢ会報告
修寿会発足 … 小田　和磨 …1695
特別寄稿
「十竹軒日記」戊子 明治廿一年(1888年)一月から四月まで … 畠　眞實 …1696
学園だより
スクバンＯＢ大奮闘　野球班16強に大きな後押し …1706
事務局だより …1707
訃　報 …1707

同窓会ニュース

修道学園(中・高)同窓会、修道学園同窓会連合会 合同幹事会及び評議員会記録

日　時：平成23年３月29日（火）18：30～19：30
場　所：ホテルセンチュリー21広島　３階　プラド（広島市南区的場町1-1-25）
議　題：
≪評議員会≫
　１．幹事及び監査の選出について
≪幹事会≫
　１．役員の選出について（中・高、連合会）
　２．会誌名簿委員の委嘱について（中・高）
　３．学園評議員・理事候補の選出について（連合会）
　４．同窓会創立100周年記念事業及び記念同窓会について（中・高）
　５．平成23年度予算案について（中・高、連合会）
　６．平成23年度同窓大会の開催について

出席者
（幹事・監査）

大下　龍介	大田　哲哉	髙木　一之	土井　洋二	貫名　賢	伊藤　學人	松田　弘
廣谷　清	中村靖富満	上野　淳次	脇浦　則行	河野　徳男	下村　幸男	大西比呂志
奥窪　和夫	山下　泉	大塚淳八郎	横田　守	天倉　康博	今井　誠則	笹野　正明
藤居　道正	河口龍太郎	中本　高明	中本　憲治	福原　俊二	久保田文也	和田　章宏
蔵田　修	仮田　典久	新藤幸次郎	中島　弘規	川崎　博行	井上　徹	久保　康治
大方幸一郎	北村　直幸	田戸　亨	西田　天次	佐野　智	西尾　尚士	住田　進
小川　文象	名和原　寛	田村　勇太	山本　繁生	吉田只五郎	庄子　佳良	篠原　敦子
谷本　圭一	江川　準一	堀内　武彦	佐々木慶市	酒井　一成		

（評議員）

天野　和人	河本　武彦	石本　芳郎	両祖　勝	奥本　博	坪田　幸雄	林　孝治
大石　武敏	西田　頼信	正本　良忠	河野富士雄	國田　昌之	佐伯　正司	古本　稔
渡辺　浩其	田中　博司	渡　義治	畠　眞實	山木戸道郎	古村　良雄	井上　武彦
小林　達彌	折出　郁三	先家　裕司	内藤　慎吾	安田　邦男	大谷　宏明	池本　章
小方　博	真田　昌治	坂田　恵希	黒杭　昭夫	西村　弘	熊野　澄雄	貫名　徹
高橋　直昭	森本　訓	堀江　淳	森吉　努	熊野　眞	畠山　進	中村　幸信
羽井　紀行	松枝　俊博	沖　清	菅野　康則	二森　寛	堂本　高義	大西　龍夫
田中　昭洋	三宅　章文	大谷　浩司	土屋　博行	宮内　透	冨田　恵治	杉川　聡
橋本　郁朗	松井　茂幸	三浦　陽治	若宮　信二	松井　直也	久保田貴八郎	諏訪　昭浩
高田　祐司	武士末　修	児玉　哲	鵜野　徳文	樫原　一成	木村　太言	熊谷　宏
錦織　慶典	松本　仁志	木原　康裕	石田　誠治	大武　幸夫	織田　和也	海生　知亮
池田　勝彦	桒本　潤	大成　浩二	藤原　竜太	筒井　直樹	香月　孝史	西村　昌浩
金島　茂則	中野　賢治	井東　康三	加藤　徹	北山　雅之	藤野　亮	前川　拓也
丸吉　忠輔	土井　康資	下郷　荘平	福知　基弘	三宅　正明	緒方　直之	伏見　光暁
佐伯　誠治	齋藤　正明	谷口　佳陽	田中　充成	高本　和也	白井浩一郎	土岡　賢史
堂本　英伸	山田　幸治	吉村　誠司	住野　守	諏訪　正浩	前　博行	清原　周平
若宮　佑典	山口　剛史	藤岡　弓朗	猪花　祥雄	沖村　祐紀	内藤　貴明	越智　基匡
村岡　裕之	花木　隆志	坂谷　健太	小田　俊彦	宮本　健吾		

≪事務局≫
若宮　寿仁　　石井健二郎　　田中　佳樹　　近川　俊冶　　杉田　浩光　　安竹　和彦　　大橋　康雄
森井　啓冶　　徳崎　晴香

議事及び審議の結果
議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同評議員会・幹事会を開催する旨の宣言がなされた。
大下龍介同窓会連合会会長から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

≪評議員会≫
議案
１．幹事及び監査の選出について
中・高同窓会の幹事、監査の選出について事務局より会則の説明が行われ、先立って開催された正副会長会議において検討された選出案（評議員会資料１）が提案され、審議の結果原案どおり承認された。
引き続き同窓会連合会の幹事、監査の選出について事務局より会則の説明が行われ、正副会長会議において検討された選出案（評議員会資料２）が提案され、審議の結果原案どおり承認された。

≪幹事会≫
１．役員の選出について
中・高同窓会の会長、会長代理、副会長の選任について事務局より会則の説明が行われ、正副会長会議において検討された選出案（幹事会資料１）が提案され、審議の結果原案どおり承認された。
続いて同窓会連合会の会長、会長代理、副会長の選任について事務局より会則の説明が行われ、正副会長会議において検討された選出案（幹事会資料２）が提案され、審議の結果原案どおり承認された。
２．会誌名簿委員の委嘱について
中・高名簿委員については、会長の委嘱事項となっており、正副会長の意見を聞き別紙（幹事会資料２）の方々にお願いする旨の報告がなされた。
３．学園評議員・理事候補の選出について
学園評議員、理事候補の選出について、正副会長会議において検討された選出案（幹事会資料４・幹事会資料５）が提案され、審議の結果原案どおり承認された。
４．同窓会創立100周年記念事業及び記念同窓会について
このことについて、貫名担当副会長より資料（幹事会資料６）の説明がなされ審議の結果原案どおり承認された。
５．平成23年度予算について
○平成23年度修道学園（中・高）同窓会予算について
平成23年度修道学園（中・高）同窓会資金収支予算書（案）（幹事会資料７－１）について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、入会金849,000円　終身会費1,981,000円　名簿売上代110,000円　預金利息150,000円　雑収入150,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　名簿作製引当特定預金からの繰入収入1,000円　陶板画レプリカ売上代150,000円　小計は3,392,000円となり、前年度繰越金31,109,000円を合わせると、収入の部の合計は34,501,000円となる。支出の部は、事業費2,301,000円（内訳：名簿作製費1,000円　激励費750,000円　同窓大会補助金200,000円　卒業記念品料800,000円　その他の事業費550,000円）業務費1,630,000円（内訳：会議費400,000円　通信費350,000円　慶弔費280,000円　諸費600,000円）その他の支出380,000円（内訳：連合会　分担金283,000円　事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）予備費500,000円　小計は4,811,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は29,690,000円となる。支出の部の合計は34,501,000円となる。

○平成23年度修道学園同窓会連合会予算について
平成23年度修道学園同窓会連合会資金収支予算書（案）（幹事会資料７－２）について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、分担金1,480,000円　預金利息80,000円　雑収入1,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　小計は1,562,000円となり、前年度繰越金16,259,000円と合わせると収入の部は17,821,

000円となる。支出の部は、事業費600,000円　業務費630,000円（内訳：会議費260,000円　通信費120,000円　慶弔費160,000円　諸費90,000円）その他の支出81,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出80,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）予備費500,000円　小計1,811,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は16,010,000円となる。支出の部の合計は17,821,000円となる。

以上、（中・高）同窓会予算および同窓会連合会予算は審議の結果原案どおり承認された。

6．平23年度同窓大会の開催について

広島修道大学大学院同窓会からの報告

6月18日（土）ＪＡＬシティ広島にて開催する旨の報告がなされた。

修道学園（中・高）同窓会からの報告

9月3日（土）リーガロイヤルホテル広島で開催する旨の報告がなされた。

広島修道大学同窓会からの報告

11月5日（土）リーガロイヤルホテル広島にて開催する旨の報告がなされた。

以上

同窓会ニュース

平成23年度新役員承認

平成23年3月29日
修道学園同窓会連合会、修道学園（中・高）同窓会幹事会

修道学園(中･高)同窓会名誉会長･会長･会長代理･副会長

任期は平成23年4月1日から3年間。

職　名	名　前	卒業回数
名誉会長	森本弘道	高 7
	大下龍介	高 7
	大田哲哉	高 11
会　長	高木一之	高 10
会長代理	深山英樹	高 12
副会長	貫名賢	高 14
	伊藤學人	高 20
	松田弘	高 24
	廣谷清	高 28
	中村靖富満	高 30
	大方幸一郎	高 38

修道学園同窓会連合会名誉会長・会長・会長代理・副会長

任期は平成23年4月1日から3年間。

職　名	名　前	卒業回数
名誉会長	森本弘道	高 7
会　長	大下龍介	高 7
会長代理	高木一之	高 10
副会長	上野淳次	大商 3
	勝浦則行	大院 1

修道学園（中・高）同窓会会誌名簿委員

任期は平成23年4月1日から3年間。

辞　任　土井　洋二　（高校12回）
　　井東　康三　（高校40回）
新　任　大方幸一郎　（高校38回）
　　中村靖富満　（高校30回）
　　西村　昌浩　（高校39回）
　　浜田　茂　（高校49回）

修道学園（中・高）同窓会会誌名簿委員

委員長	大方幸一郎	高 38
委　員	山本一	高 19
	穴田一善	高 20
	三浦陽治	高 28
	仮田典久	高 31
	川崎博行	高 34
	西村昌浩	高 39
	浜田茂	高 49
担当副会長	中村靖富満	高 30

修道学園評議員

修道学園評議員候補者は、次のとおりとしたい。

職名	名前	卒業回数
評議員	河野徳男	旧中34
	高木一之	高 10
	山下泉	高 7
	大塚淳八郎	高 8
	大田哲哉	高 11
	深山英樹	高 12
	貫名賢	高 14
	上田宗冏	高 16
	伊藤學人	高 20
	松田弘	高 24
	加藤省吾	大商1
	上野淳次	大商3
	岸英雄	大商4
	松井敏	大商11
	堀内武彦	短一4
	林春樹	短二5
計	16 名	

修道学園理事

修道学園理事候補者は、次のとおりとしたい。

理事	大田哲哉	高 11
	高木一之	高 10
	上野淳次	大商3
	岸英雄	大商4

同窓会ニュース

修道学園(中・高)同窓会、修道学園同窓会連合会合同幹事会及び評議員会記録

日　　時：平成23年5月30日（月）18：30～19：00
場　　所：ホテルセンチュリー21広島　3階　プラド
議　　題：1．平成22年度修道学園同窓会連合会収支決算について
　　2．平成22年度修道学園（中・高）同窓会収支決算及び
　　平成22年度修道学園（中・高）同窓大会収支決算について
　　3．修道学園同窓会連合会会則の改正について
　　4．修道学園同窓会連合会幹事の選任について
報告事項：1．修道学園（中・高）同窓会創立100周年記念事業について
　　2．修道学園（中・高）同窓大会・支部総会及び同期会の開催について
　　3．その他

出席者（158名）
【幹事・監査】（46名）

大下　龍介	高木　一之	貫名　賢	伊藤　學人	松田　弘	廣谷　清	中村靖富満
大方幸一郎	上野　淳次	脇浦　則行	船倉　智雄	蔵田　修	中島　弘規	両祖　勝
奥窪　和夫	大塚淳八郎	横田　守	桐林　正樹	山根　恒弘	藤居　道正	笹野　正明
山本　一	中本　高明	福原　俊二	和田　章宏	仮田　典久	新藤幸次郎	佐々木　明
川崎　博行	井上　徹	北村　直幸	田戸　亨	西田　天次	西尾　尚士	田中健太郎

青野　大輔（上垣内代理）　小川　文象　名和原　寛　大辻　健介　内藤　貴明　庄子　佳良
篠原　敦子　江川　準一　畑尻　隆司　佐々木慶市　酒井　一成

【評議員】（112名）

河本　武彦	奥本　博	山村　一石	坪田　幸雄	林　孝治	大石　武敏	栗本　元
河野富士雄	佐伯　正司	中村　陽一	山崎　経男	渡辺　浩其	諏訪　惇	田中　博司
渡　義治	桑原　正彦	山木戸道郎	叶原　一然	小林　達彌	折出　郁三	先家　裕司
内藤　慎吾	安田　邦男	大谷　宏明	藤高　一男	東　水豊	小方　博	西元　義昭
増本　光雄	坂田　恵希	福永　武顕	原　徹	黒抗　昭夫	豊島　重文	貫名　徹
菅田　巌	高橋　直昭	森本　訓	森吉　努	三村　保博	穴田　一善	中村　幸信
成田　力俊	羽井　紀行	藤居　清正	菅野　康則	二森　寛	堂本　高義	大西　龍夫
島村　誠	中村　誠吾	佃　政治	山下　江	砂原　克規	吉村　圭司	井室　恒司
峠田　栄司	大谷　浩司	柴崎　雅雄	森上　忠信	山下　勇治	木之上　馨	上田　大輔
土屋　博行	富田　恵治	沖野　恒巳	橋本　郁朗	松井　茂幸	若宮　信二	松井　直也
高田　祐司	武士末　修	日下　智晴	児玉　哲	楠田　一夫	樫原　一成	錦織　慶典
松本　仁志	石田　誠治	大成　浩二	藤原　竜太	筒井　直樹	蔵本　憲	香月　孝史
栗田　英樹	西村　昌浩	船倉　正	菅川　洋	金島　茂則	中野　賢治	伊東　康三
加藤　徹	北山　雅之	土井　康資	福知　基弘	三宅　正明	緒方　直之	伏見　光暁
谷口　佳陽	浜田　茂	大西　邦彦	道中　真宏	山田　英輝	清原　周平	若宮　佑典
浜中　孝喜	越智　基匡	坂尾　俊宜	猪花　祥雄	花木　隆志	坂谷　健太	宮本　健吾

《事務局》
近川　俊治　若宮　寿仁　安竹　和彦　森井　啓治　澤田　枝奈　友田　孔平　島本佳代子

議事及び審議の結果：

議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

事務局から修道学園同窓会連合会会則第8条に規定する幹事の過半数の出席があり、所定の定足数に達したとの報告があった。

審議に先立ち、慣例により高木連合会会長代理が議長となることが了承された。議長挨拶の後、議案の審議に入った。

議　案

1．平成22年度修道学園同窓会連合会収支決算について

事務局より、平成２２年度修道学園同窓会連合会資金収支決算書（資料１）について説明がなされた。

収入の部は、分担金1,489,000円、預金利息56,358円、雑収入０円、事業基金引当特定預金からの繰入収入０円、小計1,545,358円となり、前年度繰越金17,403,885円を合わせると、収入の部の合計は18,949,243円となった。支出の部は、事業費648,900円、業務費491,447円（内訳：会議費112,759円、通信費127,303円、慶弔費161,500円、諸費89,885円）、その他の支出56,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出56,000円、名簿作成引当特定預金への繰入支出０円）予備費０円、小計1,196,347円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は17,752,896円となった。支出の部の合計は18,949,243円となった。

続いて貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金7,954,298円、名簿作製引当特定預金506,337円、一般会計預金17,752,896円となった。負債・正味財産の部は、正味財産が合計26,213,531円となっており負債はない。

続いて、船倉監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

本同窓会連合会決算については、全員異議なく承認された。

２．平成22年度修道学園（中・高）同窓会資金収支決算について

事務局より、平成22年度修道学園（中・高）同窓会収支決算書（資料２－１）について説明がなされた。収入の部は、入会金864,000円、終身会費2,016,000円、名簿売上代4,788,000円、預金利息148,541円、雑収入780,111円、事業基金引当特定預金からの繰入収入０円、名簿作製引当特定預金からの繰入収入０円、陶板画レプリカ売上代150,000円、小計8,746,652円となり、前年度繰越金26,114,819円を合わせると、収入の部の合計は34,861,471円となった。

支出の部は、事業費が2,231,363円（内訳：名簿作製費０円、激励費720,000円、同窓大会補助金200,000円、卒業記念品料849,888円、その他の事業費461,475円）、業務費が1,129,964円（内訳：会議費289,109円、通信費284,380円、慶弔費257,750円、諸費298,725円）、その他の支出が384,000円（内訳：連合会分担金288,000円、事業基金引当特定預金への繰入支出が96,000円、名簿作製引当特定預金への繰入支出0円）となった。支出超過額402,852円は、予備費を充当した。その結果、支出小計は3,745,327円となり、これを収入合計から差し引いた結果、次年度繰越金は31,116,144円となった。支出の部の合計は、34,861,471円となった。

次に貸借対照表についての説明が行なわれた。資産の部は事業基金引当特定預金19,616,578円、一般会計預金は31,116,144円となっている。負債・正味財産の部は、正味財産の合計が、50,732,722円となっており負債はない。

続いて平成22年度修道学園（中・高）同窓大会について、中村副会長より報告があった後、内藤貴明同窓大会世話人より平成22年度修道学園（中・高）同窓大会決算書（資料２－２）についての説明がなされた。収入の部は、補助金200,000円、大会誌広告協賛4,590,000円、会員券裏面広告協賛150,000円、会員券売上4,310,000円、寄付金180,400円、預金利息202円となり、収入の部の合計は9,430,602円となった。

支出の部は、大会誌作成費1,751,400円、大会運営費4,845,215円、その他1,510,292円、広告宣伝費173,250円、事務費119,908円、通信費201,466円、交通費72,963円、会議費420,369円、振込手数料121,800円となり、支出合計は9,216,663円となった。収入総額から支出を差し引いた結果、余剰金は213,939円で平成２３年度において本会計へ繰り入れる予定である旨の説明がなされた。支出の部の合計は、9,430,602円である。

続いて、中島監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

中・高同窓会及び同窓大会決算は、全員異議なく承認された。

３．修道学園同窓会連合会会則の改正について（事務局から報告）

資料３「修道学園同窓会連合会会則の改正について」に基づき、事務局から説明がなされた。
主な内容は次のとおりである。

修道学園同窓会連合会会則第８条においては、副会長は４名をおくこととなっているが、第９条第１項第２号では、副会長は３名となっている。規定上齟齬をきたしているので、第８条の副会長を３名に改正する。

また、広島修道大学大学院の卒業生が2011年３月の時点で１千名を超えている状況にあり、幹事定数を増員してもらいたいとの要望があるので、幹事の定数を現在の２名から３名に１名増員する。これにより幹事の総数は58名から59名に増員となり、あわせて関連条項を改正する。

本議案については、審議の結果、原案どおり承認された。

４．修道学園同窓会連合会の幹事の選任について（事務局から報告）

資料４「修道学園同窓会連合会の幹事の選任について」に基づき、事務局から説明がなされた。
主な内容は次のとおりである。

広島修道大学大学院の幹事の１名増員に伴い、大学院７回卒業の石井健二郎氏を新たに選任するものである。任期は平成23年５月30日から平成26年３月31日までとする。

本議案については、審議の結果、原案どおり承認された。

報告事項

１．修道学園（中･高）同窓会創立100周年記念事業について

資料５「修道学園（中・高）同窓会発足100周年記念事業について」に、基づき、貫名副会長から説明がなされた。

主な内容は次のとおりである。

同窓会組織の活性化策として、幹事・評議員・各支部のできるだけ多くの人に同窓大会に出席してもらうため、今後も「声かけ運動」を継続して行っていく。また、支部との情報交換も活発に行っていきたい。

９月３日の同窓会当日は、12時から修道中学校・修道高等学校で「ホームカミングディ」を行う。ホームカミングディの企画として、①修道の歴史についての畠元校長の講演を予定している。また、②同窓大会の前、５時30分から三浦　惺（さとる）氏《ＮＴＴ代表取締役社長》による講演会を予定している。また、③100周年記念事業として「御三の蔵」の復元を考えている。

また、同窓大会について、越智代表世話人から説明がなされた。

① 現在の修道と過去の修道を比較したＶＴＲを作成している。

② くじ引き大会を実施する。

③ ノベルティーを作成し、配布する。

④ 同窓大会誌の広告欄に同期会の枠を設けたので、同期会の広告を載せてもらいたい。

⑤ 大会誌充実につとめていきたい。

２．修道学園（中・高）同窓大会・支部総会及び同期会の開催について

資料６「修道学園（中・高）同窓大会・支部総会及び同期会の開催について」に基づき、事務局より説明がなされた。

以上

平成23年３月29日合同幹事会・評議員会

平成23年５月30日合同幹事会・評議員会

100周年特別寄稿

同窓会創立100周年によせて

学校法人 修道学園
名誉学園長　浅　野　長　孝

平成23年度修道学園（中・高）同窓大会の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。並びに本年は同窓会100周年を迎えられたこと、重ねてお祝い申し上げます。

一言で100年と申しましても決して短い時間ではありません。同窓生も約３万名に達すると伺いました。そしてそれぞれ進まれた道で大きなご活躍をなされているとのこと、誠に悦ばしい限りでございます。こうした卒業生の皆様個々のご活躍と、学園の歴史が相俟って、伝統校としての評価が備わっていくのでしょう。今後の更なるご発展をお祈り申し上げます。

さて、現在の修道学園の基を築かれたのは、申すまでも無く山田十竹先生です。先生は若年より芸州藩学問所において学び、後に教授となり、特に慶応２年（1866）には江戸へ留学させる洋学生50名を引率すべく藩命を受けております。先生は学問所を通して広島の若者の教育に力を注がれたです。しかし明治４年（1871）の廃藩置県により、学問所（藩校修道館）は休校となりました。山田先生も広島を離れられました。

その後、明治政府は条約改正を企て欧化政策をとったため、広島では儒学を基とした教育を施す学校が姿を消しました。このことを残念に思った浅野長勲は、明治11年に浅野学校を開き、藩校の伝統を受け継いだ教育を行おうとしたのです。長勲は明治14年に山田先生を招き教育の充実を図りました。先生の努力により浅野学校は県内でも有数の学校となり、名も修道学校と改めたのです。しかし、明治18年学制改革の実施にあたり、千田県令より県立学校の充実への協力を求められた長勲は、修道学校の閉鎖を決断しました。こうして浅野家の運営した修道学校は幕を下ろしたのです。学校長であった山田先生は、修道学校の閉鎖を惜しみ自ら修道学校を運営、教育を続けました。「創業は易く、守成は難し。」という言葉がありますが、山田先生は、まさに「守成は難し」を身をもって体現されたといえるのではないでしょうか。

こうした先人の思い・努力を受け止めつつ、修道学園を永く後世へと伝えていけるよう、共に頑張ってまいりましょう。

本日は、誠におめでとうございます。

100周年特別寄稿

「人間万事塞翁が馬」

修道学園同窓会連合会
副会長　上　野　淳　次

このたびは、修道学園同窓会が100周年を迎えられ、心からお慶びを申し上げます。僭越ながら、私と修道との思い出を紐解いてみたいと思います。

私は、大学商学部３回生卒で、在学中は硬式野球部に所属していました。当時は大学ができたばかりのころで、みんながパイオニアとして自分たちの手で大学を作ろうと、とにかくハングリー精神が強かったと思います。雨が降ると、すぐ水浸しになった観音キャンパスのグランドを、野球部、サッカー部、ハンドボール部などがみんなで場所を分け合いながら、汗を流した日々が懐かしく思い出されます。

そんな中、大学２年次に父親が他界し、退学を考えざるを得ない状況に陥りました。父親の死で長年やってきた自営業を廃業することになり、私は大学を退学して働く決意を固め、心から師事していた野球部監督の伊賀一人教授のところへに相談に行きました。

恩師の第一声は、「君はそれでも男か！」でした。続いて、「親が子より先に死ぬのは順番というものだ。男は成人すれば自立しなければならない。君の場合、それが少々早かっただけのことだ。志を途中で捨てるのは男として最低だ。最後までやり遂げろ！」と、激しく一喝されました。

それは激励というよりは罵倒に近いもので、私は一瞬たじろぎました。しかし、私はその言葉に発奮し、悔しさをぶつけるようにそれから猛烈に勉強して特別奨学金を受給し、学費に充てました。さらにアルバイトもして、生活費を稼ぎました。

２年間がむしゃらに頑張り、いよいよ卒業を控えた22歳の春に、交際していた現在の妻と結婚し、名実ともに自立しました。ところが、その頃の日本経済は、東京オリンピック景気の反動で、鉄鋼不況、証券不況が重なって大変な就職難の年であり、私は就職を諦めて、アルバイトの経験を活かして簿記学校（塾）を開設しました。あれから45年が経ち、まことに小さな塾が開花して、現在の学校法人上野学園（専門学校７校の母体法人）にまで発展することができました。

中国に「人間万事塞翁が馬」という故事がありますが、本当に、人間、何が幸いするかわかりません。人は誰でも人生を振り返って見れば、その人の将来を決定づける転機というものがあるものですが、私の場合は、その大学時代の２年次（19歳）に父親と死別したことが、人生の分水嶺だと思っています。そして今日あるのも、修大で培ったパイオニア精神がなければ成し得なかったことであり、多くの仲間、恩師、協力者に恵まれたのが、何よりの幸運だったと自負しています。

世の中には、３つの縁があるといわれます。家族親戚の「血縁」、地域社会の「地縁」、そして学校の「知縁」です。私は現在、大学同窓会の会長を拝命しておりますが、同窓会は縁の宝庫であり、縁をつなぐ最高の舞台だと痛感しています。知縁のつながりは、仕事もプライベートも充実させてくれるものであります。知縁をどんどん活用して、社会でもっともっと修道同窓生に活躍して頂きたく思います。同窓生の頑張りが、母校を守り、発展させてくれるものと信じています。同窓生みんなの熱い母校愛が、修道の未来を実りあるものにして行くことと願って止みません。

100周年特別寄稿

誇るべき修道健児４人のへこたれぬ魂

咲いた桜・散った桜

田　中　正　晴（旧中38回）

昔の話。修道の寄宿舎で下記のものが同室で、この物語が始まる。

昭和19年４月８日現在　広島市南千田町　修道中学寄宿舎（敬称略）

学　年	氏　　名	生　年	入　学	出　身	
４年生	須　山　　徹	昭和３年	昭和16年	因　島	
３年生	勝　村　達　喜	昭和４年	昭和17年	三　原	
２年生	平　山　郁　夫	昭和５年	昭和18年	生口島	被爆者
１年生	岡　野　壮一郎	昭和５年	昭和19年	因　島	被爆死

寄宿舎舎監　妹尾萬右衛門（英語）　　副舎監　菅谷　林蔵（体操）

●須山（すやま）　徹（とおる）（倉敷市在住）

舎監の妹尾先生がイガグリ頭の１年生を連れて須山たちの部屋をノックした。

「おう、須山君、君と同じ因島の出身の岡野だ、君の部屋に配属するので面倒をみてくれよ」「はい」須山は前もって聞いていたのですぐ判った。

「まあ入れ」「‥‥」ぴょこんと頭を下げて何も言わない。でも利発そうに目はキラキラと輝いていた。無理もない、今朝早く暗いうちに汽車に乗り、初めて親から離れて腹は減っているし眠たいし「俺はどうなるんだろー」と不安で不安で岡野は言葉がでなかった。こうして昭和19年４月８日、この４人の人生の物語がはじまる。

最上級生の須山は、おとなしい性格で同室の下級生の面倒を良くみた。ちょっと見では怖い顔に見えたが、言葉は優しく勉強も良くできた。戦時中は学徒動員で、兵器廠で小銃弾を造っていたが、原爆の日（８月６日月）は、前日が休日だったので、因島実家に帰省していて運よく被爆しなかった。だが、その後、学校の復旧作業に参加し、秋から再開した修道で学び、高知県の師範学校を出て、郷里に近い尾道で学校の先生をしていたが、生徒指導の方針で教頭とぶつかり、いさぎよく退職して、父親が川崎汽船の船長だったので、その系列の川崎製鉄千葉製鉄所に入社。岡山、水島製鉄所の建設が始まると、その人事課で２万人に及ぶ人事の神様といわれるほど心血を注いで活躍した。しかし定年７年前より腎臓を病み（原爆の因果関係か？）、夜間人工透析を秘かに続けながら会社を１日も休まず勤めあげた。透析をつづけながら、左手にはウイスキーのコップを離さなかった。これもへこたれぬ修道魂か。奥さんは大変だったと思うが、内助の功でしっかりと支えて平成13年４月桜の花とともに散った。筆者も倉敷在住なのでお会いしたが、腎臓が悪くともウイスキーを愛し、自在闊達で悠々たる心の人だった。73歳永眠。奥さん正美さんは健在。

●勝村（かつむら）　達喜（たつき）（岡山市在住）

合格発表250名中４番の好成績で勝村は入学した。ちなみに１番は五領田春朗、筆者は152番。当時は成績は全部公示されていた。在学中も秀才組で、いつも級長をつとめていた。長身白皙、性格温厚。３年のとき学徒動員で広島、江波、三菱広島造船所で戦時標準貨物船Ａ型、特攻兵器回天の絞鋲部でリベットを打つ激しい重労働に耐え15歳の青春を燃やした。昭和20年３月海軍兵学校78期生（日本海軍最後の学生）で佐世保の近くの針尾分校へ入学。海軍兵学校といえば江田島だが、当時は士官大量養成のため、針尾分校ができていた。それで幸いにも原爆には遭遇しなかった。８月15日終戦で解散後、修道が心配で爆心地広島に入ったら、校舎はほとんど倒れ、寄宿舎は全棟ペッシャンコになって広くなった空を見上げて呆然とした。復学して岡山六高に学び、岡山大学医学部卒。胸部心臓血管外科が専門。昭和36年心臓の毛細血管の縫合技術を米国、バーモント州立大学で２年間留学して習得しプロフェッショナルとなり医師生活20年間に11,000人の心臓患者を救った。今、テレビで双眼鏡の

ようなものや、顕微鏡を使って細い血管手術などをしているドラマを見るが、その走りである。昭和49年川崎医科大学創設者川崎祐宣氏に請われて、川崎医科大学胸部心臓血管外科初代教授。昭和59年付属病院長（54歳）、病院長を11年在任、「親切、無欲、剛直」の気風を植え付け、教授として学生を教え、医師として診察手術を行い、病院経営の困難、難問を解決し、倉敷ロータリークラブ会長も歴任し社会貢献に励むなど３刀流、４刀流と敏腕をふるって活躍をつづけた。

次いで、川崎医科大学の学長に就任し、次世代をになう優秀な医師を育て、医師国家試験合格率が私学であるのに常に最上位（３位）にあるなど、名声を高めた。すごい実績である。その功績を認められて山陽新聞賞（学術功労）、岡山県文化賞（学術）を受賞した。勝村と筆者（同じ組であった）が会食したとき、弁当の蓋の裏についた飯粒を１粒、１粒丁寧に箸でつまんで勝村はゆっくりと食べた。筆者は頭が下がった。川崎医大の学長さんが･･･。現在も82歳とは思えぬ若さを保ち、川崎医大顧問、川崎医学・医療福祉学振興会理事長を頭脳明晰にこなしている。

さて寄宿舎では、４人が仲良く助け合って先輩後輩の絆がしっかりと培われていた。特に、寝床が隣の勝村と平山は、青雲の志と未来豊かな青春の夢を語りあって仲が良かった。朝７時には自習時間があり登校する前に予習する、そんな真面目な生活態度であった。私学校の修道の学生はよく勉強した。図画工作の山本四郎先生は「鬼」とあだ名される怖い厳しい先生である。平山は、その先生の宿題の絵が完成していない。宿題をサボることなどは、真面目な平山には到底できぬ恐ろしいことだった。見かねた隣の机の勝村が、絵のデッサン、色彩などの続きを手伝って完成させ滑り込みセーフで提出した。

『ふむー、これは良くできている』と、めったに生徒の絵を誉めたことのない鬼先生だったが、平山の天与の才がすでに輝いていたのを鬼先生が見抜いたこともすごいことだと思う。その絵は長いこと図工室に張り出されていて筆者も見た。

後年、平山は、『イヤー、あの絵は、ほとんど勝村さんが完成させたんですよー、』と謙遜した。すると、勝村にも絵の才能があることになる。愉快なエピソードであり、このことは、我われの間では伝説になっている。

いずれにしても勝村は、戦中、戦後をへこたれずに、たくましく咲きつづけている貴重な桜である。

●平山郁夫（ひらやま いくお）（鎌倉市在住）

あまりにも有名な平山画伯。修道の誇り。生口島瀬戸田町生まれ、瀬戸田といえば、ミカン、耕三寺、平山美術館、兄第９人、４男５女の上から３番目。長男の吉男は大正14年生、広島一中、東大法学部卒の秀才。兄のすすめもあって平山も広島一中を受験したが体操の鉄棒でしくじって落ちて修道に入った。頭の良い家系なのだ。修道は、そういう経歴の学生が多く筆者もその流れである。

平山の先祖は、承応３年（1654）に没した柴田孫左門と言われ賤ケ岳の戦いで豊臣秀吉に敗れた柴田勝家の孫だと寺の過去帳に書いてあり、どうして北陸の柴田が、瀬戸内海の温暖な島にたどり着いたのか解からぬが、菩提寺には、その孫左門のお墓をはじめ、代々の何十墓もの墓が並んでいた。檀家総代を務めるなど信仰心の厚い環境で育った。また、母方の大伯父清水南山（東京美術学校卒、当時有名な彫金家）の強い影響を受け、平山も東京美術学校日本画科へ進学し前田青邨（まえだせいそん）という当世一流の師にめぐりあえる。人生とは縁である。ここで平山の一生が決まることになる。ところが、良い師に恵まれ、向学の志は強かったが、男盛りの10数年間原爆症（白血病）にかかり、食欲もなく、どうき、目まいで寝たり起きたり、それで収入が無く、美術学校の同級生の妻、松山美知子（首席卒業）が働き、睦荘という８畳１間の安アパートで病気と闘いながら子守をし、気分が良い短い時間に絵を画く時代が長く続く。へこたれずに････。そして苦節10年「仏教伝来」を描きあげて、一躍画壇に踊りでた。それから次々と調子がでて、うれしいかな体調もだんだん良くなって、いい作品を逐次発表し、画壇で不動の地位を占めていく。詳しいことはパソコンで検索していただくとして、アフガニスタン、シルクロード、カンボジア、アンコールワットなどの仏蹟の取材、修復保存の第１人者であり、その足跡は、中国、韓国、北朝鮮にも及んだ。北朝鮮は簡単に入国滞在できるものではない。招聘されて遺跡の調査保存を任された。その各国の踏破がすべて絵になった。出身母校の東京芸術大学学長、仏レジオン・ド・ヌール勲章、仏コマンドール勲章、仏ジェームズ・スミソン賞受賞と芸術の国フランスにも認められ、フィリピンのマグサイサイ賞、日本最高の文化勲章も受賞。素晴らしい実績で、満開の美しい桜であった。

話はもどる。昭和20年８月６日、中学３年、平山は学徒動員で、広島兵器廠にいた。朝８時15分、爆音がしたので空を見上げたら、Ｂ29が飛行機雲を引いてキラキラと光って上空に入ってきた。空襲警報も出ないし、サイレンも鳴らない、そして高いところで落下傘が開いた。「変なものが落ちてくるなー」いつか空を舞った宣伝ビラ『抵抗をやめよ』かなーと思ったりもして、弾薬箱を作る木材を持って小屋の中に入った瞬間「ピカッ」と大

閃光で目の前が真っ白になり、次に熱線が身を包んだ。熱いと半袖の身をかばった。今度は、大音響とともに猛烈な爆風が体を浮かせ、小屋中を転げまわった。一瞬の差でやけどもせず、血も出ず、埃で体がザラザラし帽子が飛んだだけだった。耳は何も聞こえず、無声映画のように周りの風景がボロボロに壊れ、爆風とともに散っていった。外にいた軍人、女子挺身隊は火傷して、皮膚がめくれてたれ下がり、ガラスが体中に食い込んでいる人もいた。火が燃え広がり、煙が充満して阿鼻叫喚の地獄絵図を見た。しかし、平山は一瞬の差で助かり強運であった。そのむごい悲劇的惨状を『広島生変図』という原爆の炎の図で表現し、一大センセーションを巻き起こした。脳裏から離れぬ劫火、朱で、赤で画面いっぱいに燃やし、右上に目玉をカッと見開いた憤怒の相の不動尊を配して原爆否定の象徴とした。

平山は、この絵を描き終わって、何かを吐きだした気がした。

筆者が水泳部の（cp）キャプテンのとき、１級下の水泳部員の金森が『田中さん、こいつ、よう泳ぐですよ』と、級友の平山をプールに連れてきた。泳がしてみると背泳が速い。平山の生家は、まわりが海で、赤子のときから泳いでいて、小学校のとき優勝したこともあるとか。修道の水泳部はサッカー部（cp 木村静人、新宅哲吾）と共に中国地区では鳴らしていた。だが、背泳が弱かった。即日、入部を許可した。平山はねばり強い性格で、へこたれず、もくもくと泳いで練習を積み重ね、いい選手に仕上がっていた。練習が終わると、母が乏しい材料で作ってくれた、７分づきの米（白米ではない）５、麦３、オカラ２のボロボロの握り飯を平山と分け合って頬ばった。食料難の時代だったので、我われはいつも空腹だった。後年、平山と会ったとき、『田中先輩、あの握り飯の有り難さは、今でも忘れていませんよ、お母さんは、お達者ですか』と、何度も握手してくれた。母は健在だったので、そのことを話すと、『あの有名な平山さんが･･･』と、感激して嬉がった。しかし、戦時体制と、学徒動員に狩り出されて休部となり、水泳大会も中止、平山の出番はなかった。今でもコンビニで握り飯を買うと、平山と母を思いだす。

桜は、いつかは散る。でも、平山桜は、日本のためにも、あと10年、いや５年でいいから咲き続けさせてやりたかった。残念！！

平成21年12月２日。きれいな色で散ってしまった。79歳永眠。

●岡（おか）　野（の）　壮一郎（そういちろう）（尾道市因島在住）

因島は村上水軍、島は、村上と岡野姓が殆んど。おまけに囲碁の本因坊秀策の生誕地。囲碁が盛ん。歴史の古い町。その島の大地主の坊ちゃんで何不自由なく育った。古川屋という屋号で建具商、祖母と母が商い、裕福な資産家。父は早稲田大学を出て陸軍中尉（壮一郎と小学校同級生、白滝山荘、矢田部氏談）岡野は、昭和19年８月、１年生の夏休みで帰省し、家族に寄宿舎生活、学校の様子を話して聞かせた。同室の須山さんは親切で、平山さんは、腹がすいてるときは、絵を描いていたら、紛らわせると色鉛筆を走らせておられた。勝村さんには、勉強を教えてもらって、寄宿舎生活は快適で楽しく満足していると。学校は、国崎登中将が校長で、ぱっと敬礼するのが、お父さんと同じで格好がいいよ。また、制服の両袖に白線が１本入っているのが、修道の生徒とすぐわかり、いつも、しゃんとしておらねばいかんのよ、これは修道の誇りなんよ。祖母と母は目を細めて聞き入って、妹たちは、それから、それからと、次々と聞きたがった。（同級生赤尾四郎氏談）家の庭の木陰で涼しい風を受けながら、『ジョン万次郎漂流記』『森鴎外全集』を読んで夏を楽しんだ。寄宿舎の大豆めしや、おじやと違って、食事は腹いっぱい食べられるし、やはり家はいいなー、生まれてよかったなーと痛感した。

昭和20年８月４日（原爆の２日前）、学校へ県庁から電話が入った。８月６日建物疎開の生徒動員（中学２年300人）全員を出すような命令だった。学年担任の秋山元英先生（物理、化学）は、部下の松石義郎先生（物理、化学）と諮り、どうしても大事な学校行事があるので、半数しか出せないと（値切って）押し問答の末、やっと了解を得た。秋山先生は、数日前から胸騒ぎがして眠れなかった。それが悪いことに現実となって８月６日の原爆の惨劇となり、雑魚場町の建物疎開で貴重な150名の生徒の命が失われてしまった。しかし、秋山先生の好判断で半数の150名の生後は、登校していたので全員助かった。何人かは負傷したが。人間の運命とは紙一重なのだ。（登校し生き残った同級生永谷道孝氏談）。岡野は雑魚場町で被爆し瓦礫の下からはいでて、半袖だったので火傷して、腕の皮膚が垂れ下がり、頭からも出血していて、ふらふらになって、いったい何が起こったのか考える力がなかった。火焔が襲ってきたので痛む足をひこずり、杖をついて長い時間がかかって寄宿舎へやっとたどり着いた。寄宿舎はペッシャンコにつぶれていたので敬道館で寝た。喉がカラカラに渇いたので水が欲しいと思ったが水道が出ない。足が痛んで立てない。匍匐前進してプールにやっとたどり着き、水をがぶ飲みした。プールの芝生で寝た。日が暮れると血の匂いを嗅ぎつけた蚊の大群が襲って来て、また敬道館へもどりピアノの下へも

ぐりこんだ。そのとき敬道館のまわりに白線１本の生徒が数人いて、水、水と叫んでいた。長い熱い１日が過ぎて夜が明け８月７日の朝は静かな朝だった、岡野はもうろうとしながら母を呼んだ。水、水と訴えた。いつまでたっても水は届かなかった。日が昇ると暑い太陽が傷口にしみた。すると意識が戻り、水がむしょうに欲しくなってプールに行こうとしたが、体が全然動かず、弱っていくのが自分でもわかった。そうして昏睡状態になりながらまだ生きていた。ジョン万次郎が漂流して死にそうになった気持ちがわかり、俺も死ぬかもしれんと思い、いや、万次郎は助けられたのだ、俺も誰か救助に来てくれるかもしれん。街は丸焼けになっているので、誰もおらん、そんなことは駄目かー･･･。水、水、へこたれるな、頑張れ。太陽が熱い。意識が混濁したとき･･･。『壮一郎、壮一郎』と呼ぶ声が聞こえた。母の声だ。俺は、いよいよ死ぬなー。死ぬってこんなのかー。と思ったら、母の顔が大きく目にはいった。そんなことはない、母は因島だ。俺の頭が狂っているのだ･･･。そのとき、飲みたい水が、ゴボゴボと喉を通った。薄目をあけると本当に母がいた。「えっと探したんよ、よう生きておったね、私が助ける。気をしっかり持って！」涙をポロポロ流して、その涙が壮一郎の頬に流れ落ちて熱く感じた。母は近所で大八車を買い、壮一郎を乗せて広島駅へ急いだ。街は煙をあげて燃えているし、炎天下で汗がふきでて喉が渇く。壮一郎には水筒の水を飲ませ、母はボウフラのわいた防火用水の水を飲んでひたすら駅をめざした。広島駅は大勢の人で混雑し、座り倒れ寝て足の踏み場もないほど負傷者があふれていた。汽車はなかなか来ない。何も遮蔽物のない大八車の上で壮一郎は死にかけていた。やっとホームに入ってきた汽車に、人々は群がって乗った。母は壮一郎を背負い火事場の馬鹿力で汽車に乗せ、デッキの端だったが寝かせることもでき、そこは日陰になり走れば風で涼がとれた。母は妊娠５ヵ月の身重の体だった。どこに、そんな力や勇気があったのだろう。子を思う母性愛、母親の必死の愛、慈母神の心が力となった。尾道駅からポンポン船を雇い札束を払った。（須山正美談、最上級生の須山徹の奥さん。奇しくも壮一郎の妹さんと同級生で仲良しだった）長い苦しい１日を戦って、やっと帰った母子は、倒れるように２人並んで寝た。壮一郎は意識ははっきりしており、学校や級友のことをしきりに心配していたが、８月12日、容態が急変して皆に看取られて帰らぬ人となった。安らかな死に顔だった。祖母は遺体が収容できただけでも親孝行なことだと号泣した。母は、その後子供を生んだが、原爆の放射能を浴びたのか生まれて３ヵ月で夭折した。岡野家の歴史では、今回のことは大事件で壮絶な戦いであり、壮一郎は国家のため戦死したと思った。このお母さんはすごい人だと筆者は深く敬意を表する。桜は散っても来年はまた咲く。だが、壮一郎桜は15歳で散り終わるなんて、なんとむごいことか、泣けて泣けてしかたない。この文を鎮魂歌として捧げる。

この４人は一生懸命生きた。へこたれずに生きた。このことを生き残ったものが伝える義務があると老骨に鞭打ち筆を走らせた。82歳。疲れた。

100周年特別寄稿

昭和の修道生達

森　信　　毅（旧中30回卒）

我々は昭和９年に入学した２百余名である。軍靴を履きカーキ色の制服、制帽で黒い風呂敷に教科書等を包み小脇に抱えて通学していた。途中上級生に出くわすと敬礼をし、教師に出会えば立ち止まって、停止敬礼をしていた。既に満州事変が始まっており、学校には配属将校が居り、グランドの教練でシゴカレタものだ。

夏には呉線坂の横浜に合宿して遠泳で、切串の灯台の浜までの復４里を泳ぎ切ったのも私達の語り草である。陸士、海兵に多数入校したが陸士の１名のみが健在である。

他の道に進学した友人達も学業半ばで苛烈な大戦に出陣して多くの命を落としたのである。幸運にも生き残った吾々同期生が昨年５月に８名が参加してホテルグランヴィアで卒寿を祝ったのである。

100周年特別寄稿

秋山先生を偲んで
(蹴球部の創設者)

林　　孝　治（高校２回）

先ずは、同窓会創立100周年記念、大変おめでとうございます。数々の記念行事が予定され、無事終了いたしますことを、お祈りしております。

多くの先生方の、ご指導を頂き、成長させて頂き深く感謝しております。その中で、今回は秋山先生の想いを述べさせて頂きます。

昭和19年（1944）４月に修道中学校に胸を膨らませて入学させて頂きました。秋山元英先生は我々１年生の担任ではなく、４年生か５年生の担任であったと記憶しております。化学・物理（理科）の先生として中学１・２年生のときと高校２・３年生のときに指導をして頂ました。

南から二列目の一番西側に階段教室があり（現在の十竹ホール形式で、当時は講義室と呼んでいました）一番下の底に実験台と、黒板と教壇があり、そこで実験をして、見せて頂き、他の教科と違って教科書を読むだけの授業でなく実験があるので大変興味がありました。しかも、穏やかな言葉で、温和なお人柄のために、騒ぐ生徒もいなくて、楽しく授業ができ、時間外になっても、実験台の廻りから、先生も生徒も離れませんでした。非常にユニークな先生であり、ユーモアがあり、反面、テストの成績・サッカーの戦績、特に校則違反などのルール違反面で非常にきびしく叱られました。どんな場合でも白衣の実験着が非常に印象に残っており非常に懐かしいものです。懐かしいのは衣類ではなく、お人柄であります。

卒業生の先輩は次のような思い出を話して下さいました。

秋山先生の授業は実験があり、その際、直接覚えることもありますが、例え話で面白いことを言われるので、間接的に覚えさせるような手法で、冗談めいたことに興味をもたせ、『生徒を引き付けて授業』を進められていたのではでしょうか。実験が楽しい、面白くなり生徒は秋山先生が好きになり、化学・物理が好きになり、成績も向上するし授業が楽しく、学校が楽しくなったものです。

また、他の先輩は次のように話していただきました。

秋山先生は化学が得意で、試験管やビーカーで、色を変えたり、色を消したり、手品のような実験を見せて、興味をもたせ、『先生に「ひきつけるもの』を、手を変え、実験を変え、教え方を工夫され、話術もあり、人間的にもイジメル・叱るような仕方でなく、「噛んで含めるような」、「言って聞かせる」本来の道に導くような話し方であった。常に指導者として、生徒を『ひきつけるもの』を考えて生きておられたのではなかろうか。繰り返し『ひきつけるもの』を強調されました。

教室では化学・物理で習ったことを、直に実行し実際の生活に役立てるための教育をしていただいたので、生徒は非常に興味がもてたと思われます。「習えば、行え」「学べば、為せ」勉強したことを、すぐに家庭に持ち帰り、役立てよ。教えていただいたことを直に実行せよ。両親の物や家財道具を修理したり、作り出して生活に役立てて、上げるようにと教えていただいたものです。

グランドでは一中に負けない蹴球部を創設され、自ら部長として指導を実施され、被爆後は学校や校舎の復興を自ら実施されました。『実行力とは』を生徒に示された先生であると思います。

秋山先生は全体の先生の中では非常に若振りで、ダンディな伊達男でありました。中吉先輩の「戦後修道復興の礎」にも「とても溌剌たる先生で、修道において殊の外、嘱望を担って居られ方である」と記されております。

『生徒の心を掴む』のが非常にお上手で、先生と生徒の間の信頼関係に深いものがあり、生徒は秋山先生を尊敬し、信頼しきっていました。

生徒は秋山先生に直接は大変失礼だから「アーキーさん」と呼ぶことはありませんでしたが、生徒の間では兄貴のような親しみの先生であったため愛称で「アーキー」さん、と呼び、常に親しくしておりました。

従いまして、進学のときも、戦中は陸軍士官学校・海軍兵学校志望以外の生徒は、廣島高等工業専門学校に進学志望が多く、電気科・機械科以外に秋山先生の影響で応用科学科志望が多くなったと思われます。高等師範学校の化学・物理に進学して、化学・物理の教師の道に進む生徒が多く、廣島文理科大学に進学する教え子もあり、

戦後、軍隊の学校が廃校となり、再度、広島高等工業に進学した多くの生徒がありました。この生徒達が戦後の廣島をはじめ日本の「物つくり」の発展の基礎を立ち上げたと思います。このように、先生の生徒への影響がいかに大きいかを示すものと思います。秋山先生が好きだから化学、物理が好きになり、生徒が秋山先生を真似ての後継者（化学・物理の指導者）として、教壇に立ち秋山先生と同じ教え方を次世代の生徒に教えているのです。進学・就職の相談相手にもなり生徒の将来に気配りされ、面倒をよくみられたようにもお聞きしています。

先生は大正10年（1921）本校旧中12回の卒業生で同じ千田町の広島工業高等専門学校応用科学化科に進学され、大正14年卒業と同時の４月１日より母校修道中学校に奉職され昭和23年８月２日にまで在職されました。（修道学園同窓会　会員名簿による）

昭和29年（1954）６月17日より昭和45年（1970）２月２日まで修道学園の監事（広島修道大学50周年史による）とあります。

昭和32年（1957）６月12日に松江市の山陰木材防腐取締役に就任されました。（修道学園史）によるとあります。

広島の蹴球の源流

広島高等師範学校

広島のサッカーは明治35年（1902）に全国に東京と広島の２校しかない広島高等師範学校に課外活動として校友会が組織化され、同39年に運動部に蹴球部ができました。同時に付属小・中の課外活動にとりいれようと、広瀬為四郎氏（高師の教育学部教授・付属小の校長）が明治40年（1907）が母校東京高師（明治22年の卒業生）に行き、蹴球の競技を学んで、帰広しました。広島高師のグランドは当時、広島を代表する広さがあり、明治41年（1908）体育科の助教授として、東京高師蹴球部出身牧野俊寿氏、２年後にオックスホオード大学のｊ・Ｃ・プリングル氏が英語教師として赴任してこられました。

旧中35回　村田光穂先輩
（父は村田房一氏）
（元広島高等師範学校教授
山口県サッカー協会会長）

廣島高等師範学校の戦績の中で大正11年（1922）の全日本選手権決勝（天皇杯代２回）で名古屋蹴球団の対戦に雨を油断し、この１点で覇権を失ったことである。このときの選手にＧＫ野中・ＦＢ野沢・ＨＢ村田房一氏がおられました。（広島県サッカー協会発行、栄光の足跡による）

村田選手は「後に、廣島高等師範学校教諭・山口県蹴球協会会長、その長男村田光穂が修道（旧中35回卒新見　剛先生・荘川清治・船橋英男・児玉　格先輩と同級生）－広島高師に進学し化学・物理の教師」（広島高等師範は1902年４月に設置された記事が2011年２月７日の中国新聞に掲載されています）

県立広島中学校（後の広島一中、現在の国泰寺高校）

当時の弘瀬時治校長は東京高師範の出身で英国のパブリック・スクール教育を信奉し、「紳士のスポーツ」サッカーを奨励して、自らがサッカーの指導者としていたため、後輩である松本をスカウトしました。

明治44年（1911）県立広島中学校に東京高師を卒業したばかりの松本寛次氏が数学教師として赴任してこられました。松本は東京高師サッカー部のＦＢで主将を務めていました。

広島中は明治45年（1912）に予算を与え「校技」としての「蹴球部の創設」となりました。

若い松本は積極的に生徒たちの輪の中に入り、指導をしたので、生徒は，それに応え部員も増えてきました。

広島高師の体育教師長倉正次郎（東京高師ＯＢ、松本の２年先輩）（1909から1915）大正４年まで助教授であり、このような人が教えてくれることと共に高師と試合をさせてもらうことが良かったようであります。松本を慕う生徒の中から「部員」と呼ばれる選手が集まり、次第にチームの形ができてきた。初代の主将は山高松次郎と唯一の５年生でありました。２年生の部員に「野津　謙」がいました。明治44年（1911）入学、くしくも松本が赴任してきた年である。当時は虚弱体児であった。サッカーに興じているうちに頑健になり、４年生でレギュラーとなる。恩師の教えを胸にし、野津は学力にも秀で、『文武両道』を体現した。旧制第一高等学校（一高）の進学をへて東京帝国大学医学部へ進む。診療・研究に励む一方でサッカーへの情熱はいささかも衰えを知らず

昭和55年（1955）から日本サッカー協会の４代会長務め、後に殿堂入りしました。

野津の同期で共にサッカーをしていた広島カープ設立に尽力した谷川　昇（衆議院議員）がいました。

1914（大正３年）秋、神戸遠征を企て対外試合のためのユニホームは現在も使用している、白地に黒字でＨＦ（広島・フットボールの頭文字）を図案化して胸につけた。その心は「広島の中学サッカーのパイオニアとして、広島を代表するサッカーチームであるとの誇りと気概が込められていた」と記述されている。このマークは今も不変である。

この年の12月25日　姫路師範と対戦１－１の得点であったがコナーキックが３－２と上まあわり勝利を得た

27日　神戸２中に１－０で勝ち、午後　神戸外国人団に　０－４で破れ

28日　神戸１中に２－０

29日　同志社大に０－２で敗れた。

1921（大正10年）日本代表は５月上海の第５回極東選手権大会に出場、フィリッピンに１－３、中華民国に０－４と破れ、帰路、野津の古里広島に立ち寄り惨敗のショックを晴らす積りで対戦した、後輩の広島中に終了５分前に中学生に得点を許した。これから広島中は快進撃を継続することとなりました。

10月廣島高等師範が始めて開催した第１回中等大会を苦もなく制し、11月には神戸高商主催の第１回関西中等大会も制覇した。

大正11年４月名を「廣島一中」と校名変更、高師大会では２連勝したが、一中・県師範・高師付中３校の広島リーグ戦では①付中②県師③一中となり、付中が自信を深めた。11月一中は奮起し高師主催の第３回中等大会で３連覇を果たし、翌年１月の第３回全日本選手権西部〔中国九州〕地区予選で見事優勝を飾った。広島が「サッカー王国」を築く礎になりました。

大正13年、東京の明治神宮外苑競技場が完成、第１回大会10月30日より５日間15競技が行われた。蹴球は第４回全日本選手権を兼ねていた。広島一中は卒業生を含め、鯉城蹴球団の名とし、胸のマークＨＦからＲにかえて出場して優勝しました。

大正14年も鯉城蹴球団で出場。準決勝で御影師範と対戦、延長・再試合・再延長の末、ようやく辛勝して、優勝線は東京帝大に３－０で勝利して連覇した。このメンバーの中の東大のRI野島は廣島一中の卒業生でありました。

大正15年（1926）大阪毎日主催の中等大会が京阪神より全国的な競技会に範囲を広げ、優勝戦で昨年秋に勝利した御影師範と対戦し１－０で敗退２位となったが、「廣島に一中あり」と全国に名声がとどろきました。

この年５月26日、一中と県師の台覧試合が一中グランド（現在の国泰寺高校）で行われ２－０で一中が勝利している。

昭和２年、前年12月25日大正天皇が死去され、第６回全国選手権大会は中止された。10月30日鯉城蹴球団は決勝で神戸一中のＯＢ神戸倶楽部と対戦、廣島一中対神戸一中の図式であった。２－０で敗退して３連覇はならなかった。（広島県サッカー協会発行、栄光の足跡による）

秋山先生の胎動（修道蹴球のパイオニア）

このように、廣島一中が神戸一中をおさえ、天下に勇名を響かせたころ、（一中の黄金時代）「打倒一中」を修道の合言葉として大きな目標を掲げたのは秋山元英先生、そして、それに続く生徒たちがありました。

大正13年（1824）蹴球部が誕生した。11月廣島高師主催の第４回中等大会が初陣であった。２回戦で廣島師範に０－２と敗れ、その県師範は決勝で一中に１－５と大敗した。大正14年４月１日秋山先生は母校の化学・物理の教師として着任し本格的な活動がはじまった。

一中に勝つ修道のチームつくりである。秋山先生の苦脳の始まりでもあります。

蹴球部のできる前から蹴球の好きなもの同志が何人か集まり有志でボールを蹴っていたようですが、チームとしてメンバーが足らず、試合に出場できなこいともあり、選手を集めるにも大変なご苦労があっつたようです。体操・剣道・柔道・教練などの授業をみて、器用な生徒に声をかけて勧誘しておられたようです。

練習の生徒数が集まるようになっても、正式試合になれば「勝利」を得なければならない。そのためには、『数』だけでなく上手な選手を集めなければなりません。

旧中22回（昭和６年卒）中山先輩のお話を紹介しましょう。

先輩の家は廣島の町の東に位置する段原にあり、地域で有名な名医「中山医院」で医院の後継者として育てられました。そのため、蹴球をすることには両親は反対でした。そため修道で正式な部員として毎日の練習をすることはできませんでした。従って、蹴球靴を買うこともできませんでした。先輩や他の人の古い靴を譲ってもらっ

て、ボールを蹴っていました。試合前にも両親に内緒で練習をして帰るのですで、母親にはいくら内緒にしても洗濯物で分かるので母から父には内緒にするのに随分苦労をおかけしたようです。

廣島での試合はまだ内緒にできたのですが、神戸・山口の遠征は内緒にできず、本人から父に話ができませんでした。この時、秋山先生が自宅に来られて、直接、父親にお話され、了解を得ていただいたようなことがありました。

秋山先生は私達の「兄」であり、特に「親」のような先生でした。と聞かさせていただきました。

強靭なチームをつくるために、廣島高等師範学校や廣島一中に足を運ばれ練習方法や試合運びなどを研究して、生徒に指導されて、おられたようです。

校是に「尊親敬師」があります。恩師を尊敬し、恩師を偲び、恩師を、いつまでも忘れることのないために、長い歴史のなかに、諸々の先輩より下級生にも申しおくられていました。

卒業後、何十年経過しても、時代が変化しても生徒として、恩師を尊敬することを忘れていることはありません。「恩師と生徒の絆」「先輩と後輩の絆」、同窓会・同期会に必ず発言のある、「絆」であると思います。

同窓会・同期会に恩師の、お姿を、お迎えすることは、時間の経過とともに不可能なことは当然ですが、恩師の、お人柄、教えや、苦しかったこと、楽しかったこと、部活のこと等、生徒同士には忘れることはなく、時間の経過を忘れて何時までも語り続けるものであります。

琢章会編集「修中同窓会報」昭和８年３月発行　第６号及び昭和13年12月発行の第11号の一部「蹴球部報」を紹介いたします

いずれも、秋山元英先生の直筆の文章です。

部報

蹴球部報

秋山元英

本校に在學する生徒の大部分は既に中學校の入學試驗に於ての敗者であり之に對する好い意味での復讐を期して入學して來て居るのであります。此の氣持を助長するにはスポーツによる意氣の發揚より他に無いとの日頃から信念を持ち「何負けるか、何時かはやつてやるのだ」此の意氣を十分に生徒間に徹底せしめ若き者の血を沸かし青年の意氣を益々發揚せしめるには蹴球が最も適せるものであり之が蹴球部の使命であるとの考へで日々練習を續けて居ます。[illegible]體力あり腕力があると云つても潑剌たる此の青年の意氣を有せざる者は老人と同様である。

此の信念の下に本部から巣立ちました現京大主將中野君初め慶應に吉本、塚部、中西の三君、又前々山高主將八木君、前山高主將孫野君、大倉高商の平野君、早大の鈴澄君、廣高の塘、香川、雨覺等部の創立以來僅かに八年にしかならないに拘らず此く多數の名選手を出して居ます。

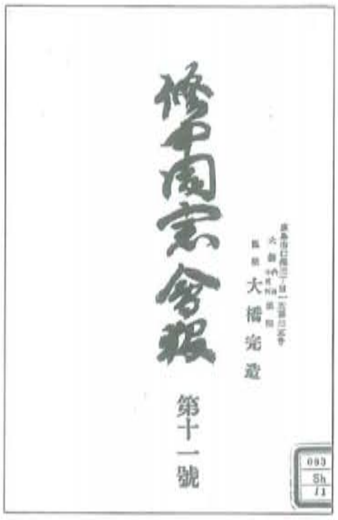
又一方日頃の念願は先ずスポーツ王國とも云はるゝ此の廣島に於て覇權を得たい。之でした當地に於ては古き歴史を持ち傳統的の強みを有する一中、附中、縣商の三校を破らねばならぬ、其の爲めに年々雨の日も風の日も一意専心覇權を目指して練習しました。揚句昨年は其の念に酬ゆられる時が來、別記戰績の如く修中蹴球部の名を相當世に知らしめ一方生徒にも相當の大きなショックを與へる事が出來ました。

六高主催近畿中等學校大會（本校優勝）
修道4――1岡[illegible]　修道3――1岡二中

關西學院主催全國中等學校大會（參加校三十七）
第一回戰　不戰一勝
第二回戰　修道3――2兵庫工業
第三回戰　修道1――0第一神港商業
第四回戰　修道5――0堺中學
準優勝戰　修道0――5御影師範
御影師範優勝戰にて甲陽中學を六對〇にて破りて優勝

廣島高等學校主催全國大會
第一回戰　修道5――0廣二中
第二回戰　修道4――3附中
優勝戰　修道3――4廣一中
此一戰は前半を三對〇にてリードしながら後半に於て遂に同點となり延長戰に於て決勝の一點を得られ遂に一中の爲に悲憤の涙を流さゝれました。

大毎主催全國大會地方豫選
此の大會に於ては優勝戰にて宿敵一中軍と對戰し三對二にて勝ち過去幾星霜の努力は美事酬ひられ屈辱は雪がれて、我部史上に光榮の一頁を記錄する事が出來ました。此處に於て我が部は中國代表として、今春甲子園に於ける晴の舞臺に多數の方々の絶大なる[illegible]



蹴球部

部長　秋山元英

平成59年に中野先輩（旧中18回）より村上先輩（旧中33回）に「秋山先生の追悼会」を実施するよう指示がありました。僕も法要の案内を村上先輩よりいただきました。

僕は卒業して殆ど廣島にいませんでしたので、蹴球部の歴史と先輩のお名前と、ご尊顔が分かりません。村上先輩より手伝いを依頼されまして、お断りしましたが、僕が一番若輩であることでのご指名のことで、お役に立てることをしようと、お引き受けすることにしました。

案内状は別記のように、村上先輩が発送されました。出席者は次の様でした。

卒業年	氏　名	卒業年	氏　名	卒業年	氏　名	卒業年	氏　名
18回	中野　重美	26回	岩田　　武	27回	鳥田　克己	29回	武田　孝治
29回	藤田　正明	29回	堀原　博雄	29回	森山　純爾	30回	岩本　俊平
31回	浜井　　勲	32回	高村　敏文	33回	八木　克己	33回	村上　英文
34回	秦野　哲二	35回	児玉　　格	35回	大崎　祐輔	35回	船橋　英雄
35回	荘川　清治	36回	大原　正実	36回	高山　謹二	36回	杉田　清治
36回	古本　利彦	36回	町野　吉甫	38回	木村　静人	38回	田原　昭次
39回	福永　　知	39回	尾越　幹雄	高１	川崎　　勲	高２	林　　孝治
高３	早田　洋一	高５	三村　　融	秋山	エミ子夫人		

日　時　　昭和59年２月５日（日）10時30分集合

場　所　　聖光寺（広島市東区山根町天神谷）

法要の後

安芸会館（広島市南区皆実町一丁目12－24）

（日本専売公社の経営でしたが現在はマンションに建替えられています）

秋山先生は、この写真のように、山根町の聖光寺に眠っておられます。

中野先輩の想いは秋山先生が先輩であり、先生であったことから、「尊信敬師」の教えの敬意を目に見える形にして、後輩の我々に教え、実践することを秋山先生の『法要追悼会』を通じて示されたものと受け止めて、感謝しております。この、お二人が修道におられなかったら、蹴球部は創立していなかったでしょう。お二人の尊い想いを大切にし尊重して、これを伝統として、後輩に伝えていく責務があることを各自が自覚しなければならないことと信じております。

秋山先生の秋山部長の想いは廣島一中に勝ち、全国制覇することであります。その目標に諸先輩は苦しい練習に耐え、先生と先輩の指導に忠実に従い「文武両道の精神」に従い学問と蹴球の両立を目途に精進してきました。

戦争が益々激しくなり、生徒は学徒出陣や学徒動員になり、蹴球の全国大会もできなくなりました。

秋山先生は化学・物理の教師で蹴球部の創設者であり、蹴球部の部長でした。更に修道中学校の運営のお仕事もしておられました。それに加えて、原爆による被爆で焦土と化した広島市の中で、自らの住まい、食料、衣料も失い、不自由な生活をしながらも、千田町の倒壊した校舎の復興に、立ち上がられ、尽力され、修道の教育の存続のため、教師の手配、生徒の通学に、物・金・人の充足に大変なご苦労をおかけしました。

中吉啓治先輩（旧中33回バレーボールの指導者）の「戦後修道復興の礎」によりますと「秋山先生は教頭として、只、途方にくれるばかりであったという。秋山先生は復員されたばかりの飯田信雄さん（後の第18代理事長、旧中18回）を頼みとして、しばしば、再建築を練り続けられたものの、当時の全市焼け野原の中で、全ての展望は閉ざされたままであった。」と記されております。

戦後、外の運動場（現在の体育館・武道館の位置）にゴールポストはありましたが、石炭ガラの芋畠であり、畝があり、土の平らなグランドではありませんでした。中の校庭は倒壊した校舎の材木で一杯でした。南側の（帝人側）武器庫の隣に材木を運び、空地を求めて、机を二つ並べゴールに見立ててボールを蹴ることから始まりました。

ここまでにするまで、当時、我々生徒には分かりませんでしたが秋山先生の、ご苦労が中吉先輩の記録で、初めて分かり、秋山先生のご苦労に涙が出ました。被爆後「ボールを蹴る」までの準備が如何に大変なことであったのか。

秋山先生のお陰で、我々は今も校庭でボールを蹴ることができていることに感謝しなければなりません。

外国の選手が日本のピッチに出入りする時に、感謝の十字をキッテいるではありませんか。校舎・校庭には秋山先生をはじめ、諸先輩や多くの人々の金銭的・精神的・物質的なご苦労をかけているわけであります。ご苦労に報いるために感謝をし、秋山先生の意思に対して「文武両道に精進」をしなければなりません。

「心」を「形」にされ、

「目に見えないもの」を「目に見える」ようにされ、

「言葉」でなく「体」で実践され、

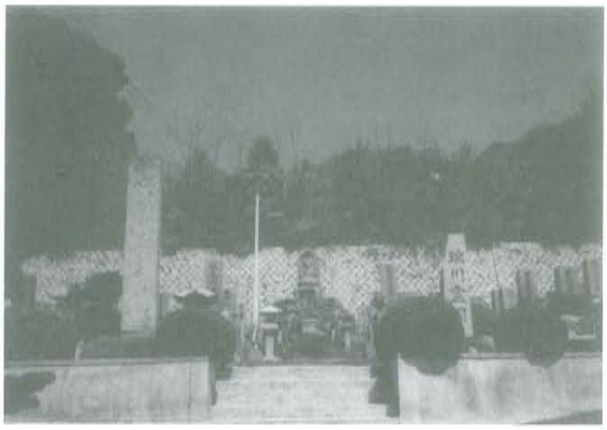
「個」を「公」にされた　　立派な教育者でありました。

このように、秋山先生は戦前・戦中・戦後の日本の苦しい時代の卒業生として、教師として、先輩として、修道の学校のために、蹴球部の全国制覇のために、献身的なハタラキをして頂きました。

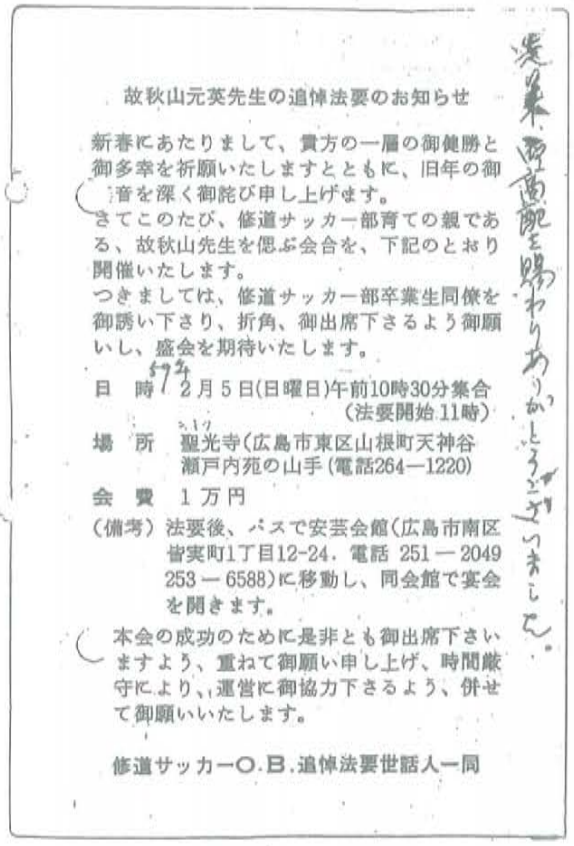
後輩として、卒業生として、先輩であり、恩師である秋山先生に、深く感謝すると共に厚く御礼申あげますことと、併せて、ここに御冥福を御祈りいたします。

合　掌

広島市東区山根町天神谷　瀬戸内苑の山手
曹洞宗　聖光寺　本堂



聖光寺　瑞川霊園



故秋山元英先生の追悼法要のお知らせ

新春にあたりまして、貴方の一層の御健勝と御多幸を祈願いたしますとともに、旧年の御厚音を深く御詫び申し上げます。

さてこのたび、修道サッカー部育ての親である、故秋山先生を偲ぶ会合を、下記のとおり開催いたします。

つきましては、修道サッカー部卒業生同僚を御誘い下さり、折角、御出席下さるよう御願いし、盛会を期待いたします。

日　時　2月5日(日曜日)午前10時30分集合
（法要開始 11時）

場　所　聖光寺(広島市東区山根町天神谷
瀬戸内苑の山手(電話264—1220)

会　費　1万円

（備考）法要後、バスで安芸会館(広島市南区皆実町1丁目12-24．電話 251—2049 253—6588)に移動し、同会館で宴会を開きます。

本会の成功のために是非とも御出席下さいますよう、重ねて御願い申し上げ、時間厳守により、運営に御協力下さるよう、併せて御願いいたします。

修道サッカーO.B.追悼法要世話人一同

遺族、西蓮院を賜わりありがとうございました。

修徳院授外　元英居士
昭和45年2月2日歿　行年67歳

林　孝治氏

100周年特別寄稿

修　二　会

下　村　幸　男（高校２回）

約百名の集団である。半数は原爆の生き残りで必ずしも昭和25年３月３日の卒業とは限らない。原爆死没者が136名で生存者が59名という当時の発表には納得できない。昭和19年４月胸を躍らせ入学した軍国少年は二百五十名であった。

この会員は或る時期に於いて短時間であっても修道に学んだ実績のある者が登録されている。卒業には関係敗戦、学制改革、戦後動乱期を過ごした少年期を自分の力では何も出来ない時期に家庭環境、経済環境、生活環境等を前面に受けた者達で一人一人が波乱万丈で小説になるほどである。それは書き切れるものではない。大きな括りで紹介する事にしよう。戦時中に予科練という飛行兵に志願した者、少年飛行兵に志願した者が敗戦で入学して来た。概ねオッサンに見えた。台湾、中国、朝鮮半島等外地から引き揚げて来た子弟で相当に苦労した影が見て取れた。やがて学制改革が始まって昭和24年３月に中学５年生で卒業して行った者も出た。公立高校が地域制になった事もあって転入生が多くなった。逆に転出する者も出た。それが高校３年まで続いた関係で1学年2クラスであったが、隣のクラスの半数は今でも顔と名前が一致しない状態である。転入生の多くは学力の低下を恐れての行動で優秀な人が多くいた。

修二会が全員で行動を起こしたのが、平成６年８月６日の中学２年生被爆物故者50回忌法要である。

これには同じ時期に机を並べて学んだ事もなく、語り合った事もないが或る意味に於いて共に苦難した同志であると考えて終結された。これが最後の集会となった。

以後は毎年、８月６日に修道の慰霊碑前での原爆慰霊祭に自由参拝の後で懇談室に集まって亡き友の話を中心に友好を暖めている。

100周年特別寄稿

三上先生の想い出

河　野　富士雄（高校４回）

「一天俄かに掻き曇り百雷の一時に落ちる轟き、しかし数分も経つともうカラリ。これは夕立ではありません。修道名物三上先生の説教風景です。」これはわたしが高校卒業前に書きためていた思い出集の１ページである。

その三上先生、高１の秋の宮島マラソン前日の英語の時間に同級生何人かが冗談半分に「先生も走ってください」、「よーし、走っちゃる」。翌日本当に、運動着に着替えもせず上着を脱いだだけで走りだされた。当時のコースは広電己斐駅前から宮島口までの宮島街道16kmばかり。日頃おそらく運動とは無縁の中年の先生、タイムは遅かったものの、見事完走された。翌日、運動慣れしていない多くの生徒が足を引きずっているのを見た先生、「わしは寝る前に三里の灸をすえといたからどうもない」と言って軽々足を挙げてみせられたのには驚いた。高２のとき学級担任、保護者面談日に母が出かけた。開口一番「坊ちゃんにお世話になっとります」。親が言うべき言葉を先取りされて母は目をしろくろ、帰宅するなり「あんなに驚いたことはなかった」。わたしはそのとき選ばれてクラス代表（一種の担任補佐）をしていたので先のご挨拶になったのだろうが、ほんとうに少年のように純粋な心を持ち続けた先生であった。先生は、わたしが大学を出て母校の教師になった年のお正月に急逝された。教師大先輩と後輩の間柄で教育を語り合う時間が持てなかったことが未だに心残りである。

100周年特別寄稿

先生の想い出

鵜　野　俊　雄（高校６回）

「修道」という言葉は、私だけでなく、我が家では最も響きの良い言葉です。

私共夫婦、子供３人、孫１人の合計６人がお世話になり、恩師、先輩、同級生と心気よい人間関係が続いています。

中でも恩師との関係は、人間として基礎形成時に親しくご指導頂き、在学時に止まらず、卒業後も先生宅に押し掛けたりして、映画「もうまだかい」の雰囲気を味わって来ました。

以下、先生方の想い出エピソードを紹介します。

○岡島四郎先生

おそらく先生に接した生徒全員が敬愛したと思います。

黒板の端から端まで１本の線を引き、「おいこら！聞け、よく聞け。これは何だ。地球だ。」から始まる授業は、漫談を聞いている様で退屈しませんでした。

寮から来る生徒は朝食が少ないので、授業の前に弁当を食べてしまい昼には何もありませんでした。先生はトロ箱に自費で購入されたパンをいっぱい入れ、彼等に配っておられました。問題を起こす生徒ほど、先生は丁寧に指導されていました。

夏休み中にも登校されていて、質問すると、草花に水を与えるために来ているだけよ。と言われていました。

1982年に先生をハワイに高校６回生で招待しました。同行したのは20名でしたが、寄付をされた人は非常に多く、高校３回生37人、７回生10万円、学園の教職員、ＰＴＡ役員等が聞きつけて100万円が集まり感激したものです。何十年ぶりの授業を「フォースター植物園」で受けたり、よき想い出を持つ事が出来ました。

○林高生先生

「フォーノ、フォーノ」と飄々とした対応の数学の先生で、兄貴の様な存在の先生で卒業後もお宅にもよく押し掛けたものですが、奥様も親身になって世話をして頂きました。今思い出すのに先生の奥様方も本当に生徒を我が子の様に思われている人が多く、先生との想い出の中に必ず奥様が入っています。

先生御夫妻も2001年にロサンゼルス、グランドキャニオンに６回生21名で招待をしました。我々６回生の同期会には必ず出席されており、先月、吉崎冨士雄先生から林先生の骨折されたにもめげず授業をされている姿（35回生、平野君が授業中に画いたもの）を郵送頂きました。林先生の授業に対する情熱には感動しているとのコメントがありました。

○堤　慶一先生

中学３年間同じクラス編成だったので、お互い非常に仲良くなりました。その核は堤先生であり、中学生時の淡い、甘い想い出の期間で、先生宅にも何の目的であったか忘れましたが、数人でよく押し掛けていました。

先生は修道には５年間しかおられなかったのですが卒業後のクラス会には必ず出席されており、子供さんがおられる鹿児島に移住されたので、我々が2008年に13人で鹿児島へ２泊３日で訪問。御夫妻と共にＮＨＫの「篤姫」関係の史跡見学をしました。

恩師と共に会合を持つのは、学校時代を懐かしく思うのと同時に、先生を核にして同級生同志で逢いたいという目的があるのでしょう。年を取ると共に会を持って欲しいとの要望が増しています。ただ、その時には先生も同級生も亡くなっていきつつあるのは淋しい次第です。だからこそ今、その機会を大切にすべきでしょう。

100周年特別寄稿

恩　　師

畠　　眞　實（高校７回）

昭和24年４月に修道中学校に入学した。正門を入ってすぐの、二階建ての校舎にわたしたちの教室があった。一年一組は二階の一番東端にあり廊下分が教室に加わっていて、その分だけ他のクラスの教室より広かった。このおまけの部分がいい遊び場になった。たとえば、ピンポン球を投げ、それを黒板拭きの木の部分で打つ。称してピンポン野球。二人一組でチームを組んだ。まだ広島カープが結成されていない頃で、巨人とか阪神とか、自分の贔屓のチーム名をつけて楽しんでいた。時にはボール蹴りの場所ともなった。靴は脱ぐようになっていたので、靴下を履いて遊ぶのであるが、靴下によく穴が開いた。靴下を繕って履いていた時代であった。

担任は景山英俊先生であった。国語を教えてもらった。大きな声で叱られるということはなかったが、授業の時はいつも緊張していた。授業の始めに、前回の学習内容を復習されるのであるが、質問されて答えられなかったら床に座るという罰があり、当てられはしないかと冷や冷やしていた。

一年の時景山先生に褒められたことがある。若山牧水の「幾山河越えさり行かばさびしさの果てなむ国ぞけふも旅ゆく」の短歌を習った時「さびしさの果てなむ国」とは「どのような国なのか」とみんなに尋ねられた。それに対してわたしは「理想の国だと思います」と答えた。「大きな勲章をやろう」と言って褒めてくださった。わたしは非常にうれしかった。先生が大いに評価される時にはこのことばが出ていたからである。後年、国語の教師になったが、この時の先生の一言が進路選択に大きく影響した。指導者の一言の大切さ学んだ。特に、褒めることが人を奮いたたせ、変えていくのだと思う。

私は修道で６年間の後、地元の大学に進んだがその４年の秋であった。千田町から宇品行きの電車に乗っていた。たまたま御幸橋の電停から景山先生が乗って来られた。先生は御幸橋から専売公社まで乗られ、比治山下経由の広島駅行きに乗り換えられていた。八本松から通っておられた。乗り会わせた短い時間の中で「きみは、そろそろ卒業の頃ではないのですか」と尋ねられ「来春です」と答えると「修道に帰ってくる気はないか」と思いがけないことばを言われた。即答出来ずにいると、「考えておいてください」と言って電車を降りられた。わたしはすでに広島県やいくつかの県の教員採用試験を受けており、採用される可能性もあった。しかし、景山先生のことばが頭から離れず、両親に話し幾人かの方にも相談した。考え抜いたた末、母校の教師を決心した。先生にお会いするまでは、修道の先生になることは頭になかったが、そんな私が修道の教師として45年間もお世話になったのである。あの時景山先生にお会いしていなかったらどんな人生を送っていたであろうか。

100周年特別寄稿

「祝」修道学園同窓会100周年

森　本　弘　道（高校７回）

私は高卒７回生であるが、もともとは６回生として中学に入学し、７回生として卒業している。少し詳しく説明すると中学２年生の時に結核にかかり１年間休学したためである。考えようでは６回生の諸君も元同級生でもあるので、僕にはみんなの倍同級生がいることになる。

中学２年生で留年して当初は恥ずかしい思いもしたが、卒業した後にこのことが自分の大きな財産になっていることに気づき天命とはいえ今でも喜んでいる。

２年生に復学と同時に父が僕の健康のことを慮って、舟入に日当たりの良い家を新築して転居してくれた。近くに下宿して住んでいた同級生になった亀井静香君と舟入の電停からよく一緒に通学したのも良い思い出である。

復学して後も余り健康な学生とはいえなかった。よく風邪をひいては休んでいたので先生方には随分心配をおかけしたと、今でも恩師にお会いすると当時を思い出して申し訳なかったと思っている。

しかし、元気なときも少しはあったのか野球が好きだったので修道の野球部が練習試合をするのに部員が一人足らないからと、舟入の自宅が広島商業高校のグランドに近かったので急遽友達が誘いに来て借り出されライトを守ったことを思い出す。現在では考えられない昔のことである。

前述したように総じて健康優良児ではなかったので、高三の時にも大学受験を前にして出席日数もぎりぎりで卒業できたように思う。

そんな状況でよく大学に入れたものであるが曲がりなりにも晴れて大学生の仲間入りが叶った。大学４年間の京都の水が合ったのか全く別人のように健康で大学生活を有意義に送ることが出来て感謝している。

大学を出て福岡の銀行に就職し、後にアメリカに留学させてもらい広島に帰ってきた時は30歳を過ぎていた。随分広島から遠ざかっていたのに同級生とは有難いものであった。直ぐに昔仲間が仲間に入れてくれて今日まで和気藹々とお付き合いをしている。そんな付き合いが出来るのも修道だからではないかと他の学校の卒業生の話を総合して確信している。

僕は平成２年５月に土谷太郎会長の後を継いで修道学園の同窓会長を拝命した、それまでの歴代会長と比較すると随分若造であった。会長の任期中に学園の同窓会を中・高同窓会と大学同窓会（正確にいうと大学・大学院・短期大学部）に話し合いで正式に分離した。関係者のご苦労に今でも感謝している。

もう一点忘れてはならないことは、現在発行しているこの「修道学園同窓会会報誌」の発刊をしたことである。第75号を数えると聞いて当時発刊の発想と必要性を説き実現してくれた事務局長だった仲井正美さんに衷心より感謝の念を捧げたい。

1954年（昭和29年）10月５日　　高校２年生時代
修道中・高秋季大運動会　仮装行列に参加・仲良し三人組み
右側から桑原正彦（桑原医院院長・修道学園同窓会幹事）
真ん中が故守屋清康（守屋耳鼻科医院院長）
左が筆者（妖艶な感じで気味が悪いの評）
撮影者　金子　慧先生

100周年特別寄稿

「質実剛健」が国を救う!!

風呂　　鞏（高校８回）

私は昭和28年に高校生になった。その頃大学入試のための受験参考書（英語）に、原仙作著『英文標準問題精講』（旺文社）があった。今と違って当時は英文読解が主流、定番教材の出題が多かった。原仙作は名探偵のように入試問題の出典を暴く、受験界の神様であった。1933年が初版のこの受験参考書は、入試頻出の英文を取り上げ、それに精密な注釈を加えて読解力を養い、合格を保証するもの。「原の英標」としてロングセラーを続けていた。

昭和期に入試に出た作家で歴代1位は、Lafcadio Hearn（小泉八雲）である。昭和34年に文部省が特定の著者や著書からの出題を禁じる通達を出すまで、何と39の大学がHearnの文章から出題している。西洋化一辺倒の時代を経て、昭和期には古き良き面影を求める気分が広がっていたのかもしれない。「原の英標」には当然Hearnからの英文がいくつも採録されていた。

その中から一つの英文を紹介したい。これはHearnが明治27年、熊本の第五高等中学校で講演した「極東の将来」の冒頭部である。名門修道高校卒業の諸君には和訳など迷惑（?）と思うが、一応原仙作氏の訳も添えておく。

To think of the future in relation to the present is essential to civilization. The commonest workman in a civilized country does this. Instead of spending all the money he earns as fast as he earns it, he will, if an intelligent man, save a large part of it as a provision against future want.
（現在に関連して将来を考えることは文明にとって欠くことの出来ないことである。文明国では、いかに平凡な労働者であっても将来のことを考える。金を儲けるが早いか、すっかり使ってしまうようなことをしないで、りこうな男なら、将来の用にあてる準備金として、その大部分を貯えるものである。）

ところで、「原の英標」には載っていないが、この講演の最後で、Hearnは

「日本の偉大な将来は、生活の中で単純、善良、素朴なものを愛し、不必要な贅沢と浪費を憎む、あの九州スピリットとか熊本スピリットといったものをこれからも大切に守っていけるかどうかに依る」（英文は省略）と述べている。

この"単純、善良、素朴"なものこそ、「質実剛健」ではないのか。大袈裟に言えば、修道の校是こそが、日本の偉大な将来を担う大きな"カギ"になるということであろう。知徳併進（経）と質実剛健（緯）で織り上げたものが吉長公の「敬」（＝校是）であることを知らぬ卒業生は一人もいまい。東日本大震災のあとだけに、修道の伝統が有する真実性が大きく膨らんでくる。

母校で35年間教壇に立たせて頂いた。定年退職後、大学で教えることや、「広島ラフカディオ・ハーンの会」の世話をさせて頂くなど、幸運に恵まれている。Hearnを通して、津波防災教育のバイブル「稲むらの火」も知った。若き日の受験勉強が決して無駄でなかったと、感謝する日々である。

会報誌『修道』第75号への原稿依頼を締切前日まで気づかず、急遽慌てて雑文をものした次第。とりとめもなき雑話ゆえ、ご笑読あらば幸甚。（以上）

100周年特別寄稿

蹴球部の思い出

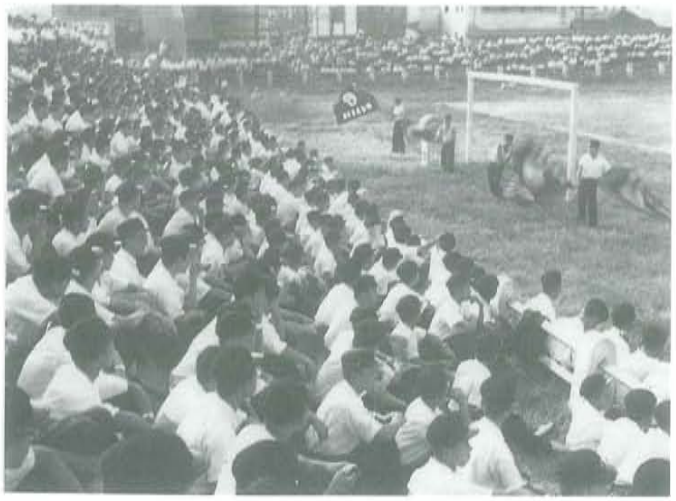
森　田　哲　朗（高校９回）

修道学園同窓会創立百周年お目出度うございます。修道での思い出と言えば私の場合蹴球部（現在サッカー班）です。修道卒業後も大学、実業団とサッカーを続け、今でもシニアでボールを蹴っているその原点です。中学に入学してすぐに入部し、背の高い順に並び高校生が我々のポジションを決めました。それ以来私はバックだけです。中学生の練習は準備、整備運動は高校生と一緒であとは殆どボール拾い。ボールが少ないのでモタモタしていると怒られました。高校生の練習が終わると中学生の練習で高校生が熱心にコーチしてくれました。

中学３年生の時のチームは敵なしで、やはり全国優勝したチームの練習を毎日見たり、教えて貰うと言うことは大変役立っていたと思います。特に自分と同じポジションの人のプレーは練習でも試合でも注意して見ていますし、プレーを真似しようとして走り方まで似てきました。又中学生のゲームの前日にユニホームを高校生から借りるのですが、これには全国優勝の先輩の汗が滲んでいる、エエカゲンな試合をするなと言われ感激し、又それを着られる事が嬉しくて家に帰るとすぐ鏡の前で着ました。高校生の夏合宿は学校の寮に泊まるのですが、中学３年生の中から２～３人参加させました。全く同じ練習をするのですが、大いに役立ったと思います。今は考えられないことですが、練習中に最夏なのに水は飲めません。しかし誰も倒れたりしませんでした。休憩中に顔を洗うことは許されましたが、先輩が見張っているので私は汗をふいたりする汚れたタオルに水を含ませ、それをこっそり吸っていました。皆もそうしていたのでしょうか。練習後に林部長先生差し入れのバケツに氷の浮かんだカルピスの味が忘れられません。

又昼寝の時間に同じポジションの高校生の足をマッサージするのですが、これが全国優勝の足かと感激して、自分の休むのも忘れて汗をかきながら揉んだものです。高校生もサッカーの基本とかこういう場合はこうと色々教えてくれました。この様にして私は中学生の時から修道サッカーのプレーと精神と言うものを段々と身に付けたと思います。

高校生となり３年生の時は広島では無敗で団体で全国優勝もしました。このチームは修道サッカー史の中でも３本の指に入る強さだと思います。中学１年から高校３年迄ずっと一緒にプレーした６人の３年生がレギュラーでした。WMシステムの要所に居ました。又全国優勝した時、大騒ぎする程は嬉しくはありませんでした。それ程広島予選を勝つのが大変で代表になれば全国優勝しなければならない位に考えていました。ですから全国高校で準決勝敗退は悔しくて仕方ありませんでした。今でも感謝しているのは広島で準決勝、決勝に短縮授業で全校生が応援してくれた事がどれだけ励ましになったか。色々思い出すままに書いて来ましたが、今の若い人の感覚とは違うかも知れませんが私の青春でした。サッカー班の活躍を願って筆を置きます。以上



100周年特別寄稿

修道の思い出

修道学園（中・高）同窓会
会長　髙　木　一　之（高校10回）

修道の良さは、卒業してから分かると言われますが、年を経るごとにそれを実感します。

修道――それは青春であり、心の故郷であります。

私が修道中学校に入学したのは、昭和27年４月。戦争の傷跡も残っている時代。校舎も木造で、雨漏りはしょっちゅうという状態。軍隊帰りの坊主頭、厳しい先生もいらっしゃいましたが、それも当たり前の時代。つらい思い出はあまりなく、楽しい思い出ばかりです。（但し、勉強についてはあまりいい思い出はありませんが･･･）

体育の時間は、ガラス工場１周のマラソン罰で２周のことも。宮島街道マラソンもありました。臨海学校での島往復の遠泳、柔道も正課。真冬でもマフラー、手袋厳禁、凍えながら元安川沿いを自転車通学･･･まさに、質実剛健そのものでした。礼儀も教えられ、身体も鍛えられました。今振り返ると自分の原点は全てその時代につくられたように思います。

戦後の貧しい時代だったため、修学旅行もなければ、卒業アルバムもなし。クラス会を開くときに誰が一緒だったのかはっきりしなくて、混線することもありました。そんないい加減なところも修道らしいのかも知れません。

12歳（子供）で中学に入り、思春期を経て青春期――その大事な６年間を修道で過ごし、友情を深めました。社会に出て、いろんな世界でみんな頑張りました。世間的には偉い人になった同級生もいます。でも、鼻たれ小僧時代からの仲間。恰好つけてもお里は知れています。いまだにおい、おまえで過ごせるのが修道の一番の良さではないでしょうか。

恩師の思い出を一つ　　60歳過ぎの頃、級友５、６人でＮ先生のお見舞に参上したところ、人間一生勉強だから本を読みなさいと言われ、60歳過ぎてもまだ子供扱いだなと苦笑しながら帰ったものです。

いろいろ書きましたが、こんないい伝統・校風が残っているのも、私は、校名の由来と云われる中庸の一節、

「天の命、これを性といい、性に率う、これを道といい、道を修むる、これを教えという」

即ち、人間には、それぞれの天性がある。その天性を伸ばすのが、人間の道である。その道をしっかり整えるのが教育である。

この「もって生まれた天性を伸ばす」という精神こそが、修道の原点であり、多方面に多士済々の人材を輩出する源だと思います。

これからも、修道にはいつまでも輝いてほしいし、同窓会としても精一杯、陰に陽にバックアップしていかなければと思います。

修道万歳！

100周年特別寄稿

修道の思い出

学校法人 修道学園
理事長　林　　正　夫（高校11回）

修道学園同窓会がこの度、百周年を迎えられますことを心からお喜び申し上げます。

また、同窓生の皆さんには、学園の運営につきまして平素より格段のご支援・ご協力をいただいておりますことに誌面をお借りしてお礼申し上げます。

私と修道学園との関わりを振り返ってみますと、中学高校時代にお世話になってから既に五十年以上が経過した勘定になりますが、卒業後も立教大学に進学した四年間を除けば、これまで広島で過ごしてきており、「修道」という二文字の世界で一緒に過ごした先輩や同級生、後輩諸氏に囲まれて様々な場面で助けていただきながらの日々を送ってまいりました。また、現在、学園の理事長を務めさせていただいており、まさに修道とともに歩んできた半世紀であったと改めて感慨を覚えております。

さて、修道の思い出ですが、私が在学していた頃の修道は、スポーツが盛んで、柔道やボクシング、サッカー、水泳など全国大会で活躍する種目も多かったことが印象に残っています。といって交友関係では、スポーツ一筋の者も勉学に励む者も分け隔てなく、本当に皆仲が良かった、結束や団結心が強いのは今も変わらぬ美風であったと思います。

私は昭和28年に11期生として中学に入学し、後に校長を務められた種田豪監督率いる水泳部に入部、以後６年間、ほぼ水泳一色といっても良い学園生活を送りました。この時の先輩や同僚は今でも「先輩」「お前」で呼ぶ仲であり、チームワークの大切さや勝負の厳しさなど多くを学びました。

中学時代を百メートル自由型の全国ランキング二位で終えた私が高校へ進学してからは、大竹中学から入学した中学ランキング五位の見上勝紀君という良きライバルを得て、自由形短距離の中心的な選手として切磋琢磨しながらの猛練習に励んでいました。昭和33年、高校３年のインターハイでは百メートルで自由形決勝で見上君が１位、私は３位を得ることができ、２百メートル決勝では見上君が４位、私が５位に滑り込み、団体総合優勝の行方は最終日の八百メートルリレーで決する展開となりました。しかし、迎えた最終日、中盤まで修道優勢で展開したレースは、僅かに0.2秒の差で２位となり、総合優勝の夢を果たすことはできませんでした。

この時の悔しさは、一生忘れることができませんが、マネージャーをしてくれた土井宏君や水球のキャプテン竹本龍史君をはじめ終生をともにできる多くの友人に恵まれ、今にして思えば、この時の経験がその後の人生の糧になったとの思いを強くしております。

最後に、もう一つ忘れられないのは、５年間クラス担任としてお世話になった物理の辻井利男先生のことです。水泳以外はあまり真面目な高校生とは言えなかった私に本当に親身になって指導してくださり、先生なくして今日の私はないと思っています。辻井先へ生の言い尽くせぬ感謝の念をもって本稿を結びたいと思います。

100周年特別寄稿

サッカーと温泉

大　内　　晟（高校11回）

日本サッカー協会主催の第11回全国シニア（60歳以上）サッカー大会、シニア（70歳以上）サッカーフェスティバルが５月21日（土）から23日（月）まで岡山県美作ラグビー・サッカー場で開催されました。

修道ＯＢの出場者は林　孝治（２回）、石井正司（旧姓川口、６回）高瀬正則、宇根茂雄（９回）、大内　晟（11回）、藤田　勉、若山待久（14）、脇　洋一（16回）、藪　正悟（17回）の９名でした。宇根、大内、藤田、脇は修道では帰宅部でした。宇根は旭丘高校（名古屋）転校後に、修道ならサッカーが上手だろうとサッカー部に勧誘されました。このなかで全国優勝経験者は石井、高瀬、若山の３人です。

岡山県北の美作地方は昔からたくさんの温泉がわき出る湯の国で、なかでも湯原、奥津、湯郷は三つ合わせて「美作三湯」と呼ばれており、宿は湯郷温泉でした。

試合会場は山の斜面にあり、麓のメイン会場はスタンド付き、２段目は天然芝、上の会場は天然芝と人工芝と計４面あります。ここは、なでしこリーグの岡山湯郷ベルの本拠地で、なでしこジャパンには宮間・福元の２選手が選抜されています。ドイツのＷ杯決勝でアメリカとの延長戦の後半、澤選手の同点ゴールを生んだコーナーを蹴ったのは宮間選手でした。地元に凱旋した際、両選手は人力車に乗って多くの人々に大歓迎を受けている映像がテレビで何度も放映されました。

試合は日本サッカー協会競技規則に準じた、シニアの大会規定で行われます。試合時間は40分、ハーフタイムのインタバルは10分、選手交代は自由で、一度退いた競技者も再び出場でき、何回でも交代可能です。各チーム最大選手25名、役員（監督）１名で、ベンチ入り人数は26名となっています。また、怪我防止ための特別規則があり、スライディングタックル及びショルダーチャージの行為は禁止され、試合球も380ｇｒでＪリーグ等よりも70ｇｒ軽い５号球が使われます。

さらに、参加者は健康調査票の提出が必要です。健康上に問題がある場合は医師の診断書と私の責任において処理し主催団体等に一切迷惑をかけないことを家族とともに誓約します。

参加は９地域（北海道、東北、関東、北信越、東海、関西、中国、四国、九州）から15チーム、開催地（岡山県）が１チームの16チームです。60歳以上は４グループに分けて２日かけてリーグ戦をおこない、３日目は各グループの１位チームによる決勝トーナメントがおこなわれます。70歳以上は東日本大震災の影響で東北地域が不参加で14チームでした。１日１試合でグループ優勝チームのみに表彰状が授与されました。Ｃ、Ｄグループは各グループが３チームのため親善試合となりました。

初日に監督会議と試合があり、夜は歓迎会が１チームから７名が参加して湯郷グランドホテルで開催されました。７名は４名と３名に分れて別々のテーブルに配置され、チーム間の交流を図るように配慮されていました。剣豪宮本武蔵の生誕地と言うことで作州武蔵太鼓が披露されました。

２日目（日）の早朝、外が騒がしいので窓を開けると雨が激しく降る中、台上で傘を差しマイクを握って演説している女性と秘書の姿が目に入ってきました。旗には姫･･･と記されており、参議院選挙で姫の虎退治をキャッチフレーズに運動し、マスコミにも大きく報道されて当選した元小沢ガールズの聴衆のいないなかでの寂しい辻たち演説のようでした。

３日目は小雨でしたが、ピッチには水溜りもなく無事に大会は終了しました。昔は土のグランドで雨が降れば水が溜まりシューズは重くなり、転ぶとユニホームは泥まみれになったものですが、芝のピッチでは快適にプレーできました。最近のシニア大会は芝が当たり前になりました。

試合と応援をして宿に帰り、温泉で疲れを癒し、夜はアルコールで軽く喉を潤し大いに盛り上がりました。朝風呂に入りアルコールを発散させて試合に臨むという、若い時には経験出来なかった遠征でした。この楽しみを毎年味わえるように生涯サッカーを目標に頑張ろうと思いまいました。

今年の中国連合チームは広島県内の選手で構成され、サッカーを生涯スポーツとして楽しんでいるメンバーばかりです。全国のサッカーを愛する仲間との交流・親睦を深め、ケガをしないようフェアプレーでプレーしますが、コンセプトでした。

戦績（60歳以上）

Ｃグループは浜松怪童クラブ（東海）、東京都シニア60（関東）、佐賀県選抜（九州）、広島県選抜（中国）でした。脇、藪は広島県選抜、藤田は東京都シニア60で出場しました。１位は浜松怪童クラブでした。

Ｃ	東京都	広島県	浜　松	佐賀県	勝　点	得　点	失　点	得失点	順　位
東京都		１－１	０－２	４－０	4	5	3	＋２	3
広島県	１－１		０－０	４－２	5	5	3	＋２	2

Ｄグループはえひめ四十雀ＦＣ（四国）、愛知県選抜（東海）、ＴＯＭＡＴＯシニア60（北海道）、千葉県選抜（関東）でした。若山は千葉県選抜で出場しました。１位は愛知県選抜でした。

Ｄ	千葉県	えひめ	愛知県	Tomato	勝　点	得　点	失　点	得失点	順　位
千葉県		３－０	０－２	３－０	6	6	2	＋４	2

３チームとも決勝トーナメントには出場できませんでした。

戦績（70歳以上）

Ａグループは中国連合（中国）、京都暁フットボールクラブ（関西）、岐阜サッカーＯＢ（東海）、北海道七十雀サッカークラブ（北海道）でした。林、高瀬、大内が中国連合で出場しました。中国連合は広島県単独のチームでした。優勝は中国連合でした。

Ａ	中　国	京　都	岐　阜	北海道	勝　点	得　点	失　点	得失点	順　位
中　国		２―１	０―０	５―２	7	7	3	＋４	1

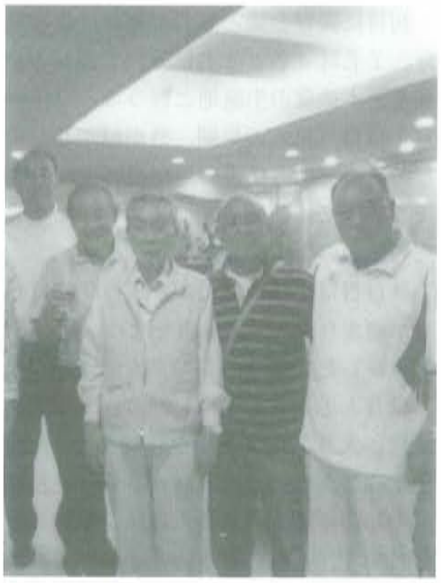
Ｂグループは大阪フットボールクラブ（関西）、岡山桃太郎ＦＣ（開催地）、徳島シニアクラブ70（四国）、静岡県選抜（東海）でした。石井は岡山桃太郎ＦＣで出場しました。岡山県単独ではチームが編成出来ないため中国５県からの選抜になりました。優勝は静岡県選抜でした。

Ｂ	岡　山	大　阪	徳　島	静　岡	勝　点	得　点	失　点	得失点	順　位
岡　山		２―１	０－０	０－３	4	2	4	－２	2

Ｄグループは兵庫県シニア選抜70（関西）、三重ロイヤル（東海）、北信越ロイヤル（北信越）でした。宇根が三重ロイヤルで出場しました。１位は兵庫県シニア選抜70でした。

Ｄ	三　重	兵庫県	北信越	勝　点	得　点	失　点	得失点	順　位
三　重		２－２	１－１	2	3	3	0	2

藪　　脇　　高瀬　　林　　藤田　　大内



脇　　若山　　林　　宇根　　石井

作州武蔵太鼓

100周年特別寄稿

わが修道交遊録

黒　田　省　司（高校15回）

●襟章の色

今年６月、福岡市である講演会に参加しました。講師のＫさんのプロフィールに「広島県生れ」とあったので、「ひょっとして･･･」と思いお尋ねすると、昭和41年卒の修道ＯＢであることが分かりました。

人生どこで縁がうまれるか分かりません。

Ｋさんから「何色ですか」と聞かれ、一瞬とまどいましたが「青色です」とお答えしました。修道の同窓だと卒業年よりも襟章の色がまず話題になることがあります。襟章の色分けは中高一貫教育を進めるなかでのアイディアでしょう。

●笑えぬ話

中高一貫教育の所為で笑えぬ話があります。

2009年11月、ひろしま国際ホテルで「修道高校入学50周年記念同期会」が開かれました。昭和38年卒の第15期生の集いです。参議院議員を長く務められ、当時財務副大臣をされていた峰崎直樹さんの副大臣就任のお祝いを兼ねていました。

その峰崎さんがゲストスピーチのなかでこんなエピソードを披露されたのです。

峰崎さんは高校編入組で、入学してすぐの実力試験の成績を見てガクゼンとしたそうです。学年順位が３桁の成績だったからです。それから一念発起、上位の成績を収めるまでになったとのことです。

実は私も編入組で同じ思いをしました。私の学年順位も３桁で随分大きな数字でした。進級組と編入組の実力差は歴然としていたのです。その後私なりに努力したつもりですが、いかんせん成績は中位安定のまま推移しました。峰崎さんとの違いです。

●半世紀前の母校の快挙

サッカー部が高校２冠という快挙を成し遂げたのは私が高２の時でした。昼休みにサッカーに興じたくらいでも、半世紀前の母校の快挙はいまでも自慢することがあります。

その快挙を支えたお一人が１年先輩の森孝慈さん。ご承知の通り森さんはアビスパ福岡の監督やＧＭも務められました。そのころ九修会の会合にご出席いただいたこともあります。陽に焼けた顔に似合わず温厚なお人柄の方でした。残念ながら森さんは今年７月お亡くなりになりました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

●誇らしい修道ＯＢの活躍

ところで、修道ＯＢが各界で活躍されているのをみると誇らしい気持ちになります。

40年も前のことです。福岡から帰省した折広島県立美術館を訪ねました。そこでみた平山郁夫画伯の「雨のインダス川」という作品にえらく感動したのです。当時は修道ＯＢとは知らず、後にそのことを知って、平山画伯の作品をみるたびに秘かに尊敬し誇りにさえ思うようになったものです。

平山画伯は「坊さんより仏教徒的」だったそうです（瀬戸内寂聴「奇縁まんだら」118）。私は平山画伯にお目にかかったことはもちろんありませんが、作品を通じて心の交遊をさせていただいたように思います。

●長崎県松浦市のこと

いま私が住んでいる長崎県松浦市は、ふるさと江田島市と同じくらいの都市です。農漁業体験ができる「体験型修学旅行」の受入地として知られ、遠く関東・関西から生徒たちが大勢やってきます。

いつの日か修道学園の後輩たちが松浦市を訪れ、交遊の輪が広がることを夢みています。

（長崎県松浦市福岡都市圏交流プロジェクト・チーム　昭和38年卒）

100周年特別寄稿

柔道部の効用

広島修道大学学長　市　川　太　一（高校18回）

中学の終わりころから高校時代、柔道部に所属し主将も務めた。柔道、そして柔道部が私にとってどのような意味があったのか、振り返ってみたい。

まず、スポーツが自分の生活の中に入っていることである。柔道をするために走ったり筋力も鍛えたりした。今は週１～２回、ヘルスクラブで水泳やウエートトレーニングをしている。昨年末、娘が歩数計をプレゼントしてくれ、最近は歩くことを心掛けている。スポーツをすることが苦にならないのは柔道をしたおかげである。大学でも優秀な戦績を修めたサークルを表彰したり支援する制度をつくっているのは、柔道をしてその意義を大いに認めているからだろう。

次に、同じ道場で汗を流したおかげで友人、先輩後輩のつながりができた。18回の同期は当然であるが、中学と高校が一緒に稽古をしたために前後合わせると10年くらいのＯＢと気兼ねなく話しをすることができる。打算なく話ができる友人は人生にとって大切である。

最後に、組織の運営である。現在、大学では学位授与の方針を定めるようになっており、その中にはチームワークやリーダーシップや問題解決能力の育成も入っている。振り返ってみると、柔道部の運営がこれらの能力を涵養するのに役立った。東京オリンピックが1964年に開催され、その影響で中学１年生が20～30名入部し（23回卒）、中高合わせて100名程度の部員がいた。練習計画を立てマネージャーを置き、試合の結果を記録するなど、部としての体制をつくった。主将も任命制ではなく選挙にした。練習に来ない部員、練習に来ても一定時間練習した

らさっさと帰る部員、期待していた部員が辞めるなど、悩みも多かった。腰を悪くし、練習ができず先頭に立てない辛さも味わった。勉強と柔道の両立をめざしたが、柔道一色の高校時代であった。

これらの３つは柔道を始める時に意図したことではないが、結果的に私の人生にとって大きな意味があった。1980年にＯＢ会を組織して会報を出し現役諸君の財政的に支援し始めたのは、私の柔道部への感謝の印である。現在は教員の田中真治君が引き継いでくれている。近藤　明さん（17回卒）の提案で高山信明君(24回卒)が世話してくれて、新見会も毎年開かれている。

柔道に限らず、各種の班活動が積極的に行われることが人間形成にとって重要である。同窓会100周年を機にますます班活動が盛んになることを期待している。勉強が重要であるのは言うまでもない。

100周年特別寄稿

修道20回　卒業生

代表世話人　伊　藤　學　人（高校20回）

我々修道20回卒業生は、毎年１月３日に同期会を開催しています。恩師の先生も５～６名出席下さり、総勢70名前後での定例会合となっています。修道を卒業して40年を超える歳月を経ましたが、同級生が集えば必ず心は修道高校時代に戻り、往時の思い出話に花を咲かせているわけです。特に、今年は恩師の「河野富士雄先生」が我々の中学１年から高校３年までの６年間の生徒手帳の写真をコピー下さり、お持ちいただきました。全く姿を変えた我が風貌に愕然としながらも、懐かしい思い出に一段と盛り上がり、酒量も例年に比べて多かったようです。その「河野富士雄先生」も今年喜寿を迎えられました。６月10日同級生約50人が集い、お祝いの会を催しました。先生からは、いつも通りの簡潔なご挨拶を頂戴しましたが、恩師が元気でお過ごしいただいていることが同級生の元気につながっているとしみじみと感じた瞬間でした。

さて、我が同期会は結束が強いといわれます。なぜか。それは一つの要因として、「藤田雄山君」「冨永健三君」「中川洋君」「大原邦夫君」のお陰かもしれません。「藤田雄山君」の参議院議員選挙から始まった一連の選挙応援には多くの同級生がそれぞれの立場を持って駆けつけました。我々がやる選挙応援ですから楽しくやるのはもちろんですが、それでも場面によっては苦しいこともあるものです。この苦しい場面をともに乗り切ったという体験が、我が同期の結束力になっていると考えられます。この場を借りて申し上げるのもおこがましいのではありますが、多くの先輩・後輩には大変ご迷惑をおかけし申し訳なく、また感謝いたしております。重ねてありがとうございました。まだ、引き続きお世話になるものもおるようですので宜しくお願い申し上げます。

還暦も過ぎ、職業人としての人生に一区切りをつけた人間も出てきました。特に、広島を離れていた人間にとって、両親を思い・広島を思う気持ちが高まってくるとき、広島に同級生の会があり、定例的に会合を開いていることを知れば、懐かしさに広島に戻ってきやすいのではないかとも思います。これからもそのような意味において定例会合は続けて行きたいものと考えています。

100周年特別寄稿

修道との縁

木　村　構　臣（高校20回）

先般、修道学園同窓会会報誌「修道」75号の現行依頼をいただき、修道学園同窓会は創立100周年を迎えるということを知り、修道での思い出について書かせていただきます。

私は、昭和37年中通小学校（竹原市）の恩師のすすめで修道中学校に入学しました。なにしろ、初めて親元を離れて修道への進学でとまどうことばかりでした。段原日出町の寮生活は、上下関係が厳しく大変な思い出がありますが、舎監の故矢吹先生、故松本先生宅でのテレビ観戦あるいは寮生との卓球はなつかしく思い出されます。また、先般の同期会で河野先生からいただいたクラスの写真は、はずかしくもありながらなつかしい50年前のものでした。

中学３年の２学期から、己斐の学而寮へ移転しました。近代的な寮で快適な生活でしたが、学校からは遠く多少不便な場所でした。高校生になるといろいろな問題を起こし、故岡島先生、故保田先生には随分迷惑をかけました。楽しみは、サッカーの生活でした。

高校３年から、アパート生活をすることにしました。校内卓球大会優勝（団体）、サッカー同好会（チャレンジャーズ）、という生活でしたが、いよいよ大学受験という時期になっていました。高度経済成長期であり建築家志望（国立理科系クラス）でした。故辻井先生には大変お世話になりましたが、卒業後公認会計士という職業を知り大きく方向転換することにしました。

当時、公認会計士、税理士の合格者の一番多い大学（文科系）へ入学しました。その後志望通り公認会計士試験に合格し、約10年東京で生活をしました。

昭和52年広島に帰り、勤務先である監査法人の時、会計監査人として修道学園を約10年担当しております。その間、学而寮の廃止時にはなつかしい関係者でお別れ会を開かせていただきました。

その後、縁あって大学の依頼により、広島修道大学非常勤講師を約10年担当させていただきました。税法（会計）科目でしたが、学制を教えることにより自分自身を見つめ直す機会を与えていただいたと思っております。

またその後、業界の先輩より修道学園監事の推薦を受けました。現在、数年が経過しておりますが、約10年をかけて御恩返しをしたいと思っております。

以上、修道との縁について簡単に書かせていただきました。これ程長い期間、修道との縁がある同窓生も少ないのではないかと思います。経済人の一人として修道の影響力はすごいものがあると感じています。今後とも修道学園、修道学園同窓会の益々の発展を祈念して修道学園同窓会創立100周年記念の原稿とさせていただきます。

100周年特別寄稿

九修会の歩み

石　本　俊　亮（高校27回）

修道学園同窓会創立百周年おめでとうございます。今回は、百周年記念としての特集号ということでしたので、改めて、九修会の歴史を振り返り、記録として残すことといたしました。そういうことで、諸先輩のお力を借りながら、ご報告させていただきます。

【安芸の小富士に茜さし.....】

九修会のはじまりは、高15回の九州地区での集まりでした。当時14名程度で開催されていた同窓会で、会を九州在住の卒業生すべてに広げようということで、藤江信三氏、岡村宣明氏、黒田省司氏、花岡悠氏らを中心に、同窓会名簿をもとに、九州地区に住居を持つ修道出身者へ案内を出され、名簿を作成し、会を立上げられたそうです。

平成５年11月27日に創立総会を開催し、九修会が正式に発足しました。初代会長には、旧中24回の柳澤義幸氏（福岡県筑紫野市在住、故人）が就任され、約80名の会員を集め、スタートが切られました。（高15回黒田省司氏談）

【この大旆を翻し.....】

その後、平成13年４月の総会で第二代九修会会長に高８回の藤谷英昭氏（太宰府市在住）が就任されましたが、会員数は伸び悩み65名と低迷していました。会のさらなる発展のため、平成14年度には、林理事長、畠校長を迎え、当時福岡に着任されたばかりの広畑史郎福岡県警部長（高23）、畠山博治NHK福岡支局長（高17）を加え、定例の総会を行いました。その後も、学園からの来賓を迎えながら、九修会の活動を活発化させてきました。（高２回中村和彦氏談）

【見よや修道魂を.....】

現在は、井上雄介会長（高20回）を中心に、登録会員250名の会に育っており、年1回の総会で、近況を語りながら、短い時間ではありますが、それぞれの修道や広島での思いでを語り、しばし「若き健児」に立ち返っています。

本年３月には、九州新幹線も全線開通し、福岡～鹿児島間が約1時間と大幅に時間短縮されました。これからも、より多くの修道健児が参集できるような企画を行い、会則にあるように、修道学園の発展に寄与できればと思っています。

本年度は、事務局の入替えがあり、会計には、濱岡敬一氏（高18）に就任いただき、事務局として、前会計の近藤豊氏（高26）、私、石本俊亮（高27）がお手伝いさせていただくこととなりました。

最後に、本年１月22日に開催されました総会の写真を紹介し、活動報告といたします。

前列右から：
芹川正樹（高24）、青原宏明（高11）、井上雄介（高20）、藤谷英昭（高8）、秋山泰廣（高13）

中段右から：
多田英生（高37）石本俊亮（高27）、上部元義（高29）、田島　剛（高14）、石村謙吉（高12）、石本耕治（高17）

後列右から：
飯盛圭一（高45）、花岡　悠（高15）、三浦隆司（高21）、近藤　豊（高26）、濱岡敬一（高18）、山口裕司（高24）

100周年特別寄稿

修道の愛校心と強力ネットワーク

延　原　　浩（高校28回）

修道学園同窓会創立100周年記念おめでとうございます。私が修道中学に入学したのは、昭和45年でしたが、その前年は学園紛争の嵐が吹き荒れた時代であり、小学６年生の時にテレビのニュース番組で名門修道が大変なことになっていると、子供心に大変心配したのを覚えています。学園紛争と関係があるのか否かは知りませんが、その年の修道中学は推薦入学制度を採用し、私も推薦で入りました。推薦入学はその後二度と行われませんでしたので、私たちは記念すべき推薦入学制度による唯一の学年でしょう。しかしながら、特に中学時代の成績が良くなかったようで、ある先生からは、「お前らホンマに馬鹿じゃのう」とか「もう二度と推薦入学はやらん」と言われたのを覚えています。また、私たちの学年には相当やんちゃ（？）な生徒が多く、後輩だけでなく先輩からも恐れられていたと聞きます（そのやんちゃな生徒達も今は立派な企業経営者ですが）。

修道時代の思い出は沢山あります。個性的な先生方による忘れられないほど印象的な授業、ロックの演奏が響き、他校の女子が沢山来てドキドキし、校内が急に華やかになった文化祭、結構しんどかったガラス工場周囲のランニング、クラブ活動（班活動）では、サッカー、バドミントン、将棋と変わり身が早く、どれも下手のままで終わったこと、修学旅行では、仲の良いグループで京都めぐりをしたこと、高３の体育祭の出し物では、当時人気のあった「がきデカ」の「練馬変態倶楽部」の踊りを一生懸命練習したことなどなど。どれも青春時代の楽しい思い出です。

社会人になってからは、修道の諸先輩方に助けていただくことが多く、あらためて修道の愛校心や強力なネットワークの有難さに感謝しております。修道のＯＢには企業経営者や医者が多く、例えば広島の医師会では６人に１人が修道ＯＢだそうです。私の勤務先である県立広島病院でも、歴代の院長や副院長の中で修道ＯＢの先生方は、私が困難な状況に陥った時、本当に親身になって相談に乗って下さいました。現在も、院長と、３人の副院長の内２人は修道ＯＢであり、さらに、修道時代の同級生が２人主任部長になっていることは、私にとっては大変心強い環境であり、有難いことと感謝しております。

私には２人の息子がおり、２人とも修道でお世話になりました。考えてみれば親子２代でどっぷり修道漬けです。長男は既に社会人ですが、次男も来春には社会人になる予定です。その次男の中学受験の時には学院を蹴って修道に入れたため、塾の先生や同級生の親からは、驚きの目で見られました。確かに、次男の時には修道があまり良い状態ではなかったのですが、社会人になってから、修道ＯＢであることが、大きな助けになることもあるのではないかと思っています。

皆の愛校心が強く、卒業して何年経っても「安芸の小富士に～」と校歌を歌うことができ、さらに、社会に強力なネットワークを持つ伝統ある修道に、親子２代でお世話になったことを感謝し、今後の益々の発展を心から祈念いたします。修道魂万歳！

100周年特別寄稿

修道の人たち

中　村　靖富満（高校30回）

卒業して34年になります。在学中は、とりわけ成績が良かったわけでもなく、生徒会の活動や部活に精を出したわけでなく、かといって多少のルール違反は犯しても、処分をいただいて先生方にご迷惑をお掛けするほど性根のすわった生徒でもなく、その他大勢の平凡な少年だった私ですが、たまたま宮島で父の後を継いで家業に就き、地元に残ったことで、これまでの半生では、やたらと修道の人たちに、お世話になり、可愛がられ、教えられ、難題をいいつけられ、支えてもらっています。

６年ほど前でしょうか、２月の恒例の修道のマラソン大会の日に、突然玉置勝之先生が私のお店を訪ねて来られました。玉置先生には、中一から中三までクラス担任をしていただきました。「今日はマラソン大会でしたね。」と投げかけると、「おう、わしも今年で定年じゃけぇ、会いに来た。」と仰っていただきました。私のことを気に留めてわざわざ会いに来ていただいたことに、とても感激しました。

畠元校長先生にも、中学の３年間、私たちの学年のクラスを受け持っていただきました。同期会開催のご案内をすると、スケジュールを調整してほんの少しの時間でも必ず顔を出していただけます。月一度の同期の食事会にもほとんどといって良いほど参加していただいています。その集まりの中で、事情で高校から修道を離れた同期の生徒のケアをずっとしておられることも知りました。

青年会議所という地域の中小企業の経営者、後継者の参加する団体に入会した時も、会員の約２割が修道のOBで、先輩方に「おまえは何バッジや？」と親近感を持って接していただき、スムーズに会にも馴染むことが出来ました。その他の会や経済界全般でも、多くの同窓生が活躍されており、改めて修道人脈の太さに感心させられています。

数年前に地元の観光協会のお役目で国土交通省を訪問した時も、30年ぶりに会う同級生が温かく出迎えてくれました。たまたま観光課長の役職だったのですが、偶然とはいえ本当に心強く感じました。

40年前に父から薦められて受験し６年間お世話になった母校ですが、50歳を過ぎた今、多くの「修道の人たち」に囲まれて、本当にこの学校を卒業して良かったと感じています。これからもこの良き伝統が継承されるよう、私も微力ながらお手伝いしていきたいと思います。

100周年特別寄稿

今、思い起こされる教材

街　道　武　司（元教諭）

私の授業で扱った教材の中に、今、思い起こされものがいくつかある。

久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ

紀　友則

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花サク。

ナニゴトノ不思議ナケレド。　　北原　白秋

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたち騒ぐらむ

明治天皇

安らかに眠って下さい
過ちは
繰返しませぬから　　雑賀　忠義
ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな　　石川　啄木

友則は桜の散るのを見て、表現では風もないのになぜ散るのだろうと眼前の事実の原因を推量しているが、心の深奥では自然の摂理を感得している。

白秋も「不思議ハナケレド」と余情を残して、読者に自然の営みの神秘性を感じさせている。これは校名の由来である「中庸」の「天命之謂性　性率之謂道」に通ずる。

昭和16年９月６日、太平洋戦争に突入する最後の御前会議において、天皇は明治天皇の御製を読みあげて「余は常にこの御製を拝誦して、故大帝の平和愛好の御精神を紹述せんと努めるものである」と発言されたという。大御心がよくわかる。両天皇とも「波風のたち騒ぐ」原因に得心がいかなかったのである。

原爆慰霊碑の碑文にある「過ち」について物議を醸した一時期があったが、このたびの原発災害によりその意味がほぼ定着した観がある。村上春樹もヒロシマ・ナガサキに継ぐフクシマは日本みずからによる「過ち」であると自己反省している。

啄木は「ふるさとの山はありがたきかな」と詠んだ。因に、私の「ふるさとの山」は野呂山である。高1の遠足の登山コースであった。弘法大師ゆかりの山であり「平家の落人の隠れた山であり」、西南戦没後には浅野長勲の基金にもとずく士族授産事業の行われた山であり、太平洋戦争後には引揚者の入植地となり小学校もできていた。

まじめに生きながら、世相に翻弄されて何かの「過ち」に気づいたとき、花を観照し、自然に回帰する知恵が必要だと昔が思い起こされた。（８月15日）

100周年特別寄稿

修道の思い出

金　子　　慧（元教諭）

十二支が３回り余在職した修道での思い出は山ほどあるが、五十数年前、久保田先生は洋傘、金子はカメラをいつもぶらさげていると言われた頃があった。その頃を思い出してみよう。昭和23年９月長崎県から広島県への出向辞令待ち中で暫くと言うことで戦災の学校を見に行ったところ、そのまま朝礼台にあげられ勤めるようになった。その頃から若い先生達にカメラを持とうと勧めたことだった。何人もの先生が写真をとるようになられ、続いて生徒会に写真班を発足させたが夏休み中に勝手に女生徒を誘い撮影会をやったため即座に潰された。春には引き受ける写真屋がなく前項生徒の身分証明写真をドイツ製でも二千回寿命というシャッターを限界まできった。又大学を作るための文部省への申請写真も自宅の押入暗室で徹夜して仕上げた。

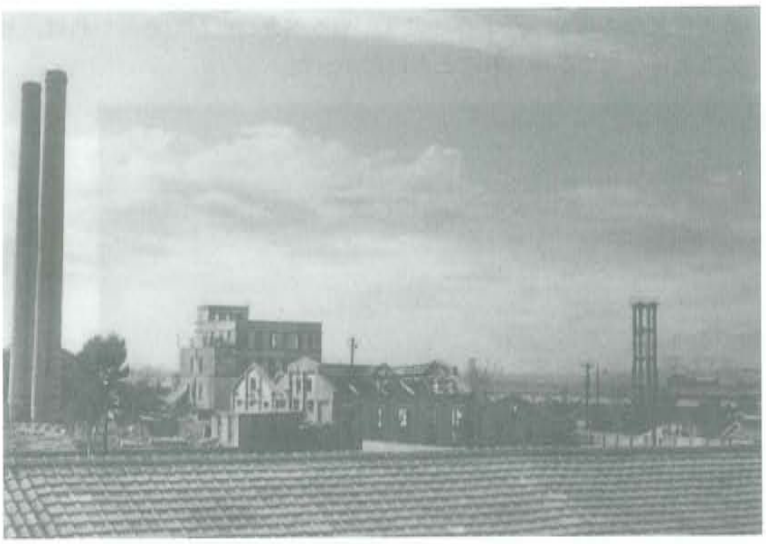
この撮影は大変で余りない器具を多くきれいに見せるよう工夫し、書籍もケースから出して倍増したり、自分の手出し費用なのでフラッシュはマグネシウムで済ませ、望遠とか広角といったレンズのない頃なので距離をかせぐため人絹工場の焼跡にある煙突に登りかけ揺れるので、怖くて高く迄行けず、これも焼残りの人絹の事務所屋上のふちに昇り、足を掴んでもらって写したりと、苦戦の連続だった（23、24年頃の人絹工場の焼跡、あとのガラス工場になった写真を同封します。手前のセメント瓦の屋根は21、22年に作った平屋建の校舎）結局27年３月に認可がおりたが、その時同じものを２枚ずつ焼付けて1枚ずつは中高部に残っている。今ならとても見られたものではないが、当時だから認可されたのだろう。又多くの先生や職員の写真が残っていて、クラス会で利用するために借りにくる人がいたり、24年の運動会の仮装や遠足など特に７回、11回生の60年前の顔が残っている。

戦後間もなく高等工業から鈴峯にこられた先生にカラー写真が教えていただけるという話でしたが、月２万円

は覚悟しなければということで給与の倍以上で諦め、その頃から左手の爪をパレットにして綿棒でスポットして着色を始め、31年の九州修学旅行のアルバムに、やりかけだが残っている。

写真屋に代って写した臨海学校が三度、32年11月創始233年、私学80年の記念式の手土産にしたアルバムの表紙を大輪の菊三輪で作成したが、印刷が貧弱でがっかりした。33年１学期の本試験の前夜４、５人の有志がやってきて、卒業アルバムを作ることになり、私も７、80枚写し戦後始めての卒業アルバムを完成。以後毎年作られている。３、４年女性の顔を写してしたが面白い出来事があったので、それを添えて着任十年の写真の想い出を閉じます。

23、４年頃は縮景園には木はなく、池がある明るい場所で時折撮影会をやっていた。何人かの女性が服装を整え化粧して写りに来てくれた人たちがいた。十年余りたってＰＴＡの個人面談で前に座られてびっくりした。「見た顔ですね」「見られた顔ですね」年月と共にＴ君のお母さんと再会したことがある。カメラ万才。



100周年特別寄稿

教員駆け出しのころ

木　元　俊　雄（元教諭）

信じてもらえないかもしれないが、高校時代、教職に対する私自身のハードルが高くて、自分のような者が教師を職業とすべきではないという思いが強かった。だから、大学を選ぶとき地元の大学に高等師範の流れを汲む教育学部があるのに、あえて文学部を選んだ。大学に進み、教育学部生との共通の講義を受ける機会が増えてからも、やはり肌合いの違いを感じ、教員にはなりたくないという思いは変わらなかった。が、生きていくためには、無為徒食ではいられない。デモ・シカ先生と言われようが、やはり教職につかざるをえないかとの予感は感じた。それでも、卒業後の一年はある出版社に在籍し、その後で、縁あって修道に採用されることになった。

初めて本格的に教室に出たころの感動は今でも憶えている。どの生徒もこの私を「先生、先生」と遇してくれ、それはけっして新参者に対する好奇心や興味本位からではなかった。当たり前といえばそうかもしれないが、教師になるのが嫌でしかたなかったこの自分に対して先生扱いしてくれるものがいる、実にありがたいことだ、自分はそれにどうしてもこたえる責任がある。その思いを強く感じた。

人事の都合で多少の入れ替えはあったものの、１年目は、中１（17回生）の国語、中３（15回生）の漢文と中２（16回生）の古文・作文とを受け持った。なかでも中２の作文はテキストがあるわけではなく、嫌がる生徒の多い科目でもあったが、それだけに特に思い出に残る。幸いだったのは教科の先輩たちがあれこれ細かい注文を

つけず、自由にやらせてくださったことだ。「国語の力をつけること」この一点を守っていれば、かなり自由に授業をさせてもらえたのではないかと思う。毎週作文を書かせ、すぐ読んで添削し批評を入れて、返す…たいへんではあったが、生徒の一人ひとりを知るうえでもたいへん有用だった。字形からこの生徒は左利きだということさえ分かるのであるから。

高島俊男著『芭蕉のガールフレンド』（文春文庫、「お言葉ですが…⑨」）に「武蔵にいたころ」という一文がある。それを読んだとき、教員駆け出し時代の修道の雰囲気にあまりにもよく似ているので驚いた。

「自由に」と言ったが、これは教育にとってたいへん大事なことだと思う。これには「する」側と「させる」学校側との信頼関係がなければ成り立たない。わたしの場合それを可能にする環境があったということは幸いだったと思う。すっかり局外者になった今、ニュースなどで教育界のことを見聞きすると、そういった「自由」が教育界に希薄になって、「する」側と「させる」側との信頼関係がこじれてしまい、何もかもが息苦しくなってきているように感じる。われわれの初任者時代、昼休みや放課後によく運動場で生徒とボールを追っかけていたが、だれも教育を怠けているとは見なさなかったように思う。やるべきことができていれば、放課後午後４時５分になると、勝手に下校しても上司からとがめられることはなかった。

1961（S 36）中２春の遠足引率
於／呉二河峡にて

故・清原先生（音楽）
筆者（国語）
故・真野先生（学年主任・社会）
故・成田先生（国語）
先頭先生（養護）

1962（S 37）春　己斐茶臼山　生徒とともに

100周年特別寄稿

同窓会会報誌『修道』寄稿

久　保　敬　信（元事務長）

私の修道での「出来事、思い出」としては、今回の東日本の大震災で特に思い出した事がある。

私が修道中学高学校等学校の事務長を務めていたある夏、授業がない期間を利用して高校校舎の外装補修工事を行った。

工事中のある真夜中、職員から高校校舎の屋上「ペントハウス」付近から出火し、消防車が数台来て消火中との電話連絡が入った。

私は、急遽出向いたが幸い既に鎮火していた。真夜中の事でもあり明々と炎が上がり近所の方がたも、多く集まっておりさぞや驚かれ、また、多大な恐怖と迷惑をかけたことである。

完全鎮火後早速、消防署員と原因調査を行った。火災場所は、工事用の工具等が、多く散乱しておりその付近が燃えていたが、出火と燃焼物との関係が不明であり出火原因は特定出来ずその夜は終了解散した。

翌日、早速消防署に諸報告とお礼に出向き、今後の処置と始末等の指導を受けたが、大事に至らなかった事、原因不明であり再調査する事もなく不問となり行政関係は終了し安堵した。

この件については、当然のこと、理事長・校長を初め教職員に報告をすると、共に、学校に於いては、今後再びこのような事態を起こさない環境作りが肝要だと言う事、また、工事関係者に対して厳重な注意を行い、学校周辺の民家に挨拶まわり失火説明と陳謝をし快く許しを得て一応収束した。

ことわざに「泥棒被害は一部の被害で終わるが、火災は全てを失う」自分にとっては、東日本の千年に一度と言われる大震災に匹敵する程の大きな出来事であり、一時心の負担で軽いトラウマ的時期もあり貴重な体験で、大火になっていたらと思うと今でも身が縮む思いがする。

火災発生の知らせは外出先から帰校した合宿中の高校生でした、高校生が真夜中にどこに行っていたのか知るよしもないが、いち早く知らせてくれたお陰で大事に至らず、任期満了まで事務長を務める事が出来、生徒に心から感謝している。

原因不明の出来事で真夜中の「ミステリー？」に似た、このような記事を『修道』に投稿することについては、随分思慮したが折角の依頼、既に後期高齢者でもある自分にとって、学園の何処かに認めておくことも責務と思い拙稿ながら敢えて投稿した。

出火した高校校舎は火災と関係なく新しい近代的な施設に生まれ変わっており、ちなみに、子供は卒業生で、孫は、現在中学3年に在籍し修道で学べる事を誇りにし野球部で体を鍛えている。

100周年特別寄稿

駆け出しの頃

高　橋　俊　夫（元教諭）

昭和43年４月、新米の英語教師として初めて授業に出た時、一番に感じたのは圧迫感だった。それは、教壇の真ん前から後ろの黒板のすぐ前までぎっしり並んだ机と、そこに犇めき合っている生徒の数の多さから生じていた。その頃のクラス定員は57人前後だったから、一列が８人か９人、９人の列は後ろを通れない。８人でもやっとであり、息が詰まるような教室だった。しかし、もしかするとこの圧迫感は、翌年の秋に起こった学園紛争の中で発散されていくことになる、生徒達の鬱屈したエネルギーのようなものが、私の心に圧迫感を感じさせる程

になっていたのかもしれない。

窓側の列の後ろに掃除用具を入れるロッカーがあり、その上に如雨露が置いてあった。それは植物の水遣り用ではなく、埃が立たぬように教室の床や廊下、教壇の上にまで水を撒くためのものであった。教室の床も廊下も屋外と同じセメントで、校舎内も土足だったので屋内に砂や土が入り込みその埃がたった。特に体育や昼休みのあと、雨降りの翌日がひどかった。授業に行くと、『週番、水を撒け！』『ここに種を撒いたら生えてくるで』などと言うだけでなく、自分でも納得のいくよう水を撒いていたりしたので、何年か後に高２のあるクラスが３学期最後の授業の時、如雨露を記念にくれたこともあった。そんな床に生徒はカバンや上着を置き、埃の中で賑やかに弁当を食べていた。これが男子校というものなんだろうと、次第に慣れてはいったが、教室や廊下に水を撒いていたような学校がその頃ほかにもあったのだろうかと、今考えてもやはりあれは不思議な光景だった。

最初の年は中３と高１の授業に出た。どのクラスも私の英語の力を試そうと、あるいは立往生させてやろうと、毎回あれやこれや難しい答えにくい質問をするので、こちらも負けるものかと、様々に想定し準備していった。50分の授業が大変長く感じられ、毎日が大変だったが、いろんな意味で勉強になり、この一年を乗り切ったことで少し振りがついたように思う。その頃高校の廊下を歩いていると、『おい、ありゃあ大学生か』という声が聞こえたりした。

それから20年後、中一の学級担任になった。入学後数日して、修道に入学した感想や抱負などを書かせたら、その中に『わくわくドキドキしながら待っていると、ドアが開いて担任の先生が入ってきた。なあんだ、ただのおじさんじゃないか、と思った。』というのがあった。もっとも、このあとに『しかし、だんだんとそうではないことがわかってきた。』と続いてはいたのだが、私は、まだ苔はついていなかった、少なくとも十二歳の少年にはそのように映ったのだと、少し嬉しい気がした。

100周年特別寄稿

心に残る修道同窓生の思い出

仲　井　正　美（元事務長）

私は1968（昭和43）年から2000（平成12）年まで修道学園同窓会の幹事会に事務局の一員として列席させていただいた。その中から心に残る修道同窓生の思い出を述べてみたい。（敬称略）

当時の同窓会事務局長は吉田好雄（旧中30）で、中高部ＯＢから新見剛士（旧中35）、大学部ＯＢから私が事務局員として列席した。会長は岩井　章（旧中８）のときである。

1969（昭和44）年の学園紛争のときは、学校状況の報告を受け「学校をなくしてはいけない。」ということから同窓生の支援をお願いしたいということで度々会合が開かれている。同窓生の役割は学校へ行って生徒や学校の様子を見守るということであった。岩井会長は「同窓会から学園理事になった者は無報酬であっても、同窓生を代表して責任を持って行動しなければならない。」と言われたことが強く印象に残っている。

同期の山田節男（旧中８）が広島市長選に立候補され、その総括責任者になられるということで、会長を辞任された。

岩井会長のあと中野重美（旧中18）が会長になられた。中野会長は、当時の幹事長を会長代理に改め、旧中、新高、短大、大学から副会長を選出し、オール修道体制の同窓会組織を作られた。1979（昭和51）年のことである。

1984（昭和59）年、土谷太郎（旧中34）を経て、1990（平成２）年、森本弘道（高７）が会長になられた。当時私は中高部に勤務となっていた。一番の思い出は同窓会報「修道」（1991（平成３）年第１号）の創刊である。内容は同窓大会、評議員会、幹事会報告から人物往来、支部だより、修道の碑、寄稿文などで現在も続いている。最初に発行したとき、森本会長から「この会報はずーと発行するように」と激励、応援していただいた。当時このように長く続くとは思ってもいなかったが、これは後輩の事務局の皆さん、寄稿文など情報を寄せていただいた同窓生の皆さんのおかげである。今後も引き続いてご協力、ご支援をいただきたい。

森本会長のとき、同窓生にとって忘れられない事業がある。それは広島修道大学同窓会会員の増加に伴い、修

道学園同窓会連合会を発足させたことである。山下　泉副会長（高７）が検討委員長になって、1994（平成６）年原田睦民（旧中33）に連合同窓会長になっていただいて発足した。

被爆50年に際して、平山郁夫画伯（旧中39）より絵画を寄贈いただくことになり、1995（平成７）年８月２日、三枡　積（旧中39）、小尻正俊（旧中39）、畠眞實（校長　高７）と私で鎌倉の平山郁夫画伯のアトリエを訪ねて「原爆ドーム」をいただいて帰ったことも懐かしい思い出である。三枡先輩には平山郁夫画伯と連絡を取っていただき広島に帰られた時には必ず母校修道を訪問されている。原爆資料館設置の「広島生変図」（陶壁画）にも同窓会として関わり、「被爆建物旧広島陸軍兵器支廠の外壁煉瓦（歴史に生きる）」、陶板画「希望の光　安芸の小富士」は現在も母校に記念碑として残っている。

大下龍介（高７）が会長となって心に残る思い出は、新キャンパス建設募金活動である。大下会長の強力なリーダーシップで目標の３億５千万円を超える４億円近い募金が集まったときは、修道ＯＢの母校愛の大きさを実感したものである。その後大田哲哉（高11）、高木一之（高10）に会長が引き継がれ今日に至っている。修道同窓会の今後ますますの発展を祈念してやまない。

このほか心に残る多くの思い出があるが、紙面の都合で掲載できないことを御容赦ください。

（なかいまさみ　元修道学園同窓会事務局長・修道学園同窓会連合会事務局長）

写真説明：右から小尻氏・三枡氏・平山氏・仲井　1995・8・2平山画伯アトリエ

100周年特別寄稿

学園は青春の広場

田　中　清　治（元教諭）

修道での学園生活は、長い人生行路のなかで短くても、最も濃密な青春のひとときであったこと間違いない。私は昭和35年から４年間、歴史の教師として在職した。その後、東京に職を得て、在京の16期、17期の皆さんの同期会によばれて準会員としての栄に浴している。同期会場は、年々歳々、屈託のない伸び伸びとした空気が満ちている。近年は、みんな還暦を過ぎた紳士たちの集いだか、それでも少年のように溌剌と歓声をあげている。普通、人はいろんなことを慮って、控えめに語るものだが、同期会では紳士たちが裸になっている。このように無警戒で無邪気な空間を共有できるのは、みんなが一緒に濃密な生活、今さら気取ったりしても仕方のない、時間を過ごしたからである。私は紳士たちの大切な一時期を預かったものとして、今、省みて未熟さを愧じるが、私自身も、同じ空間で青春のひとときを享受していたことも事実である。

ともあれ、このような空間が100年以上も続いて、同窓会100周年になるのだからこれは凄い。

私が修道に面接に行った時の校長は、広大教養部の生物学の教授であった晴山先生であった。傍らに岡島先生（当時、教頭）もおられたと思う。私が成績表などを差し出すと晴山先生が首を傾げられて「君は生物が・・」

とかいわれた。私も思い当たることがあって、これはダメかと思ったが、始業式には出席を許された。このとき岡島先生が「教頭講話」として三つのことを話されたが、なかなか味があった。その一は、君たちは“品のよい”人になれということ。その二は“ほほえましい”人になれということ。その三は忘れたが、“伸び伸びとした”人であたかもしれない。岡島先生は細かく例を挙げて熱く語っておられた。当時、新米で若造の知恵と経験では、このような表現と説得の言葉は使えるものではなかった。たとえば「品のよい、ほほえまし、伸び伸びとした」人といわれても、考えてみるとこれは大変なことである。年をとっていろいろな苦労をしてみると、品よく、ほほえましく自己を持することも並大抵のことではない。しかし、翻ってあるべき人の姿としては、たやすくイメージできて理解しやすい。教育目標として実にこなれた目標といえよう。練達者の技を思おう。

ところで東京で会う16期、17期の人たちだけでなく、何十年もたって空港ロビーで声をかけられたり、銀行の窓口で「田中先生ではないですか」と言われ偶然の遭遇を喜ぶなど数多く出会いがあった。確かなことは、修道の卒業生はすべて好漢である。してみると岡島教頭の訓育は行き届いているのかもしれない。（弁護士　田中清治）

100周年特別寄稿

校外教育に関する研修の思い出

保　澤　　治（元教諭）

昭和50年代前半を中心に、全国的に校外教育のあり方について問題が提起され、修道においてもその研修の必要性が喚起され、各学年における従来の校外教育を考える気運が高まった。主に取り上げられたものに、当時の中一林間学校、中三臨海学校、中三の修学旅行、高二合宿ホームルームなど宿泊を伴うもののうち、特に中三修学旅行を如何にすべきかが、最大のポイントにとり上げられた。当時の特活委員会にて、研修的要素と親睦的要素の二面を柱として、「じっくりとものに接する機会」と位置づけ論議された。修学旅行の本来のねらいとしては、Ａ見聞の有効性、Ｂ行動の快適性、Ｃ所要経費の経済性の三点があるが、私はＡを十分に体得して来てほしい－現地で見聞できる好機を余すところなく活用して来てほしいと思い、集団行動についてのモラルや生徒相互の心の通いを深める機会にする事は勿論重要であるが、修学旅行を知性充実の絶好の機会としてとらえ、凡ゆる機会が学習の機会である－学習に役立てたいと考えた。この研修的要素を日常の学校生活とどのように定着させるか、即ち日常の各教科カリキュラムの中で、その内容との密接な結びつき、平素の授業において意図的に取り入れ、事前学習を自然にスムーズに実施する。旅行のコースに当たる各見学地について教材化し、フィールドノートを作成する等実践した。また、実施に当たってはじっくりとものに接する機会→行程の一部を生徒の自主研修に当てる、即ち受動的学習から能動的学習へ、あわせて生徒間の協力・連帯意識・健康及び安全・経済観念等を具体的に自覚させ行動できる場を与える。こうした事項をふまえて、「学習に資する修学旅行」をその目的に合致する西九州・阿蘇を拠点として実施したわけである。

最初の試みとして十分にその目的の達成は困難であったが、研修的要素と親睦的要素の二本柱は、前者をやや強調したきらいはあったが、最初の試みとしては一応その成果はあげられたと思っているし、今でもなつかしくよみがえってくる。

丁度、全国私学教育研修会が広島で開催され、その中の校外教育の部会で「学習に資する修学旅行」の実践報告を行った。これを機会として、全国私学教育研修会の中央大会が八王子の研修センターであり、そこでも発表し、また、翌年「九州を如何に見せるか」という校外教育の全国私学研修会で長崎にて発表し、多くの参加者から種々関心を寄せられたことを、今でも鮮明に記憶しなつかしく思っている。

現在は時代の変化により新しい考え方による校外教育として、東大の見学や、大型のチャーター船で南西諸島方面の研修が実施されているようであるが、根本的な目的としての「じっくりとものに接し考える」ことが主眼であることを忘れてはならない。

100周年特別寄稿

修道での44年

吉　崎　冨士雄（元教諭）

早いもので、田舎の一小学校から修道中に入学したのが昭和24年で、今年は後期高齢者。この学年が７回生で花の黄バッジ。都会の級友達について行けるかと不安な毎日だった。病弱で欠席も多く、級友達のやさしさは有難かった。昭和30年、何とか高校を卒業しました。４年後、英語教師として古巣に戻ってきた。時の流れと共に学校も変り、生徒に昔話をすると信じてもらえない事が多かった。

私達７回生から６年間、修道と女学院が中３時に、同日程同行程で修学旅行をした。どこかの校長に「御幸橋のどぶねずみ」とまで呼ばれた時代の生徒には冗談としか思えない話だろう。今は立派な卒業アルバムがあるが、そんなものを作る余裕のない時代だった。広島駅近くの饒津神社に行き、卒業生全員石段に並んでパチリ。思い出の一枚である。隣りの教室の先生がカンニングを見付けた話など、とても信じられないだろう。恵まれている事に感謝し頑張ってもらいたい。

昭和50年、健康に自信が出てきて、今しかないと休職してアメリカ留学した。何と、この年に26年間待っても見られなかったカープの初優勝があった。「鯉わずらい」の私を安心して勉強させようと、先生方は新聞を毎日送って下さるし、授業の途中で迷惑をかけたのに、高３生からも多く手紙をもらい感激した。優勝の日、生徒からKOITAKINOBORU（鯉滝のぼる）と電報が来た。

ついでながら、CARPは動詞として用いると、口をパクパクさせるイメージから「気に入らない事にぶつぶつ文句を言う」の意がある。35回生の卒業後、NHK英会話で有名だったリトルモア先生を修道に迎え、彼の大ファンだった何人かの35回生に残念がられた。このリトルモア先生が、よく笑いながら言っておられた。YOSHIZAKI-SENSEI IS ALWAYS CARPING ABOUT CARP。

生徒として６年、教師として38年の計44年を修道で過ごさせてもらい、平成９年３月修道に別れを告げた。私を支えて下さった多くの人々に感謝しながら。

今年の７回生同期会で、後期高齢者になり、更なる頑張りを誓い合った。まだボケてはならじと、今年も野球部追っかけの夏を楽しんだ。「好きじゃのー」「倒れるでー」の声を聞きながら４回戦まで追っかけさせてもらい、パワーをもらった。

自分をふるい立たせるためもあり、「ガッツ」を連発してきた。ガッツと叫びながら撮った多くの写真があるが、44回生卒業式の日の一枚を選んでみた。

「先ず健康」でガッツ！　　修道万才！

支部だより

九州地区同窓会（九修会）開催報告

近藤　　豊（高校26回）

今年も１月22日土曜日午後６時より博多駅前の寿司割烹『鮨隆』にて、九州地区同窓会（九修会）を開催しましたのでご報告させて頂きます。

今年は、昨年修道の同窓会名簿が新しくなり、これを元に九州在住の卒業生に往復はがきにて九修会の開催案内を送りました。その為に、発送数も昨年より100名ほど増え約300名に案内状を発送しました。

最終的には、出席者は17人となりました。（昨年出席者13名）

今回初めて出席された方もありましが、そこは修道出身という事もありあっという間に恩師の先生方の話や『ガライチ（今は出来無いと聞いていますが？）』の話などで盛り上がりました。

また、昨年の開催報告を載せて頂いた同窓会会誌や今の修道学園のパンフレットなどを同窓会から送って頂いたので、出席者で回覧し自分達が学んだ校舎が新しくなり制服なども学生服からブレザーへと変わっており、それぞれいろいろな思いをもたれたようです。

私事ではありますが、会誌に載せて頂いたおかげでそれを見た広島にいる同期生から数十年ぶりで電話がかかってきて、非常にうれしい思いをさせて頂きました。

今回の同窓会では、事務局長の石村謙吉氏（Ｓ36年卒）より事務局長の若返りを図りたいとの御提案を頂き、出席者の全員一致の賛同を得てＳ50年卒の石本俊亮氏（福岡市在住）にバトンタッチすることとなりました。

これに伴い会計業務も福岡市内在住の濱岡敬一氏（Ｓ41年卒）に継いで頂くこととなりました。

業務の引き継ぎは、３月12日（土曜日）に寿司割烹『鮨隆』で井上会長と石村氏、濱岡氏、石本氏それに私（近藤）の５人で行いました。その中では、今後九修会に多くの方々が出席して頂けるように、名簿を見ながら同期生には声かけをする事や同窓会本部とつながりを密にしていく事などを確認しました。

今後、同窓会本部より九修会会長の井上氏と新事務局長の石本氏に同窓会会誌を定期的に送って頂ければ幸いです。

この日は、九州新幹線が鹿児島から博多まで開通し博多駅もリニューアルしました。鹿児島からでも２時間ほどで福岡に来ることが出来るようになったので、次回の九修会ではさらに多くの方々に出席して頂けるのではないかと思います。

平成22年７月24日（日曜日）

九修会総会出席者名

平成23年１月22日（土曜日）

- ○　藤谷　英昭（Ｓ31年卒）福岡県太宰府市在住
- ○　青原　宏明（Ｓ34年卒）福岡市西区在住
- ○　石村　謙吉（Ｓ35年卒）佐賀県三養基郡基山町在住　→（旧）事務局長
- ○　秋山　泰廣（Ｓ36年卒）熊本市在住
- ○　田島　　剛（Ｓ37年卒）北九州市若松区在住
- ○　花岡　　悠（Ｓ38年卒）福岡県東区在住
- ○　石本　耕治（Ｓ40年卒）福岡県八女市在住
- ○　濱岡　敬一（Ｓ41年卒）福岡市中央区在住
- ○　井上　雄介（Ｓ43年卒）福岡市中央区在住　→　会長
- ○　三浦　隆司（Ｓ44年卒）福岡市早良区在住
- ○　芹川　正樹（Ｓ47年卒）福岡県久留米市在住
- ○　山口　裕司（Ｓ47年卒）福岡市西区在住
- ○　近藤　　豊（Ｓ49年卒）佐賀県鳥栖市在住
- ○　石本　俊亮（Ｓ50年卒）福岡市中央区在住　→（新）事務局長

○　上部　元義（Ｓ52年卒）北九州市若松区在住
○　多田　英生（Ｓ60年卒）福岡市中央区在住
○　飯盛　圭一（H05年卒）福岡市南区在住

『写真』
左上：多田・石本（俊）・上部・飯盛・花岡・三浦・近藤・濱岡・山口
左中：　芹川　・　田島　・　石村　・　石本（耕）　・　秋山
左下：　青原　・　井上　・　藤谷

会長：井上　雄介（Ｓ43年卒）
〒815-0083　福岡市南区高宮1-18-20-205

九修会事務局長：石本　俊亮（Ｓ50年卒）
〒810-0031　福岡市中央区谷1-15-32-901

支部だより

広島市修道会

八　木　彰　一（高校53回・広島市道路交通局都市交通部勤務）

去る平成23年７月８日、メルパルク広島「ブルートパーズ」にて平成23年度広島市修道会総会（第57回）が開催されました。昨年は災害対応などのため参加できず、今年の総会を心待ちにしていた会員の方も多く、また、今年から取り組んだ新たな催し（ゲーム）なども功を奏し、参加した方々にとって絶好のリフレッシュの機会となりました。また、来賓として御臨席いただいた田原校長からは、時折笑いも交えながら母校の近況や現役学生の様子を伺うとともに、心のこもった激励の言葉を頂戴いたしました。

今年は、広島市にとっても、市職員である私にとっても、大きな変化の年となりました。12年ぶりの市長交代によって、新たに松井一實市長を迎えるとともに、同時に行われた市議会議員選挙に伴う議長交代により、修道会から木島丘先輩が議長に選任されました。総会では、木島先輩から、今後の広島市の目指すべき姿について力強いメッセージを頂き、今後の職務に向けて改めて気が引き締まる思いがいたしました。

総会では、日頃あまり接点のない、親子ほどの年齢差のある先輩方からのありがたい話やありがたくない話、さらには昔話にと、話題は尽きることなく、総会はあっという間にお開きの時間を迎えました。時間を忘れるほどの盛況ぶりで、改めて、世代・年代を超えた「修道」という強い「チームワーク」を感じたひと時でした。

話が少し外れますが、３月11日の東日本大震災以降、沈んだムードの日本に、とびきり明るいニュースをくれた「なでしこＪＡＰＡＮ」の大躍進も、その「チームワーク」の良さが注目されています。

改めて考えてみれば、被災地の復興に向けた「がんばろう!!日本」の合言葉の中にも、「チームワーク」の精神や、その重要性を感じることができるのではないでしょうか。

今回の総会を通じ、修道同窓生のチームワークの良さを再認識するとともに、そのチームワークを最大限に市政に活かしていくことが、広島市修道会の使命であると感じさせられました。

被災地では、多くの方が犠牲になられ、今なお避難生活を余儀なくされている方もいらっしゃいます。
広島市においても、緊急物資の輸送、職員の派遣など、様々な支援を行っておりますが、私自身も都市インフラ行政に携わる身として、市民のみなさんの代表であるという自覚を持ちながら、職務を通じて応援していきたいと考えております。被災地の一日も早い復興と飛躍を願ってやみません。

最後になりましたが、お忙しい中、御臨席賜りました来賓や顧問の皆様方には、この場をお借りいたしまして心よりお礼申し上げます。

支部だより

2011年度修道学園同窓会関東支部のつどい

松　尾　暢　泰（高校31回・サンケイスポーツ）

「2011年度修道学園同窓会関東支部のつどい」が７月11日、東京ドームホテルで開催されました。

今年は、３月11日の東日本大震災と東京電力福島第１原発事故という、異例の状況下で行われました。幹事一同「本当にやれるのか？」と不安を感じたものでしたが、派手なことは控え、校歌にある「質実剛健」を旨として、シンプルかつ実り多い会にしよう―ということで、「結束～東日本大震災を超えて～」をテーマに挙行しました。

当日は夏の日差しも強い中、恒例の講演で行事がスタート。今回の講演者は大手予備校のカリスマ数学講師で、我ら高31回の同期、大上芳樹氏の「πについて」。円周率３・14にまつわる数字の不思議を興味深く、分かりやすく講演してもらいました。300人収容の会場はほぼ満員。皆が修道時代の数学の授業以上に？目を輝かせて聴き入りました。

同窓会は午後７時から始まりました。関東支部として東日本大震災の被災地に義援金100万円を贈ることを決め、その目録が同窓会関東支部の林有厚会長（高１回）から中国新聞社東京支社に贈呈されました。

シンプルにいこう、と決めたものの、お楽しみは必要。ということで、今回の目玉として「利き酒大会」を実施しました。壇上で利き酒をしてもらう人を事前に募集したところ70人以上の希望者がおり、抽選で決めさせてもらうという〝うれしい誤算〟もありました。５種類の日本酒を飲み比べて当てるという、聞けば簡単そうに思えますが、なんと全問正解者がゼロ。「用意した賞品、どうする？」と一瞬引きつりましたが、協賛の久保田酒造・久保田貴八郎氏（高31回）の太っ腹な即断で、３問正解者に賞品が贈られました

また、今回も「もみじまんじゅう」のやまだ屋さんには会場でご提供いただき、オタフクソースさんには模擬店で、出来たての広島お好み焼を提供いただきました。さらに両社にはお持ち帰りの「お土産」まで提供いただきました。改めてお礼を申し上げます。

ちなみに、今年は修道の校名入りの「特製お猪口」と「特製うちわ」もお土産で用意しましたが、昨今の「節電」のあおりで、「うちわ」は思いのほか好評でした。

もう１つの目玉は「お楽しみ抽選会」。まさに一発勝負のクジ引きで、東京ドーム会長でもある林会長からプロ野球の東京ドームでの試合チケットなどをご提供いただき、会場の熱い視線が壇上に集まる中、次々に当選者の氏名が呼び上げられると、歓声と拍手が沸き起こりました。

会の締めは校歌合唱。卒業してから歌う機会も少なくなりましたが、「安芸の小富士に～」と歌い始めると、後はすらすらと口に…。各世代、幅広い年齢層が肩を組んで大合唱する姿に、改めて感動がこみ上げてきました。シンプルかつ熱い大会に、「修道魂」を強く感じた１日でした。

▲31回による校歌斉唱

▲31回大上君の講演

▲利き酒ゲーム

東北支援義捐金　中国新聞社へ▶

支部だより

修道医会平成23年度（第55回）総会報告

修道医会会長　　井　内　康　輝（高校19回）

修道医会は修道学園を卒業し、主として広島県内で医師として活躍している方々の集まりであり、会員数は約1,000名です。昭和31年７月１日に発足して以降、毎年１回の総会、ゴルフ大会などを催し、さらに平成20年から学生部会をつくり、広島大学医学部の在学生のみならず、他大学学部の在学生にもよびかけて部会としての活動を行っています。

今年度の総会は平成23年７月９日（土）、ANAクラウンプラザホテル広島を会場に開催しました。午後４時30分より評議員会を開いた後、午後５時からの総会において、平成22年度の事業報告や決算報告に加えて、平成23年度の事業計画や予算が担当幹事より提示され、いずれも原案通り承認されました。加えて、第13回学術奨励賞は高校42回卒の松本正俊先生（広島大学医学部地域医療システム学講座准教授）が、現在の社会問題である“わが国の医師偏在に関する国際比較研究”に関する論文業績によって受賞されました。第12回社会功労賞は、旧中36回卒の伊達昌英先生が永年の地域医療ならびに医師会活動などの功績によって受賞され、第４回文化功労賞については、高校９回卒、新本稔先生、高校13回卒の井原俊彦先生、小林邦彦先生によるハワイアンバンド“TROPICAL ISLANDERS”が、平成２年からこれまでの絶ゆまぬ活動を対象に受賞されました。

さらに今年は役員改選の年にあたり、第17代の山肩俊晴会長が任期を終えて辞任され、第18代会長として井内康輝が推薦されました。任期は平成23年７月10日より平成25年の総会日までの２年間となります。

次いで午後５時半より特別講演として、高校21回卒で高知大学医学部泌尿器科学教授の執印太郎先生から“Von Hippel-Lindau病の疫学調査と遺伝子診断”と題した講演を拝聴しました。ご自身のライフワークである疾患の研究を感銘深く伺いました。

午後６時半からは会場を移して懇親会を開きました。山肩会長、ご来賓の林正夫修道学園理事長、高木一之修道学園同窓会長のご挨拶の後、久しぶりにご出席いただいた藤田雄山前広島県知事からお話を伺った後、永年のご功績に対して修道医会から感謝の意を込めて銀盃を贈呈しました。田原俊典校長からはいつもながら元気のでる学園の現状を伺い会場が湧きました。さらに前述の３つの賞の表彰と受賞者の謝辞が続き、岩森茂先生（旧中36回卒）のご発声で乾杯して懇談に移りました。途中で、新任の広島大学医学部教授、横田和典先生（高校35回卒）、広島鉄道病院病院長、小野栄治先生（高校19回卒）、県立安芸津病院病院長、濱中喜晴先生（高校22回卒）それぞれのご紹介、ご挨拶がありました。学生部会からは16名が参加し、自己紹介の後、県内主要病院の病院長からの励ましの言葉を受けました。今回の参加者は86名でありましたが、最後に肩を組み校歌を斉唱し、修道健児の心意気を示すとともに、今後の各分野での個々の活躍と修道同窓生としての連携を確認した次第です。

支部だより

修道歯科医会 活動報告

広報担当理事　毛　利　雅　哉（高校31回）

まずは、このたびの東日本大震災で被害にあわれた皆様に対し心より哀悼の言葉を申し上げますとともに、1日も早い復興をお祈りいたします。

私ども「修道歯科医会」からは、広島の歯科界を支える多くの人材が輩出されております。そんな大先輩のみなさまに成り代わりまして、僭越ではございますが、私が会の活動報告をさせていただきます。

まずは大変うれしいご報告がございます。本会会長でいらっしゃる小松昭紀先生(高6回)が、この度の春の叙勲において多年にわたり歯科保健医療にご尽力されましたご功績により、旭日双光章受章の栄誉に浴されました。このことは、ご本人はもとより私どもにとりましてもこの上ない慶びでございます。小松先生におかれましては、これからもますますお元気で、私たちを導いていただきますようお願いいたします。

さて、平成22年度の総会でございますが、平成22年11月13日(土)午後4時より「県民文化センター」にて開催されました。総会の開催に合わせまして恒例の学術講演会が行われ、今回は講師をJA府中総合病院名誉院長でいらっしゃる品川晃二先生にお願いして、「日本人の食と健康」と題した講演をおこなっていただきました。講演会終了後には、来賓として田原俊典校長、林正夫県議会議長をお招きしての懇親会が開催されました。田原校長、林議長それぞれよりご挨拶をしていただき、和気藹々とした和やかな雰囲気で宴も進み、最後は参加者全員での校歌斉唱でお開きとなりました。

総会以外にも会員の親睦事業もおこなっております。特に、「マツダスタジアム」でのカープ観戦は団体テラスを貸し切って行われ、家族も含めての参加で毎年大いに盛り上がっております。また、ゴルフコンペも年に1回開催され、会員の交流に役立っております。

これからの会の課題といたしましては、若い先生方にもっと入会していただくこと、そしてこの伝統を引き継いでいただければよいなと感じております。私どもはこれからも修道魂を胸に、歯科医療を通して社会に貢献していきたいと考えておりますので、これからもよろしくお願いいたします。

平成22年度総会

同期会報告

平成23年修三会総会「会長挨拶」

平成23年６月26日
於：ホテルセンチュリー21広島
大　西　比呂志（高校３回）

私は昨年、仁井田会長の辞任の申し出に伴い、由緒ある修三会の新会長に選出され、今年二期目の会長を任せられた大西比呂志でございます。

一昨年は全員が喜寿を迎え、島根の美又温泉に20名程で一泊旅行をして、濱田護国神社に参拝しましたが、今年の新年、私は地元の氏神様の観音神社の初詣でにお参りに行った時、神社の神主さんから、「今年は昭和７年生まれは数え年で80歳で全員が傘寿のお祝いの年である。おめでとう！」と言われました。

今日の出席者の仲には昭和８年生まれの人も何人かいるかと思いますが、私共傘寿の広島の修三会の中で十数人が「集散会」、集まり散じる「集散会」と称して毎月一回ゴルフをやっております。

この集まり散じる「集散会」がこの１月中区の「菜漬け百屋」で平成23年度新年宴会を開催しました。冒頭私の挨拶で「メンバーの大半は今年数えで80歳の傘寿を迎える。健康を維持しつつ、一年をがんばろう！」と決意表明を致しました。

これを耳にした女将は彼女のブログで「老紳士の集い」を紹介していました。

彼女の表現では「80歳の素敵な紳士たちの同窓会」とあって当初それが私たちを指すとは想いませんでした。

ブログを読み進んでゆくうち、写真入りで紹介され、飲んだ酒の種類、料理が当日の料理であったので、80歳の紳士とは我々であったかと、くすぐったく感じると同時に、昔謳った童謡「村のはずれの船頭さんは今年60のおじいさん」をはるかに超える年齢を閲した我々の歩みを顧みて茫然たる想いでありました。

以下「80歳の素敵な紳士の集い」に紹介された料理を挙げて見ますと、最初はシャンパンに合わせて「野菜にディップとイカ墨を添えて」。次いでビールと白ワインに合わせて「長ニンニクスープ」それから先は省略しますが、熱燗に合わせて牡蠣のオイル漬けを始め24種類も出て、最後は「天草産パール柑」と誠に豪華でありました。

我々修三会の会員は今回も111名の方々に案内状を出しました。その内先に黙祷をした宗清君が他界され、現在110名の方が健在であります。亡くなった方は宗清君を含めて61名、所在不明が16名で総勢187名であります。所在不明者を死亡者に加えても実に６割が80歳の傘寿を過ぎても健在な我々修三会の会員であります。

この様に今日再会している私達修三会の会員に今もっとも大切なことは、これからの一日一日を健康に生きて行くことだと想っております。

原爆の日の８月６日には修道学園の原爆慰霊塔に毎年かかさずお参りし、碑の裏に刻まれた原爆死没者戸田教頭を始め、一年生31名、二年生135名他の名前に祈りを捧げる私であります。

小原益次郎作詞、渡辺弥蔵作曲の修道中学校・高等学校校歌にある「安芸の小富士」は私の家の窓の目の前にそびえております。

知徳併進経となり、質実剛健緯となる。

私達全員がいつまでも健康でもってこの大旆をひるがえし、世の進運に魁けようではありませんか！

見よや　修道魂を！！

ありがとうございました！！

同期会報告

四　期　会　報　告

河　野　富士雄（高校４回）

定例の６月第二土曜日の11日、今年からお昼の会合に改めて12時写真撮影、ご来賓は川野先生。去年同窓大会の世話人補佐ということで大集合をかけた効果がまだ続いているのか、昨年並み31名が紙屋町のメルパルク広島に集まりました。木島　丘君の市議会議長就任という慶事も重なって、卒業59年目喜寿を過ぎた後期高齢者が童心に返って気勢を挙げました。

平成23年７月15日

中村　上野(浄)　上野(広)
平見　合原　奥本
大下　加納　山田
伴
大巳　河野　木下
梅田　川野先生
三浦　木島　菊田
岡野
縫部　伊藤　斉藤(公)
土井　長坂　大島
火浦　三吉
行友　鍵崎　内藤

四期会総会及び懇親会
平成23年６月11日(土)　メルパルクの６階 安芸の間

同期会報告

第32回　修道中学３年６組クラス会報告

浅　木　稔　之（高校９回）

昭和26年４月に一年生として入学し、三年間組替えがなく同じ６組だったので「３年６組」と称し、中学卒業後25年目の昭和54年に第１回クラス会を開催し今年で32回目となりました。

事務局が鉄砲町（秋井局長）にあり、記録によると同級生60人の現況は県内居住者32名、県外居住者10名、連絡先不明11名、物故者７名となっています。

開催案内を県内外42名に発送するも、闘病中５名、遠隔地や日程等の不都合で19名が欠席。

18名が23年７月９日「ホテル八丁堀シャンテ」に集合しました。

集合写真撮影、本年４月に病死された田中富士男君と東日本大震災の死亡者の方々への黙祷、出席者同志の健康を祝しての「乾杯」！に始まり、入学時の担任「新見　剛先生」を老人施設に訪ねた報告、故田中君の遺族訪問報告、東日本大震災義援金の拠出決定、次回幹事２名の決定、出席者各位の近況トーク、近況記載の出欠通知書の回覧等、あっと言う間に２時間が経過し、最後は全員で『安芸の小富士に　あかねさし…』を斉唱し、来年の再会を期して散会しました。

瀬越　尼子　平岡　久野瀬　福島　石崎　河野　荒木　岡原　久保　秋井

中野　浅木　岡本　小野　酒井　大和　小池

同期会報告

修九会報告

柏　原　　弘（高校９回：故・香川不苦三先生公認）

修九会は関東一円から福島県伊達郡までの範囲に住まう49名が加入しており、年１回の総会と、ほぼ毎月１回の月例会と、日常的にOCNのグループメールで情報交換しています。

総会には毎回20名程度集まり、月例会には毎回10名程出席します。

このほかに、修道同窓会関東支部の年１回の総会にも例年12名程度参加し、同支部ゴルフコンペには修九会チームを編成して参加、昨秋のコンペは修九会員見崎秀行氏のホームコースで開催され、クラス対抗戦優勝＋個人優勝＋個人入賞他を獲得。

九回卒同期会は、手元の資料では昭和46年京王プラザホテル、昭和48年新橋・江戸銀、昭和52年大塚・駒忠、昭和53年南大塚・船甚など。

その後は銀座・与志万創立者の同期森田義輝氏の好意で月例会となり、永眠されて後も会場を転々としつつ継続し、新宿センタービル地階・安具楽に落着いている。

話題としては、健康・政治・経済など時局に応じた世間話だが、最近は酒量が減じたものの意気盛んな修道健児丸出しの世界を無条件に楽しんでいる。

修九会総会（平成22年11月13日安具楽・新宿センタービル店）

後列：
鈴木健夫　行末敬一　稟田良仁　柏原　弘
数田省二　友田富也　戸田剛太郎　渡邊史朗
川口敏明　髙場利博　森田哲朗
中列：
浜中康二　折田俊夫　髙亀隆壮
先家雄二(特別参加)　横田　守(特別参加)
竹田尚武
前列：
柳田皖司　前田高徳　見崎秀行　景山孝一郎
菊地啓二　日野溝義勝

修九会月例会（平成22年9月9日安具楽・新宿センタービル店）

後列：
柏原　弘　菊地啓二　川口敏明　戸田剛太郎
前田高徳　浜中康二　鈴木健夫　髙亀隆壮
前列：
横田　守(広島から上京中)　日野溝義勝
髙場利博

左から：
日野溝義勝・高場利博・景山孝一郎・柏原　弘
鈴木健夫・高亀隆壮・友田富也・前田高徳
浜中康二・戸田剛太郎

東日本大震災発生のわずか２日前

修九会月例会（平成23年３月９日安具楽・東京・新宿センータービル店）

左上から：
見崎秀行・大塚哲矢・柏原　弘・浜中康二
日野溝義勝
左下から：
前田高徳・川口敏明・友田冨也・高場利博
渡邊史朗・戸田剛太郎

修道（関東）総会に出席した修九会員（見崎秀行カメラ）
（平成23年７月11日　於：東京ドームホテル・天空の間）

（後列）住井義央・川口敏明・友田富也・武田尚武
（前列）横田守・見崎秀行・高場利博・日野溝義勝

第12回修道(関東)ゴルフコンペ
（平成22年９月10日　於：埼玉ゴルフクラブ）
高９回(修九会)チーム：クラス対抗戦優勝

友田冨也：個人優勝＋ベスグロ賞
横田　守：入賞

注：見崎秀行氏はホームコースを紹介し、コンペ開催の世話役を務めた。

同期会報告

春は「花見会」、夏は「暑気払いビアパーティ」

三　宅　恭　次（高校15回）

私たちは昭和38年卒業の15回生です。毎年「有志」が相集い、花見とビアパーティをおこなっています。花見は“歴史”が古く、もう20年以上前になるでしょうか。広島別院前の川に面した観桜にも絶好のポジションがあります。その場所を加藤泰豊君夫妻が毎年満開の頃の土曜の午後を確保してくれ、奥さんに前日から仕込んで頂いたおでんを肴に大いに飲み語り合ったものです。初期の頃はまだ40歳台、そこで飲み足らず十日市界隈の焼肉屋などへ河岸を替えて飲んだものです。ところが10年前に加藤君が病に倒れ療養の身になった為、この場所での花見会は途絶えました。が、今から７年前、広島市中区橋本町のＲＣＣ文化センターが全面改装され、一階のフットバスが飲み食い出来るスペースになったのを機にこの場所で春は花見会、夏はビアパーティを毎年おこなうようになりました。花見会は３月末から４月初めの土曜日の午後、参加者は30名から40名。メールと口コミ連絡で集まります。ビアパーティは７月末、８・６の１週間前の金曜日の夜で、参加者は50名前後です。夏は往復はがきで出欠を取ります。90名位に案内を出しています。返信の近況報告の欄の記述内容も年々変わってきています。初めの頃は多くはまだ現役、しかも重要な地位についてる人も多く、社業故に参加できないとか、その時期海外の〇〇へ出張中…といった類のものが多くありました。ところが今年は欠席理由に現在入院中、近々大腸がんの手術を受ける、退院後療養中…という文面のものが数通ありました。齢67歳、我が世代の入社した頃は高度経済成長真っ只中、多くは企業戦士としてガムシャラに働いてきました。その付けが来ているのかもしれません。参加者は広島市在住者がほとんどですが、東京、大阪などから数名参加してくれます。恩師も街道武司先生、吉崎冨士雄先生をお呼びしております。吉崎先生は我々が疎遠になっている母校の最新情報を披露して下さいます。

冒頭にも書きましたように、この会はあくまで有志の集いです。ただ、昔からの特定の親しい仲間が集まっているわけでもありません。昭和38年卒業の同期のものであれば「来るもの拒まず」の会です。もしこの「通信」を読まれて、「わしも参加したいから連絡してくれよ」という方がおられましたらご一報を下さい。

また私たちは15期をもじって「いちご会」というゴルフ会を毎月一回、平日、年金生活者優遇の格安ゴルフ場を選んでおこなっています。はじめた頃は１乃至２組でしたが、最近は多い時は５組になるほど参加者が増えています。

最後になりましたが同期の医師、岡崎（田中）求平君がことし４月から過疎、高齢者の島、山口県周南市大津島刈尾診療所で、自らの不自由な体をおして地域医療のため奮闘していますことを報告しておきます。　以上

同期会報告

修道16回同期会報告

吉本泰宏（高校16回）

16回生にとって今年は中学卒業（高校入学）50周年。このメモリアルイヤーを祝うべく「１人でも多くの参加を」と世話人が懸命に呼び掛けた結果、ゴールデンウイーク前日の４月28日、103名の同期生が広島市中区の「八丁堀シャンテ」に集い、５名の恩師の方々にもご参加いただきました。

集合写真を撮影した後、宴会場に移動。第１部の進行役は河村淑久君が務めました。冒頭、志半ばにして逝った24人の仲間と、３月11日に発生した東日本大震災の多くの犠牲者の冥福を祈って１分間の黙祷を捧げました。また会費の一部を被災地への義援金として寄託したとの報告がありました。続いて河村君は８人の世話人を紹介した後、「今回の盛況はひとえに事務局を担当した吉本泰宏君の働きが大きい。名簿づくりから、出欠確認、会場との交渉など、まさに獅子奮迅の活躍だった」と紹介。一同大きな拍手でその労をねぎらいました。

開会宣言は30年以上の長きにわたって、一六（イチロク）会の代表幹事として同期生の世話をしてきた岡田宏一郎君。「これからも命ある限り集まり続けよう」とさらなる結束を呼びかけました。

次に、最近政界から退いた増原義剛君（前衆院議員）と村井政也君（前三次市長）が立ち、それぞれ在職中に同期から大きな支援を受けたことへのお礼の言葉を述べました。

恩師を代表して挨拶に立たれたのは、中高の６年間を通して16回生の担任を務めていただいた鬼塚尚而先生です。先生はご自身の病気のことなど近況を報告された後、「16回生の皆さんには感謝とお詫びがある。新米の私を１人前の教師に育ててくれたことに感謝。一方、君たちの頭に痛みを伴う刺激を与えてしまったことについては、今でも忸怩たる思いだ」と、時折ユーモアを交えながら心情を吐露されました。そして乾杯の音頭は、やはり16回生と縁の深かった畠真実先生にお願いしました。先生は「自分が初めて卒業生として送り出した学年。とても印象深い」と力強く杯を上げ、開宴です。

女性３人のバンド「スリーアロウズ」が演奏する思い出の曲が流れる中、食事タイム。しかし、それもわずかな時間で切り上げ、席を立つ者が続出。懐かしい友の顔を見つけ、握手し、肩を叩き合って再会を喜び合う姿…。修道学園に入学し、よき師と巡り合い、よき友に出会えた喜びは出席者全員の共通の思い。会場いっぱいに感謝の笑顔が広がり、歓談の花が咲きました。

続いては、当日東広島市の賀茂カントリークラブで、38名が参加して行われたゴルフ大会の表彰式です。このコーナーは森川武彦君と免出三朗君の担当。下位から順に発表され、最後に優勝者としてコールされたのは大儀文雄君でした。「大阪から犬を連れ車を飛ばして来たかいがあった」と満面の笑顔で優勝スピーチを行いました。

第２部の進行役を務めた吉本泰宏君が、今回の同期会に卒業以来初めて参加した仲間や、栃木県など遠方から馳せ参じたクラスメート20人余りを次々に壇上に呼び上げ、それぞれ一言ずつスピーチ。「近況」「クラブ活動の思い出」「心に残った恩師の言葉」などを披露しました。中には中学を卒業後、他校に転校して以来、文字通り半世紀ぶりに顔を見せた仲間もいて、懐かしさもひとしおでした。

４月10日に放送された人気テレビ番組「情熱大陸」で“日本最強の弁護士”として取り上げられ、一躍時の人となった弘中惇一郎君は当日あった公判の関係で、約1時間遅れの到着。吉本君からマイクを渡され、番組収録の裏話や、弁護士としてのこれまでの道のりなどを披露した後、「何が起きるか分からないこれからの時代、修道の仲間としっかり支え合っていきたい」と結びました。

金子　慧、川野観治、吉崎冨士雄の３先生からもそれぞれ味わい深いお話がありました。そして「これからの人生を健康で心豊かに」とエールを送っていただきました。

楽しい時は瞬く間に過ぎ去りました。フィナーレは「仰げば尊し」に続いて、大きな輪を作って肩を組み合い、元音楽部の部長だった増原君のリードで校歌を斉唱。最後に大病を克服し、すっかり元気になった吉本君が「今後10年は私が（事務局を）やります」と力強く決意表明して、大喝采のうちにお開きとなりました。

メモリアル同期会にふさわしい参加者数と、盛りだくさんな内容に満足度もアップ。近い内の再会を約束し、温かい気持ちに包まれて会場を後にしたのでした。

（文・大前吉文）

修道16回同期会　2011年４月28日　八丁堀シャンテ

修道16回同期会　2011年４月28日　賀茂カントリークラブ

同期会報告

修道を卒業して45年の月日がたちました

三村邦雄（高校18回）

昭和41年に修道高校を卒業して45年の月日がたちました。

同級生はだいたい63才か64才になっています。３月11日の大震災の時、東日本や関東にいた同級生はどうだっただろうか？

様子を聞きたく、６月５日の修道18回卒東京同期会「赤徽会（於パセラリゾーツ銀座店、27名参加）」に出席しました。私がわざわざ広島から出かけて来たとの事で大歓迎を受けました。震災時に東京で勤務していた皆が、その時の恐ろしさや、そのあと数時間かけて徒歩で帰宅した事や、その後の混乱の状況を話してくれました。無事に生きて、こうして再会出来た事をありがたく、互いに感謝しあいました。63才をすぎた壮年達は、まだ現役で重要なポストを担っている者や、第２の人生の新天地で活躍している者、リタイヤして悠々自適の者、それぞれに元気よく頑張っている様子でした。同期生の中に原発にかかわっている人もいましたが皆、気づかってその話は余りいたしませんでした。いまだ復興もままならず、原発周辺も解決の道すじが見い出せずにあります。二次会で集まったビヤガーデン「ライオン銀座５丁目店」も人がまばらでした。夕暮れ時の東京銀座は心なしか薄暗く、新橋駅まで歩きましたが、賑わいはありませんでした。当日に私がうつした写真をそれぞれに送りましたが皆、丁寧に礼状が来ました。

赤徽会会長三戸森君や事務局をつとめていただいた上巳君、常重君にあらためて感謝いたします。９月17日にはセンチュリーホテルで卒業45周年同期会が開催されます。皆と会えることを楽しみにしています。修道を卒業出来た事は私の誇りで多くの同期生は人生を豊かにしてくれています。今後ともよろしくおねがいします。

100周年からの新しい修道に期待しています。

同期会報告

23回生卒40周年同期会、修道他にて開催

山下　江（高校23回）

平成23年８月13日、14日と、高校23回生は「卒40周年記念同期大会」を開催しました。在学中お世話になった恩師河野富士雄先生、橋谷秀雄先生、有田嘉伸先生、そして、同期生97名が参加し、なつかしく、楽しいひとときを過ごしました。

13日午後２時、修道高校の大会議室に集合し、卒40周年式を行いました。松岡博信幹事司会のもと、判明している物故者（先生７名、同期生16名）に対して黙祷。もうひとりの幹事山下江が同期生を代表して、出席された恩師に対しての謝辞と同期大会開催への経過説明を行いました。山下は「今日ぼくらがあるのは、修道で学力上鍛えられたことのみならず、生き方や修道魂といった人格形成のおかげと思っている。ぼくらの原点を造っていただいた先生方に深く感謝します。」と述べました。

各先生方のあいさつと６名の同期生の近況報告が行われた後、卒40周年を記念して、寄付（テント２梁）の学校への贈呈が行われました。そして、参加者全員で肩を組んで校歌を声高く合唱しました。

その後、国語の橋谷先生に、記念授業を～私の「大活字本」紀行～と題して行っていただきました。橋谷先生は、この５年間で大活字本シリーズ800冊弱を読まれたとのことで、その論評。先生の造語「一創一悦」（スタートに立つときは緊張するが、一つ創りあげると一つ悦びがある」を紹介し、みなに「生涯現役で」「何事にも挑戦」という言葉をいただきました。久々の橋谷節に昔の授業をなつかしみました。

そして、記念撮影の後、新校舎見学。在学中のものとしては、プールしか残っていないことにびっくりしました。

夕方より、中区新天地で懇親会。在学中はベトナム反戦運動の最盛期で生徒会が学校側と対立したこともありましたが、当時の生徒会担当の河野先生は「当時修道は西日本一高校生運動が盛んで、血気盛んな君たちに学校側も大変だったが、みな立派になって、先生として誇りに思う」と述べられ、参加者は感動しました。同期生のバンド「０２３ＢＡＮＤ」が演奏し飛び入りでの歌が続出。有田先生に閉会の辞を述べていただきました。

その後、ラウンジにて二次会、そして、三次会、・・・朝まで、久しぶりの再会を楽しみました。

翌１４日は、岩国市の美和ゴルフクラブにて、少々暑い中ではありましたが、６名が参加して記念ゴルフ大会を、元気に、無事終了しました。

同期会報告

23回卒同窓会参加あれこれ

橋　谷　秀　雄（元教諭）

去る８月13日、23回生の卒40年記念大会に参加しました。70年安保闘争の主役学年でしたので、懐かしい回想談に花が咲きました。

模擬授業で「私の大活字本紀行」800冊を紹介し、停年間近い彼等に「生涯現役」への人生再設計を呼びかけ、私の水泳マスターズ現役ぶりを悦に入って語りました。

この学年は私の修学就任と同時の入学生なので格別に何かと因縁の深い学年です。スキーで一年に2回足を骨折し、生徒と学校に大変ご迷惑をかけましたが、そのことだけで私を覚えていて話しかけてくる者もいました。

何しろ七十年安保の最高潮の時代の彼等ですから当時を語る内容も複雑です。途中退学や停学になった多数の彼等との内容には今なお考えさせられるものがありました。この学年は学校と同窓生達に迷惑をかけたと日頃は学校に遠慮していますが、母校愛は大変なものがあります。四十年ぶりの同窓会で百人を超すのがその証明でしょう。

世話役の山下君、松岡君のみならず、修道への母校愛に限りないものを感じました。校内見学、一次パーティの折の発言にそのことを痛感しました。

最後に、私事ですが五月末に神戸市の須磨に移転しました。光源氏の流罪の地ですが、明石大橋のあかりが望める風光明媚な土地柄です。52年間住み慣れた広島を離れ、再々人生のスタートをしましたことをご報告いたします。

同期会報告

同　期　会　報　告

大　成　浩　二（高校38回）

修道高校を卒業して25周年を迎える私たち38回生の同期会の企画をする際、「マツダ　ＺＯＯＭ　ＺＯＯＭ　スタジアムで、カープの試合を見てみたい」という、県外に住む同期生の一言から、今回の企画が始まりました。ゴールデンウィークに行われる広島カープの試合で、マツダ　ＺＯＯＭ　ＺＯＯＭ　スタジアムのパーティーフロアを予約することができる日をおさえるということから動き始め、５月４日（水）の広島カープ対横浜ベイスターズ戦をおさえることができました。

しかし、３月11日の東日本大震災の影響でプロ野球の開幕自体が危ぶまれ、５月４日に試合が予定通り行われるのか、行われないことになると企画自体が頓挫してしまうという状況で、プロ野球界の動きを静観するしかないという時期がありました。そして、プロ野球が４月12日開幕と決定してから、私たちも動き始めました。が、５月４日までは時間が少なく、連絡が十分に取れず、家族で来てもＯＫという形にし、学年主任の街道先生、担任の内先生、藤澤先生、吉崎先生、橋谷先生という恩師の先生方５名を併せても約20名という小規模の開催となりました。

当日は天候に恵まれ、またカープのチーム状態もよい時で、同期会も試合も楽しみにして集まりました。県外から家族で参加してくれた者もいて、久しぶりの再会に心が沸きました。マツダ　ＺＯＯＭ　ＺＯＯＭ　スタジアムの正面ゲートで待ち合わせをし、随時パーティーフロアに移動し、13時30分の試合開始までは飲み物や軽食を口にしながらお互いの近況報告などの話をして、旧交を温めました。そして13時30分に試合開始。カープが１回裏に梵選手の先頭打者ホームランなどで３点を先制し、先発が篠田投手ということで、「今日は勝ったな」というムードになりました。しかし、その後は篠田投手が打たれて逆転され、途中に同点に追いついたものの、村田選手に決勝タイムリーを打たれ、最終回に粘りは見せたものの、１点差で試合は負けてしまいました。

街道先生はマツダ　ＺＯＯＭ　ＺＯＯＭ　スタジアムにいらっしゃること自体が初めてだったそうです。また、英語の授業やテストには必ずカープの話題があった熱烈カープファンの吉崎先生を筆頭に、カープの試合を見ながらの野球談義に花が咲きました。一緒に来た子どもたちを中心にした熱心な応援もあり、先生方にも「楽しかった」と言っていただくことができました。とても充実した同期会でしたが、集まった人数が少なかったこともあり、「また、やろうか」という話をしました。

最後に、中心になってお世話をしてくれた大方幸一郎君、筒井直樹君、そして当日来てくださった先生方や同級生に、感謝します。ありがとうございました。

ＯＢ会報告

修寿会発足

小　田　和　磨（旧中35回・修道中・高等学校退職教職員懇親会）

昭和14年４月から、同19年３月迄、中学生として在学５年間、昭和27年４月から平成４年３月迄、教員として41年間奉職。大凡半世紀、人生の過半数を修道に拘わった者として、何かその証はないものだろうかと考え、退職教職員の集いを催したらと思い付いた。早速、先輩の楢崎先生、同期の保田先生等に相談したところ、良かろう、面白いと賛同を得た。

昭和62年３月、定年退職後、既に退職なさっている旧教職員の消息を、半年近くかけて調査し、10月の月初めに旧教職員数十名の方々の御出席を得、元校長岡島先生を初代会長に仰ぎ、修寿会を立ち上げることが出来た。感無量。

爾来、この会は毎年10月第２土曜に開催し、昨年度（平成22年）で24回目を数え、会長もその後、楢崎・小田・河野先生と引き継ぎ、今日に及んでいる。今後益々盛大に開催されることを翼求している。なお、会場は最近は殆ど県民文化センター。

特　別　寄　稿

「十竹軒日記」戊子　明治廿一年(1888年)一月から四月まで

修道学園史研究会会長　畠　　眞　實（元校長：高校７回）

はじめに

明治廿年の日記に引き続く日記である。一月から十二月まで記されているが、そのうち四月までを紹介する。

明治廿年の日記では、すでに紹介したように、明治十九年に浅野家から引き継いで山田養吉先生が八丁堀の自宅で修道学校の決意されたのである。そして新しく校舎の建築に腐心される様子が伺える。それに続く年の日記である。

一月

廿一年春王正月元日　好晴　有詩曰「團々香餅上晨盤　新歳今朝心自寛　賀客到門名刺白　恵風吹戸日旗丹　老親猶健孫皆長　蘇酒可傾梅耐観　最喜祖先余慶在　迎春未敢泣飢寒」　岩本元行来

注　春王「春秋」のはじめ、隠王元年が「春王正月」の句ではじまり、「春」は年のはじめ、「王」は周の文王の正朔を意味することから王者の治めている天下の春。また、春の季節。・團々「団」の異体字。団々まるいさま。まるい露がぽつぽつつくこと。・晨　早朝。あした。・盤　大きな皿。・新歳　新年。

・蘇酒　屠蘇酒。肉桂・山椒など七種の薬を入れた酒。正月に一年中の邪気を払うために飲む。余慶　功徳の報いによって、子孫にやってくる吉事。祖先の善根によって子孫が報われること。おかげ。余光。余薫。

・岩本元行　県立師範学校初代校長。藩校修道館の教師であつた岩本は、明治七年（1874）東白島町真木直一の私宅を仮校舎として師範学校を開設する時、開校業務を担当し、明治八年八月から正式に校長に就任して、明治十年まで在職した。その後は佐伯郡長とか県立中学校長など県職員として活躍している。天保五年（1834）年産まれ。（「広島学校教育史」による）

書き下し

廿一年春王元日　好く晴る　詩有り、曰く「団々の香餅辰盤に上す　親歳今朝心自ら寛ぐ　賀客門に到り名刺白し　恵風戸の日旗の丹を吹く　老親猶健にして孫皆長ず　蘇酒傾けるべし梅観に耐ふ　最も祖先の余慶在るを喜ぶ　迎春未だ敢へて飢寒に泣かず」　岩本元行来る

口語訳

天下の春、正月元日　快晴　詩がある．その詩にいう「まるい香ばしい餅が早朝大皿にのせてある。新年、今朝の心は自ずからゆったりとしている。恵の風が家の戸口の日章旗の丹色をそよがせている。年老いた両親は今になお健在で、孫たちもみな大きくなっている。屠蘇の酒を傾けるがよい、ちょうど梅が見ごろである。最も喜ばしいのは、祖先のお蔭があることだ。新春を迎えるにあたってもこれまでけっして飢えや寒さに苦しんだことがないのだ。　岩本元行がやってきた。

二日　賀年途上有新詩曰謹叙賀辞毎家傾酒巵雖云終日酔無処話新詩

注　・酒巵（しゅし）さかずき

書き下し

二日　賀年の途上新詩有りて曰く「謹みて年を賀す辞を叙す　家ごとに酒巵を傾く　終日酔ひ、処す無しといへども新詩を話す

口語訳

新年を祝う。年賀の途中新しい詩が浮かび、それをいう。謹んで新年を祝うことばを述べる。年賀に訪れた家ごとに酒をすすめる。一日中酒に酔っていてなんらなすところがないと言っても新詩の話をする。

三日　又賀年

書き下し

また年賀にいく。四日　又賀年藤田高之・奥田珍蔵・津村薫三子報曰中西雅吉病脚気衝心廿七日死子其載広島日誌報之彼親知

書き下し

四日　又、年賀。藤田高之・奥田珍蔵・津村薫の三子報じて曰く中西雅吉脚気衝心を病み廿七日死すと　子其の広島日誌載り之を報じ、彼の親知る

注　・脚気衝心　脚気に伴う心臓障害　　・広島日誌　目下調査継続中

口語訳

また、年賀に行く。藤田高之・奥田珍蔵・津村薫の三君が「中西雅吉が脚気による心臓障害で廿七日に亡くなったと知らせてくれた。彼らはそのことが広島日誌に載っていて、このことを伝えて彼の親が知ったのである。

五日　今暁疾風　午後又疾風
書き下し・口語訳　略す

六日　欲使山田兵吾草燈火余適第二編而游漢弁不帰
注　・草　草稿を作る　文案を作る。　・漢弁　よく分からない
書き下し
六日　山田兵吾をして燈火余適第二編を草さしめんと欲して漢弁に游し、帰らず。
口語訳　略す

七日　兵吾未帰　故倩青山悦次郎使之浄写　而山内戒三来請出游　戒三性易鬱屈　曾誘之出游不肯　使之来吾家動避而不肯　今日之来余甚悦之　於是委浄写之事　於悦次与游横川　酔後転訪松原得一　又与豊一酒楼　戒三爛酔　余先帰
注　・倩　人に代理をたのむこと　・浄写　清書　・鬱屈　はればれしないきもちでいること。また、不満や心配事でゆううつな気持ちになること。ふさぎこむこと。・動　ややもすれば　・爛酔(らんすい)　ひどく酒に酔う。
書き下し
七日　兵吾未だ帰らず。故に青山悦次郎を倩し之をして之を浄写せしむ。而して山内戒来り　出游を請ふ。戒三性鬱屈し易く　曾て之を出游に誘ひて、肯んぜず　之を吾が家に来たらしむるに動(やや)もすれば避して肯(がえ)んぜず。今日の来余甚だ之を悦ぶ。是に於いて浄写の事を委ぬ。悦びによりて次いでともにに横川に游す。酔後転じて松原得一を訪ぬ。またともに一酒楼に登る。戒三爛酔す。余先に帰る。
口語訳
七日　兵吾はまだ帰ってこない。それで青山悦次郎にその代理に頼んで燈火余適の清書をしてもらう。そうしたところに山内戒三がやってきてどこかへ出かけるように請うた。戒さんの性質は鬱屈しやすく、かつて彼を誘って出かけようとしたが承知しなかった。また彼をわが家に来させようとしたが動避した承知しなかった。だから今日彼がやってきたことをわたしは大変に喜んだわけだ。そこで清書の事を彼に任せた。喜びのついでに一緒に横川に出て遊ぶ。酔って後、行き先を転じて松原得一を訪ね、いっしょにある酒楼に上がった。戒三はひどく酒に酔った。私は先に帰った。

八日　日曜　浄写燈火余適　兵吾昨夜帰　乃校讐燈火余適足立卓弥来　乃倩之校讐　遂到活板舎託印刷夜到寺尾八郎　贈燈火余適二巻
注　・校讐　印刷物を原稿と引き合わせ、誤りをなおすこと。　・燈火余適　「山田十竹先生履歴書」に「諸生ヲ激励ノ為メニ文詩雑誌ヲ発ス。燈火余適ト名ヅク」と記されている。
書き下し
八日　燈火余適を浄写す。兵吾昨夜帰る。乃ち燈火余適を校讐す。足立卓弥来たる。乃ち之の校讐を倩す。遂に活板舎に到り、印刷を託す。夜、寺尾小八郎到る。燈火余適二巻を贈る。
口語訳
八日　日曜　燈火余適を清書する。兵吾が昨夜帰ってきた。そこで燈火余適の清書を原稿と引き合わせて点検してもらった。(それが終了して)遂に活版社に行き、印刷を委託した。夜、寺尾小八郎がやってきた.燈火余適二巻を進呈した。

九日　住本権蔵拉余到谷口氏　強酒余大酔
書き下し
九日　住本権蔵が余を拉して谷口氏に到る。酒を強ひて余大酔す。
口語訳
九日　住本権蔵が私を谷口氏のもとに連れて行く。そこで酒を強く勧められて私は大いに酔ってしまった。

十日　与頼・友村・中島・山岡四子飲米家楼
書き下し
十日　頼・友村・中島・山岡の三君とともに米家楼に飲む。
口語訳　略す

十一日
十二日　到活板舎校燈火余適第二編
書き下し
十二日　活板舎に到り燈火余適第二編を校す。
口語訳
十二日　活板舎に行き、燈火余適第二編を校正する。

十三日　長信雄持五十円金来購宅
書き下し
十三日　長信雄五十円金を持ち来たり宅を購す。
口語訳
十三日　長信雄が五十円の金を持ってやって来て、住宅を購入する。
十四日
十五日　長氏移転家於隣並　串田他也・武内丈太郎来　飲而話
書き下し
十五日　長氏、家を隣の並びに移す。串田他也・武内丈太郎来たる。飲みて話す。
口語訳　略す

十六日　応長氏之招　坂郷美亦至　夜雨

書き下し
十六日　長氏の招きに応ず。坂郷美も亦至る。夜雨。
口語訳　　略す

十七日
十八日
十九日　暮幣田徹吉拉能美円乗所上疏来
注　・上疏　（じょうそ）　意見書をたてまつる。疏一条ずつ分けて意見を述べる上奏文。むずかしい文句をときわけて意味を通じるようにした解説。
書き下し
十九日　暮　幣田徹吉、能美円乗上する所の疏を拉して来たる。
口語訳
十九日　暮　幣田徹吉が能美円乗の差し出した意見書を引っ提げてやってきた。

廿日　時々雨　河野小石来
注　・河野小石　文献通称は金蔵小石また視庵と号す。文久三年九月廿四日五口粮を給せられ、歩行組格儒者となり学問所へ出仕し、子弟を教授せしめらる。慶応二年十月朔日歩行組となり廩米八石と三口粮とを給せらる。明治二年十一月廿九日第十級学校教授となる。同三年二月二十五日第九級学校教授となる。（広島尚古会「尚古」）　昭和53年刊「修道学園史」によると「寛政年中には頼山陽の子聿庵も藩学校教授となり聿庵の弟子河野小石(1823 ～ 1893)も藩儒に登用されている。」とある。
書き下し・口語訳　　略す

廿一日　土曜
廿二日　結吟社始会諸子　串田・林・足立・竹内四人来　課題江楼望雪席上盆梅
書き下し
廿二日　結吟社始めて諸子会す。　串田・林・足立・竹内四人来たる。　課題江楼望雪席上盆梅
口語訳　　略す

廿三日　訪足立卓弥託燈火余適原稿拾収　転訪北川精一　計隣地之事
注　・隣地之事　明治二十年の「十竹軒日記」にも隣地のことは書かれている。明治二十年八月廿八日の日記に「片山左太夫が来る。話がたまたま能美円乗所有の北隣を買うことに及ぶ。そこで左太夫に能美氏の所に行き、このことを相談させる。つまり、隣地の大きな草屋は三、四軒。わが塾と接している。草屋の中には、鎮台の馬が喰らう、細かくくだいた草が選び集めて揃えてある。また男女が入り乱れて歌い、声を上げて遊び楽しんでいる。それに塾生の学業の妨げになり、またその心を乱す。或いは火事を引き起こすきっかけにもなりはしないかと恐れる。それ故、この草屋を買い取り、能美氏にこれを撤去させたいと思うのである。」とある。そして交渉の結果、十六日の日記に「今日ついに土地を購入する。」と書かれている。これでこの土地の件は解決したと思われるが、この二十一年の日記に再び「隣地の事」が出てくる。三月六日に「岩本生を訪ね、隣地のことを謀る。」、三月七日にも「能美円乗を訪ね、隣地の事を議す。」と書かれている。すでに解決済みと思われるが、まだ問題が残っていたのであろうか。
書き下し
廿三日　足立卓弥を訪ぬ。燈火余適原稿拾収を託す。転じて北川精一を訪ね、隣地の事を計る。
口語訳
廿三日　足立卓弥を訪ねる。燈火余適の原稿の取り集めを依頼する。方向を転じて北川精一を訪ね、隣地の事を相談する

廿四日　訪岩本子　乞燈火余適原稿且問隣地之事
書き下し
廿四日　岩本子を訪ぬ。燈火余適の原稿を乞ひ、且つ隣地の事を問ふ。
口語訳
廿四日　岩本さんを訪ねる。燈火余適の原稿を書いてほしいと頼む。そのうえ、隣地のことを尋ねる。

廿五日　訪幣田　亦乞原稿
書き下し
幣田を訪ぬ。亦原稿を乞ふ。
口語訳　　略す

廿六日
廿七日
廿八日　丸山氏見招　蓋議居宅之事也　乗酔訪山内戒三
書き下し
廿八日　丸山氏に招かる。蓋し居宅の事を議するなり。酔に乗じて山内戒三を訪ぬ。
口語訳
廿八日　丸山氏に招かれる。思うに、居宅のことを相談するのであろう。酔った勢いで山内戒さんを訪ねる。

三十日　孝明天皇祭
注　孝明天皇　1831～1866在位　1846～18866　天保二年（1831）六月十四日仁孝天皇の第四皇子として誕生。在位21年。慶応2年(1866) 十二月二十五日痘瘡によって崩御。三十六歳。幕府は低下した勢威を回復するため公武の融和を図る事を策し、公武合体の証しと

して、皇妹和宮の将軍徳川家茂への婚嫁を奏請した。天皇は和宮の不同意を知って、この請を退けたが、再三の懇請を拒否しがたく、公武一和をもつて武備の充実を図り、鎖国の旧制に復するとの幕府の誓約をとり、ついにこれを勅許した。この婚嫁を契機として朝廷は幕府に対して優位に立ち、公武合体の施策を進めるため薩長二藩等に国事周旋を命じだが、その間朝廷内外の攘夷派の勢力は長州藩の支援を受けてすこぶる強大となった。文久三年(1863) に至り、攘夷の成功を祈願するため、三月賀茂社に、四月石清水社に行幸あり、また幕府は攘夷実行期日を五月十日と定め、同日長州藩によって下関海峡通航の外国船の砲撃が決行された。かくて勢いにのった攘夷派の廷臣・志士は攘夷親征を企図して大和行幸の廟議を定めるに至ったが、攘夷即行を無謀の挙とするとともに、倒幕に突き進む情勢を深く憂い、密かに中川宮尊融親王(朝彦親王)をしてその阻止を謀らしめた。その結果、八月十八日朝廷は大和行幸を中止し、薩摩・会津の藩兵をもって宮門を固めた上、激派廷臣の参朝停止と長州藩の宮門警固罷免を令した。この政変(八月十八日の政変)を発端として政局は禁門の変・長州征伐と目まぐるしく推移し、天皇は依然公武合体・鎖国攘夷の基本方針を堅持した。しかし、内外の情勢は次第に天皇の素志と反対の方向に進み、慶応元年十月には英・米・仏・蘭四国公使共同の要求によって、ついに条約の勅許を見、また翌年正月には倒幕を目的として薩長両藩の盟約が成り、次いで八月第二次長州征伐が失敗すると、政局は倒幕に向けて一路進展する様相を示し始めたのである。この時にあって天皇はたまたま痘瘡に罹って、癒えず国事に心労を重ねた一生を終えた。(「日本国史大事典」)

書き下し・口語訳　　略す

三十一日　此間弟子子大進楽意洋々

書き下し

三十一日　この間、弟子子大いに進みて楽しむ。意洋々たり。

口語訳

三十一日　此の間、弟子諸君が大いに進んで楽しむ。その意は洋々としている。

二月

一日　飛雪　到同進社　投燈火余適原稿於活板所

注　・同進社　旧広島藩士族の団体。1880年（明治13）３月、旧広島藩士族団体として結成され、士族授産事業を中心に活動し、1897年（明治30）７月に解散した。1880年、旧藩主浅野長勲は旧士族の窮迫状態を救うため、37万円を授産資金として県庁へ寄託した。これをうけて旧藩家老・執政浅野忠、浅野道興、上田譲翁、辻維岳(将曹)が発起人となり士族を団結して「志操行為正し」「社友を救護」する目的で結社された。具体的な活動としては、県の設立した白島授産所の払い下げを受け、その後数度にわたって士族授産資金の貸与を得て、その他の授産所の新設・拡張、野呂山開拓事業、宇品新開地の経営などあたった。しかし、授産事業はいずれも不調または失敗し、同進社内でも紛議が絶えなかった。(「広島県大百科事典」)

書き下し

一日　飛雪。同進社に到る。燈火余適の原稿を活板所に投ず

口語訳

一日　雪が舞いあがる。同進社に行く。燈火余適の原稿を活板所に提出する。

二日

三日　燈火余適四字彫刻成　欲拉板到同進社　走出既到同進社　探懐板則不携　蓋騒而忘之也

書き下し

三日　燈火余適の四字彫刻成る。板を拉して同進社に到らんと欲す。走り出で既に同進社に到る。懐の板を探せば則ち携へず。蓋し騒ぎて之を忘るるなり。

口語訳

三日　「燈火余適」四文字の彫刻が出来上がった。原版を持って同進社に行こうと思い、飛び出して既に同進社に到着した。懐にしまっておいた原版を探すと、携えてきていない。思うに、落ち着かず、これを忘れたのである。

四日　今日則拉板到同進社

書き下し

四日　今日則ち板を拉して同進社に到る。

口語訳　　略す

五日　終日攤書

注　・攤(たん)　のばす。ひろげる。しきひろげる。

書き下し注

五日　終日書を攤す。

口語訳　　略す

六日　梅園順造死　聞訃　即往弔

書き下し

六日　梅園順造死す。訃を聞く。即ち弔に行く。

口語訳　　略す

七日　会順造葬　順造学力雖不足取其守固窮之莇而為折腰之態則真可賞也

注　・固窮　どんな境遇でも天命に安んじていること。
・莇　イネ科の一年生の雑草で、根が強く、ぬきが

たいちからぐさ。　・折腰之態　腰を折り曲げて人を拝すること。また節を屈して人にくだること。
書き下し
七日　順造の葬に会す。順造学力取るに足らずといへども其の固窮の節を守りて折腰の態を為さざれば則ち真に賞すべきなり。
口語訳
七日　順造の葬儀に参列する。順造は学力は取るに足りないといってもどんな境遇でも根が強く抜きがたい雑草のようなこころを持って節をまげて人にくだるような態度はとらなかったので、まことに賞すべき人物である。

八日　日々疾風
書き下し
八日　日々疾風吹く。
口語訳　略す

九日　又風　山科幹三来　説波多野平五事
書き下し
九日　又風。山科幹三来たる。波多野平五の事を説く。
口語訳　略す

十日　又風　紀元令節
注　・紀元令節　もと四大雪節の一つ。「日本書紀」に神武天皇即位のときとする一月一日を太陽暦に換算したという二月十一日を祝日と定めたもの。明治5年(1873)に制定。
書き下し・口語訳　略す

十二日　日曜
十三日　出渕三四郎来　占筮得此
注　・占筮(せんぜい)　筮竹で使ってする占い。
書き下し
出渕三四郎来たる。占筮之を得(う)。
口語訳
十三日　出渕三四郎がやってきた。筮竹で使ってする占いを習得した。

十四日　燈火余適第三編成
書き下し
十四日　燈火余適、第三編成る。
口語訳　略す

十五日
十六日
十七日
十八日　梅園順三祭日　見招
書き下し
十八日　梅園順造の祭日。招かる。
口語訳　略す

十九日　雪　霰　赴詩会　於林氏席上以春雨訪明為題　余詩曰
　板橋有声飛霰堆斜風剪々払衣来春寒如此吾何厭欲看君家内裏
梅君庭有内裏梅一株
注　・内裏　内裏雛の略
書き下し
十九日　雪　霰　詩会に赴く。林氏席上に於いて春雨訪明を以て題と為す。余詩に曰く
板橋声有り　飛霰堆み　斜風剪々として衣を払ひ来たる　春寒此の如し　吾何ぞ厭わん　君の家内裏の梅を看んと欲するを　　君の庭内裏梅一株有り
口語訳
十九日　雪、霰。詩会に出かける。林氏が席上において「春雨訪明」を題とする。わたしは詩に次のようにうたう。板橋で声がする。飛び散る霰はつもり、斜めに吹きつける風は剪々として春寒はかくのごとくである。わたしはどうして厭いましょうぞ。あなたの家の内裏雛を見ようとすることを。

あなたの庭　内裏雛に梅一株がある。

廿　雨
廿一日
廿二日　此間友村・頼皆罹疾　校務殊忙
書き下し
廿二日　此の間友村・頼皆疾に罹る。校務殊に忙し。
口語訳
廿二日　先ごろ、友村・頼ともに病気に罹る。校務が殊に忙しかった。

廿三日
廿四日
廿五日
廿六日　日曜
廿七日　山内精一母死　有訃赴而弔
書き下し
廿七日　山内精一母死す。訃有り。赴きて弔す。
口語訳
廿七日　山内精一の母が亡くなった。訃報がある。出かけて行って弔意を表す。

廿八日　竹内丈太郎報曰平佐焦雨来　閑則見過否　余方月末試験　殿最故辞而不赴
注　・殿最(でんさい)　功労及び成績を調べて、上功

を最といい、下功を殿という。軍功・考課の差などに用いる語。

書き下し

廿八日　竹内丈太郎報じて曰く、平佐蕉雨来ると。子閑なれば則ち過否を見よ。余方に月末試験殿最を検せんとす。故に辞して赴かず。

口語訳

廿八日　竹内丈太郎が知らせていうには、平佐蕉雨がやってくる。あなたに暇があれば会いにいき、過ちがあるか否か見てきてほしい。わたしはこれから月末試験で成績がどのようであるかを調べようとている。それで断って出かけなかった。

廿九日　出渕生来　山口生亦来　午後至黄昏乃去　出渕生拉山陽幅去

注　・幅　掛け軸　・山陽　頼山陽　安永九年（1780）～天保三年（1832）江戸後期の儒者、詩人、歴史家、書家。名は襄、字は子成または子贇、通称久太郎といい、仮の名を憐二、徳太郎といった。号は山陽のほか三十六峯外史などを唱えた。父は広島藩儒頼春水、母は飯岡義斎の女静（梅颸）。頼春風、頼杏坪は叔父にあたる。安永九年十二月二十七日に大坂江戸堀北一丁目に生まれた。天明元年父春水が広島藩儒となったため、翌年母とともに広島に移り、同八年から藩学問所に入学。武術は藩士築山嘉平通欽に就いて貫心流の剣を学んだ。寛政九年叔父杏坪に従い江戸に遊学し、幕府の昌平坂学問所の教授尾藤二州に師事し、：経学・国史を学んだ。翌年帰国。同11年御園道英の女淳と結婚したが、翌年九月父春水が江戸詰中、広島を出奔。しかし十一月広島に連れ戻され、脱藩の罪に問われ自宅の一室に監禁された。享和元年二月淳を離縁したが、この月長男余一（聿庵）が生まれた。同年廃嫡を藩から許可され、春水の弟春風の長子景譲が春水の養子となる。同年十二月幽閉を解かれ、文化二年赦免され学問所の助教に挙げられる。同三年「日本外史」を豊臣氏まで脱稿。同六年十二月から備後神辺の菅茶山の塾に身を寄せ、同八年二月上京、その後は儒者・文人として身を立て、篠崎小竹・梁川星巌・大塩平八郎らと交わって地位を確立、京都で別家を立てた。同十一年正月、京都の医師小石元瑞の女梨影を後室に迎え、支峰・三樹三郎（鴨涯）らが生まれた。文化四年「日本外史」「新策」の稿本を完成したのちも、加筆・修正を続け、文政十年「日本外史」二十二巻を、陸奥白河藩主松平定信に献上。「新策」はのち「通義」の底本となり、「日本政記」とともに代表作となった。詩文としては、「山陽遺稿」「日本樂府」などを著し、また文政元年から翌年にかけての九州への旅行をはじめ各地への旅行中紀文・詩文・絵画を多く著した。朱子学については「書後」「春秋講義録」のほか未稿「尚書」「易経」「孫子」、その他「先友録」「書後題跋」「文集」などその数は多く、「日本外史」を始めとする歴史書の著述による、幕末以降思想界に与えた影響は大きい。天保元年病気となり、同三年六月十二日没した。享年五十三歳。京都東山の長楽寺に葬る。（「三百藩家臣人名伝」）

書き下し

廿九日　出渕生来たる。山口生も亦来たる。午後黄昏に至り、乃ち去る。出渕生山陽幅を拉し去る。

口語訳

廿九日　出渕君が来る。山口君も亦来る。午後、黄昏になって、それで帰る。出渕君が山陽の掛け軸をもって帰る。

三月

一日　雨　自今日灸療以予防中風

書き下し

一日　雨　今日より灸療。以て中風を予防する。

口語訳

一日　雨　今日からお灸の治療。それで中風を予防するのだ。

二日

三日　雨

四日　日曜　又雨　出渕生来

書き下し

四日　日曜　又雨。出渕生来る。

口語訳　略す

五日

六日　訪岩本生謀隣地

書き下し

六日　岩本生を訪ね、隣地のことを謀る。

口語訳　略す

七日　訪能美円乗議隣地事

注　・能美円乗　山県郡出身の僧侶。明治五年（1872）旧城内に開成舎を興す。開成舎ははじめ普通小学科と漢文・英語・数学を教える変則学校とがあり、のち明治二十一年軍人子弟の教育をする特別科、および中等学校程度の文学科・小学科の三科を設け、私立の学校として大きな足跡を残した。（「新修広島史」による）

書き下し

七日　能美円乗を訪ね、隣地の事を議す。

口語訳

七日　能美円乗を訪ね、隣地の事を協議する。

八日　雨　林熊吉来話

書き下し

八日　雨　林熊吉来る。話す。

口語訳　　略す

九日
十日　日曜　招丸山・長山・山田・蔵田四家修宴
注　・修　おこなう。おさめおこなう。
書き下し
十日　日曜　丸山・長山・山田・蔵田四家招く。家宴を修す。
口語訳
十日　日曜　招丸山・長山・山田・蔵田四家を招く。家の宴をおこなう。

十二日
十三日　夜　伶人街火
注　・伶人　伶官。雅楽を演奏する人。音楽を演奏する人。
書き下し
十三日　夜、伶人街火。
口語訳
十三日　夜、音楽に携わる人たちの街が火事。

十四日　燈火余適校合頻繁太忙　聞足立卓爾男莞弥昨夜火場得大傷
注　・校合(きょうごう)文字その他の記載事項の相違を他の本を照らし合わせなどして記録すること。また訂正したり異動かき記すこと。
書き下し
十四日　燈火余適の校合頻繁。大いに忙し。足立卓爾の男莞弥昨夜火場大傷を得。
口語訳
十四日　燈火余適の校合が頻繁である。たいへん忙しい。足立卓爾の息子莞弥昨が昨夜火事場で大けがをした。

十五日
十六日　山県確蔵来
書き下し
十六日　山県確蔵来たる。
口語訳　略す

十七日
十八日　日曜　赴詩会於竹内氏
書き下し
十八日　日曜　詩会竹内氏に赴く。
口語訳　　略す

十九日
廿日　春季皇霊祭　朝訪山県格蔵議隣地事　午後格蔵来
注　・春季皇霊祭　春秋二回、彼岸の中日に天皇が皇霊殿で行う皇霊の大祭。ここでは、春に行うものをいう。
書き下し
廿日　春季皇霊祭。朝山県格蔵を訪ぬ。隣地の事を議す。午後格蔵来たる。
口語訳　略す

廿一日
廿二日　矢野代五郎来　拉横川　帰途訪山田汶淌　訪山岡
書き下し
廿二日　矢野代五郎来たる。横川に拉す。帰途山田汶淌を訪ぬ。山岡を訪ぬ。
口語訳
廿二日　矢野代五郎が来る。横川に連れ出す。帰途、山田汶淌を訪ねる。山岡を訪ねる。

廿三日　泉邸稲荷祭　浅野氏展書画器物　供諸人之縦覧　今日依例展設　余亦往覧
注　・縦覧　思うままに自由にみること。勝手にみてまわること。
書き下し
廿三日　泉邸稲荷祭。浅野氏書画器物を展す。諸人の縦覧に供す。今日例に依りて展設。余亦往覧す。
口語訳
廿三日　泉邸の稲荷祭。浅野氏が書画器物を展示する。いろいろな人が自由に閲覧できるようにとされている。わたしもまた出かけて行って閲覧する。

廿四日
廿五日　日曜
廿六日　朝広兼里輔来校定其文詩
書き下し
廿六日　朝広兼里輔来校す。其の文・詩を定む。
口語訳
廿六日　朝、広兼里輔が来校した。其の文詩をきちんとした形に整える。

廿七日　山内静一母・夫人五十祭見招
書き下し
廿七日　山内静一母・夫人五十祭に招かる。
口語訳　略す

廿八日
廿九日　村上弘来　話其解職
書き下し
廿九日　村上弘来たる。其の解職を話す。
口語訳　略す

三十日
三十一日　伝柔術生十三人以其術余饗諸人
書き下し
三十一日　伝柔術生十三人に以其の術を以て伝ふ。余諸人を饗す。

四月
一日　日曜　向井行義招余　友村生亦至　驚
書き下し
一日　日曜　向井行義余を招く。友村生も亦至る。驚
口語訳　略す

二日　驚　入門五人
書き下し・口語訳　略す

三日　神武天皇祭　招生徒拝御容？天朝之厚徳与友村・丸山・長三子飲
注　・神武天皇　記紀にみえる伝説上の初代天皇。「日本書紀」によれば、在位76年で127歳で没したという。その人物像の創作の過程やモデルについては諸説あり決定をみていないが、7世紀前半ごろ継体天皇をモデルに創出したとみる説が妥当であろう。初代天皇としての神武像は、幕末から維新の政治過程において突如浮上するもので、1887年(慶応3)年の王政復古の布告には「神武創業の昔」を新政の理想として掲げた。近代の天皇制国家では天皇制の源流を神武天皇に求め、神武即位の日を紀元節と定め、祭日とし、さらに神格化して橿原神宮を創設した。大日本帝国憲法も紀元節に発布された。日米開戦の前年1940年(昭和15)には神武天皇即位2600年記念式典が国家行事として盛大に開催されるなど、天皇崇拝と軍国主義に利用された。(小学館「日本歴史大辞典」)　・容？　「？」の文字は「説」のようにも思われるが、「容説」とした場合、該当することばが見当たらない。・天朝　朝廷、また、天子を敬っていう語。朝廷の統治する国。日本の国。　・厚徳　深く、厚い徳。
書き下し
三日　神武天皇祭。　生徒を招き、御容？天朝の厚徳を拝す。友村・丸山・長三子と飲む。
口語訳
三日　神武天皇祭。　生徒を招き、御容？朝廷の厚い徳を拝する。友村・丸山・長の三君と飲む。

四日
五日　雨
六日　雨
七日　砂本貞吉将西洋訪之贐以襪　始服鉄飴煎
注　・砂本貞吉　安政三年（1856)～昭和十三年（1938）牧師。広島女学会（広島女学院の全身）創立功労者。広島メソジスト教会（日本基督 教団広島流川教会の前身）の創立者で初代牧師。己斐（現広島市西区）に生まれ、1882年（明治15）航海術を修める目的で渡英しようとしたが、寄港先の米国にとどまり、キリスト教に入信。米国で神学校に学び、福音伝道の熱意に燃えて1886年（明治19）に帰国、直ちに親戚・友人に伝道を開始。当時、神戸在住の宣教師J・W・ランバス師の協力を得て教会を設立（1887）広島の子女に対する伝道と新しい女子教育のための女子塾、広島女学会を創立した。のちハワイ、日本各地の教会で牧師を歴任し、東京で死去。墓地は広島市西区己斐町の茶臼山にある。(「広島大辞典」)
・贐(ジン・はなむけ)旅立つ人におくる品物。送別の気持ちをつくすせんべつ。・襪(べつ)布を縫ってつくった靴下。　・鉄飴煎　不明。
書き下し
砂本貞吉将に西洋に訪せんとするの贐に襪を以てす。始めて鉄飴煎を服す。

八日　観田楽於妙慶院　購謡本三十冊
注　・田楽　平安時代から行われた芸能。もと田植えの時に田の神をまつるため笛・太鼓を鳴らして高石孝子の畔で舞った田舞(たまい)に始まるという。鎌倉時代から室町時代爾かけて田楽能を生んで盛んになった。のちに衰え、現在種々のものが民俗芸能として各地にみられる。　・妙慶院　海雲山・来迎寺と称す。浄土宗にして新川場に在り。もとは鎮西派京都知恩院の末寺にして安芸国中同派本山の末寺触頭たりき。往昔当院は安南郡(今の安芸郡)尾長村に在りて、来迎寺と称せしも、其れ以前のことは詳らかならず。慶応五年福島氏、今の寺地に移し、寺領百石(一説に二百石又三百石)を附し、菩提寺と定め、明智光秀の遺子なる僧僧誉を招きて住職たらしむ。(是は福島正則の内室は光秀の妹にして、増誉は其の甥に当たればなり)正則の母堂の法諡妙慶といふ。因て院号となす。其の時境内甚だ広闊にして、今の章正清院・海雲寺・戒善寺・等覚寺等の寺地は皆其の領域内に属せしも、福島氏国除の後も暫く縮少して現今の地域なれり。宝暦八年の大火に、さしも古来の大伽藍も灰燼に帰し、享和元年再び罹災せり。(以下略す)(「広島市史」寺社誌)
書き下し
八日　田楽を妙慶院に観る。　謡本三十冊を購ふ。
口語訳
八日　田楽を妙慶院で観る。　謡本三十冊を購入する。

九日
十日　雨
十一日　海棠開到七分
注　・海棠　バラ科の落葉低木。日本では古くから観

賞用に栽培されている。四、五月ごろ、長い花柄にリンゴの花に似た、３～５センチメートルの紅色の五弁花が開く。

書き下し

十一日　海棠開く。七分に到る。

口語訳　　略す

十二日

十三日　観海棠酌酒　山内生来　共登二葉山　暮至長氏飲

注　二葉山　広島市東区、広島駅の北0.8kmにある山。標高139。東西に細長い花崗岩の山。山麓には東照宮、饒津神社をはじめ神社が多く、斜面にはシリブカガシ林が広い。南斜面は市街地に面して眺望がよく、昭和30年頃から宅地化が進む。泉邸の名で親しまれる縮景園はこの山を借景とし、泉水はここから引いていた。頂上まで車道が通じ、頂上には仏舎利塔がある。（角川書店「広島県地名大辞典」）

十三日　海棠を観て酒を酌む。山内子来たる。共に二葉山に登る。暮に長氏至り飲む。

口語訳　　略す

十四日

十五日　集串田氏　以春日山行命題　有詩別録

書き下し

十五日　串田氏集するに春日山行を以て命題とす。詩有り、別に録す。

口語訳

十五日　串田氏が「春日山行」と題をつけた詩集をつくる。詩がある。別に記す。

十六日

十七日　丸山氏挙男　余名之曰吉男

書き下し

十七日　丸山氏男を挙ぐ。余名に名づく。曰く吉男と。

口語訳　略す

十八日　祭祖考・得一郎　得児死五年也

注　・祖考　死んだ祖父と父。また、遠い先祖。　・得一郎　山田養吉先生の長男。明治17年７月11日、泉邸裏の川で水泳訓練中水死した。

書き下し

十八日　祖考・得一郎を祭る。　得児死して五年なり。

口語訳　略す

十九日　長氏女誕

書き下し

十九日　長氏女を誕(う)む。

口語訳　略す

廿日　笠山氏来訪　笠山姓山本　名篤　作州人　笠山其号　為余刻印六顆　謹厳可観　造与佐村・遠藤書

注　・謹厳　非常にまじめで、他人の言ううわついたことを好まぬこと。また、そのさま。

書き下し

廿日　笠山氏来訪。笠山姓山本。名は篤。作州の人。笠山其の号なり。余の為印六顆を刻す。謹厳観るべし。佐村・遠藤と書を造す。

口語訳

廿日　笠山氏が来訪する。笠山の姓は山本。名は篤。作州の人。笠山其の号である。私の為に印六顆を刻ってくれた。謹厳な人柄は観るに値するだろう。べし。佐村・遠藤と書をつくる。

廿一日　設肴酒　餞平野久雄

書き下し

廿一日　肴酒を設け、平野久雄を餞(おく).る。

口語訳　　略す

廿二日　山田翁来　請廿四必臨其寿宴

注　・寿宴　長寿の祝いの宴。

書き下し

廿二日　山田翁来たる。廿四必ず其の寿宴に臨むを請ふ。

口語訳

廿二日　山田翁がやって来る。廿四日必ず山田翁の祝いの宴に臨席するように要請された。

廿三日　丸山氏見招児生之第七夜也

注　七夜　こどもが生まれて七日目の祝い。またその日。

書き下し

廿三日　丸山氏に招かる。児の生の第七夜なり。

口語訳

廿三日　丸山氏に招かれる。子どもが生まれてお七夜である。

廿四日　参山田翁寿宴　有詩別録

書き下し

廿四日　山田翁の寿宴に参る。詩有り、別に録す。

口語訳　　略す

廿五日　長氏見招七夜也

書き下し

廿五日　長氏に招かる。七夜なり。

廿六日　北川精一転任雲州松江　見招　有詩別録

書き下し

廿六日　北川精一雲州松江に転任す。招かる。詩有り、別に録す。

口語訳　　略す

廿七日　拉笠山至縮景園

注　・縮景園　泉邸ともいう。中区上幟町にある庭園。国の名勝。藩主浅野長晟が別邸として元和六年(★★)に築造。宗箇流の祖となった茶人上田宗箇の作庭で、入り口正面に数寄屋造りの清風館、築山に悠々亭といった茶室・茶亭を設け、中央に掘った濯桜(たくえい)。池の回りに山水、花鳥を巧みに配した回遊式庭園。北の二葉山と西の己斐連山を借景としている。池を南北にまたぐ太鼓橋は、7代重晟が京都から清水七郎衛門を招いて改造させたもので、跨虹(ここう)橋と呼ばれる。縮景園の由来は、中国の西湖周辺の景色を模して縮小したという説と、一般の山川の景、京洛の態、深山の趣を集約したという説がある。昭和15年浅野家が広島県に寄付してから、一般に開放された。昭和20年に投下された原爆で壊滅したが、県による復旧で往時の姿を取り戻しつつある。県立図書館・県立美術館が隣接し、数百メートル西に広島城跡もあり、市民の憩いの場である。(角川書店「広島県地名大辞典」)

書き下し

廿七日　笠山拉して、縮景園に至る。

口語訳　　略す

廿八日　鎌田富之助・林熊吉来　富之助福島人　為裁判吏　知篆刻　近入我吟社

注　・篆刻　木・石などの材料に、印として文字を彫り付けること。印刻。多く篆書の文字が用いられたからいう。

書き下し

廿八日　鎌田富之助・林熊吉来たる。富之助福島の人なり。裁判吏たり。篆刻を知る。近く我が吟社に入る。

口語訳　　略す

廿九日　日曜

三十日　鎌田生来　贈以印一顆

書き下し

三十日　鎌田生来たる。贈るに印一顆を以てす。

参考書

広島市史、広島市史(社寺史)、新修広島史、広島市学校教育史、日本国語大辞典、緩和大辞典、広緩和辞典、漢字源、広島県大百科事典、広島県地名大事典(角川書店)、日本歴史大事典(小学館)、三百藩家臣人名事典(新人物往来)、修道学園史(昭和53年版)、

おわりに

明治廿一年の日記を12月まで紹介する予定にしていたが、諸般の事情でやむなく４月までとなってしまった。残念ではあるが、残りの部分は次回に譲りたい。

学園だより

スクバンＯＢ大奮闘　野球班16強に大きな後押し

今年の夏は、なでしこジャパンのワールドカップ優勝や全国高校野球での如水館高校の全国ベスト８進出など、震災での暗いムードを吹き飛ばす、多くの勇気や感動をもらいました。

我が修道生も頑張りました。ワンダーフォーゲル班はインターハイで惜しくも２位（携行品のペンチがニッパーであったため減点され、その差で優勝を逃しました・・・残念）

また、野球班も夏の高校野球広島県大会で、久々のベスト16に進出しました。この躍進の陰にはスタンドから声をからして声援を送る現役班員・保護者・ＯＢによる応援団の力がありました。

高校野球の夏の大会といえば、太鼓やトランペットによる賑やかな応援も見どころです。如水館をはじめとした甲子園常連と言われる強豪校は、全学を挙げての応援を繰り広げます。本来であれば、我が修道においても、高校吹奏楽において屈指の実力を誇るスクールバンド班が応援に駆け付けることができれば鬼に金棒なのですが、残念ながら、サマーコンサートやコンクールの日程と重なっているため、なかなか実現が難しい状況でした。

このことを聞きつけたスクバンＯＢが、せっかくの夏の大会に華を添えてあげたいと、高校46回の水口直也さんのほか十数名が、わざわざ楽器を持って集まってくれました。なかには年休をとって応援に駆け付けてくれたＯＢもいたそうです。

太鼓やトランペットの力を得て大盛り上がりのスタンド応援団の暑い声援に応え、現役野球班員たちも、ベスト16というすばらしい快進撃を見せてくれました。

楽器同士のアンサンブル（合奏）だけでなく、グランドにいる選手たちとスタンド応援団、現役生とＯＢという、修道らしいアンサンブルを感じた一夏でした。

暑い中応援に駆け付けてくださいました皆様、本当にありがとうございました！

（7月24日付け朝日新聞掲載記事）

修道のスタンドには、吹奏楽部にあたるスクールバンド班のＯＢ９人が駆け付け、応援演奏した。チャンスのときには同校ＯＢの歌手、吉川晃司さんの「モニカ」で盛り上げた。 応援を呼びかけたのは、広島市役所勤務の水口直也さん（36）。現役は毎年、サマーコンサートやコンクールの練習で駆けつけられないため、「せっかくの夏の大会を応援してあげたいと思った」という。 すべて手弁当で、自前の楽器を持って各自球場に集まり、入場券を買ってスタンド入り。応援席の野球部員と声を掛け合いながら選手たちに演奏を届けた。相手投手に抑え込まれ、モニカは２回しか演奏できなかったが、水口さんは「来年以降も続けたい」と話した。主将の松永一輝君（３年）は「演奏があるとないとでは大きく違う。モニカがかかったのもわかった。力になりました」と話した。（23日、修道対山陽）

事務局だより

2011年春の叙勲受章おめでとうございます。

大田　哲哉氏（高校11回）

学校法人　修道学園理事・修道学園（中・高）同窓会名誉会長

旭日中綬章

広島都市圏での次世代型路面電車システム（LRT）を推進された。1996年から14年間広島電鉄株式会社社長を務められた。修道学園においては、2005年より学園理事を務められ現在に至り、また2005年より３年間修道学園（中・高）同窓会会長を務められた。

碓井　静照氏（高校８回）

修道学園（中・高）同窓会評議員

旭日小綬章

８歳の時、爆心地から北2.4キロの牛田本町（現東区）の自宅で被爆。終戦後、原爆病などに苦しむ人々を助けようと医者を志され、1974年東区に内科胃腸科医院を開設された。その後広島県医師会常任理事、広島市医師会会長を歴任され、2004年に広島県医師会会長となられた。

小松　昭紀氏（高校６回）

広島修道歯科医会会長　修道中学校・修道高等学校歯科医

旭日双光章

歯科医歴46年間、広島市歯科医師会会長を2000年から７年間務められた。全国に先駆け歯周病予防に取り組む市民表彰の制度をつくられた。修道中学校・修道高等学校の歯科医としても生徒の歯の健康に貢献いただいた。

訃　　報

森　孝慈氏（元サッカー日本代表監督・メキシコ五輪サッカー銅メダリスト）（高校14回）

平成23年７月17日　ご逝去　享年67歳

氏は修道高校より早稲田大学をへて、三菱重工（現浦和レッズ）入り。主にMFで活躍。メキシコ五輪の代表選手として全試合に出場し銅メダル獲得に貢献。Jリーグでは浦和レッズの初代監督を務める。2006年にサッカー殿堂入り。

心からご冥福をお祈りいたします。

●「修道学園同窓会創立100周年記念号」会報誌へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙中にもかかわらず多数の方よりご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集しておりますので積極的に原稿をお寄せいただきますようお願い申し上げます。次回の発行は平成24年３月の予定です。